

若草物語

LITTLE WOMEN

ルイザ・メイ・オルコット L. M. Alcott

青空文庫

作者について

この「若草物語」（原名リツル、ウイメン）は、米国の女流作家ルイザ・メイ・オルコット女史の三十七才の時の作です。父を戦線におくり、慈愛ふかい聡明な母にまもられて、足らずがちの貧しい生活ながら、光りを目ざして成長していく四人の姉妹を描いています。それは、けっして坦々たる道ではなく、不平、憎悪、苦悶、嫉妬など、さまざまのものが、彼女たちの健気な歩みを妨げるのであります。そして、その多くの試練にたちむかう、四人の姉妹の、それぞれちがった性格の描写は、まことに、明暗

多彩、克明精細、しかも、この一篇にみなぎる愛と誠とは、いかなる読者の心をも魅了し、感激させずにはおきません。なお、この物語は、オルコット女史が、いつているように、ほとんどじぶんたちの姉妹をモデルにしたものであり、家で起つた事件もとりにいてあります。それがために、この物語の四人の姉妹は、ありふれた娘であるにかかわらず、心にせまる真実性があり、いつも生きているし、長くも生きるのです。

それですから、この作は千八百六十八年に公にされて以来、全世界にむかえられ、もう何十万部発行されたかわかりません。そして、今もなおベスト・セラー中にかぞえられています。

オルコット女史について、簡単に御紹介しますと、出生日は、

千八百三十二年十一月二十九日、出生場所は米国ペンシルバニア州のジャーマン・タウン、父は教育家でした。この父は個性を尊重する理想主義の教育を主唱し、私学校を建設しましたが、経営に失敗し、したがって、一家は物質的には恵まれませんでした。四人の娘たちは精神的にゆたかな生活をしました。

オルコット女史は、二女で、この「若草物語」のジョウに作者の面影が出ていますが、文筆の才に恵まれ、教鞭をとるかたわら、作家志願の精進をつづけ、二十三才のとき、「花物語」という処女作を出しました。

千八百六十一年、女史の三十歳のときに、南北戦争が起り、女史は篤志看護婦となって献身的なはたらきをしました。その後、

三十七歳に「若草物語」つづいて、「グッド・ワイブス」「リッル・メン」など大作を世に送りました。「若草物語」を公にしてからの女史は、物質的にもめぐまれ、父の負債をかえし、母を安楽にさせ、妹のメイには絵の修行をさせてやり、自分もあこがれのヨーロッパ旅行をして、イタリイに滞在しました。

けれど、母がなくなつてから、女史の肩にまた重荷がかかつてきました。妹のメイは結婚後しばらくして死に、残されたあかんばんを引きとらなければなりません。女史はいよいよはたらくきました。女史の知人は同情して補助をしようとしたが、女史は補助を受けるのがいやで、困難のなかにも忍耐して努力しました。そうして、女史は千八百八十八年三月六日、五十五歳で、

父の死後わずか二日、最愛の父の後を追って、ボストン市で永遠の旅路にのぼりました。女史の一生は、愛と誠をもってする努力精進の一生でありました。

第一 巡礼あそび

「プレゼントのないクリスマスなんか、クリスマスじゃないわ。」と、ジョウは、敷物の上にねそべって不平そうにいました。

「貧乏ってほんとにいやねえ。」と、メグはじぶんの着古した服を見ながらため息をつきました。

「ある少女が、いいものをたくさんもち、ある少女が、ちつとももたないなんて、不公平だと思うわ。」と、小さいエミイは、鼻をならしながらいきました。

「でもね、あたしたちは、おとうさんもおかあさんもあるし、こ

うして姉妹があるんだもの、いいじゃないの。」と、ベスが、すみのほうから満足そうにいいました。

ストーブの火に照らされた四つのわかわかしい顔は、この快活な言葉でいきいきとかがやきましたが、ジョウが悲しそうに、「だって、おとうさんは従軍僧で戦争にいつておるすだし、これからも長いことお目にかかれなと思うわ。」と、いったとき、
「またもやくらい影におおわれ、だれもしばらく口をききませんでした。けれど、やがてメグが調子をかえて、

「おかあさんが、今年のクリスマスは、プレゼントなしとおつしやったのは、みんな暮しがつらくなるし、兵隊さんたちが戦争にいつているのに、たのしみのためにお金を使うのはいけないと、

お考えになったからよ。あたしたち、たいしたことはできないけど、すこしの犠牲ははらえるし、よろこんではらうべきだわ。でも、あたしははらえるかしら？」

メグは、ほしいものを犠牲にするのがおいしいというように頭をふりました。

「だけど、あたしたちのアイドルを献金したって、たいして兵隊さんの役にたつとは思えないわ。あたしはおかあさんやあなたがたから、プレゼントがもらえないのはいいとして、じぶんでアンデインとシントラム（本の名）を買いたいわ。前からほしかったんですもの。」と、本の好きなジョウがそういうと、ベスはため息をつきながら、

「あたしはあたらしい譜本を買いたいわ。」

エミイも、きつぱりと、

「あたし、フェバアの上等の色鉛筆がほしいわ。ほんとにあたしいるんですもの。」と、いいました。ジヨウは、

「おかあさんは、あたしたちのお金のこと、なんにもおっしやらなかつたわ。だから、めいめいほしいものを買ってたのしみましようよ。これだけのお金をもうけるのに、みんなずいぶん苦労したんだもの。」と、紳士がやるように長靴のかかとをしらべながらいいました。

「そうよ、ほとんど一日中、あのやつかいな子供たちの勉強を見てやるのたまらないわ。」と、メグがまたも不平をいいますと、

つづいてジヨウが、

「そんなことあたしの半分の苦勞じゃないわ。あたしは、神経痛で氣むずかしいおばあさんに使われてさ。どんなにしてあげても氣にいらなくて、いつそのこと窓からとびだそうか、それとも、おばあさんの横つ面をはりとばしてやろうかと思うくらいよ。」

「不平、いってもしようがないけど、皿をあらったり、そこらを片づけたり、そんな家のなかの仕事は、ほんとにいやな仕事だわ。手がこわばって、ピアノひけないわ。」

ベスは大きなため息をついて、荒れたじぶんの手を見ました。すると、エミイも大声でいいました。

「あたしぐらい苦勞しているものないわ。だって、あなたたちは、

勉強ができないといっていじめたり、服がおかしいといって笑ったり、おとうさんが金持でないといったり、鼻のかっこうがわるいといってあざけつたりする生意気な連中と、いっしょに学校にいかなくてもいいんですもの。」

こうして、みんなが不平をぶちまけたあげく、メグがいました。

「あたしたちの小さいとき、おとうさんのなくされたお金が、今でもあったらいいと思わない？ そうしたら、どんなに幸福でしょう。」

すると、バスが聞きとがめていいました。

「こないだ、ねえさんは、キングさんのとこの子は、お金があっ

ても、いつもけんかしたり怒ったりしてるから、あたしたちのほうはずっと幸福だつていったじやないの？」

「ええ、いったわ。あたしたちは、はたらかなければならないけど、ジョウのいうように、たのしいあいぼうですもの。」

「ジョウねえさん、あいぼうだなんてぞんざいな言葉だわ。」と、エミイは、敷物の上にねそべっているジョウのほうを見ていいました。ジョウは、すぐに起きなおつて、エプロンのかくしに、りよう手をつつこんで、口笛を吹きはじめました。

「ジョウ、およしなさい。まるで男の子みたい。」

「だから、あたしするの。」

「あたし、下品な、女らしくない子は大きらい。」

「あたし、気どり屋のおすまし、大きらい。」

すると、仲裁者のベスがおどけ顔で、

「おなじ小さな巢にいる小鳥、いつもなかよしあらそわぬ。」と、うたいだしたので、二人のどがった声も笑い声となりましたが、メグがねえさんぶつてお説教をはじめました。

「二人ともいけないわ。それにジヨウは、もう男の子みたいなおいたはやめて、しとやかになさいよ。せいも高いし髪もゆつてるのですものもうわかい婦人だわ。」

「そんなら二十才まで、おさげにしとくわ。あたし、男の子のあそびごとや仕事や身なりが好きなのに、女に生れてつまらないわ。この頃は、おとうさんといっしょに、戦争がしたくてうずうずし

てるのに、家にいてよぼよぼばあさんみたいに、編物をしてるだけなんだもの。」

「かわいそうなジョウねえさん、まあ名前でも男の子らしくして、あたしたちのいさんになって、がまんしておくんだわねえ。」
ベスがなぐさめるようにいいました。メグは、またお説教をつづけました。

「それから、エミイは、気むずかし屋で、かたくるしいわ。今はかわいいけど、気をつけないと大人になったら、がちようみたいに気どり屋さんになるわ。上品ぶらないときは、しとやかなのも、いい言葉も好きだけど、あんたのませた言葉は、ジョウの下品な言葉とおなじように、よくないわ。」

「ジヨウがおてんばで、エミイが気どり屋さんなら、ねえさん、あたしはなあに？」と、ベスはじぶんもお説教されたがつて口をはさみました。

「あなたは、かわいい子、ただそれだけよ。」

メグは、やさしくそういいましたが、これには、だれも反対しませんでした。

ところで、みなさんは、この四人の姉妹がどんな人からか、知りたいでしょう。おもてには十二月の雪がふり、家のなかには、たのしそうにストーブの火のもえている夕暮のうすやみのなかで、編物をしている四人姉妹をスケッチしてみましよう。その前に、部屋のようすをいえば、敷物の色はさめ家具類は質素ですが、壁

にはりつばな絵が一つ二つかけられ、本棚にはぎつしりと本がならび、出窓には菊やばらが咲いています。古い部屋ですが、平和な家庭のなごやかさが、隅々にまで充ちわたっていました。

長女のマアガレット（メグ）は十六で、かわいい娘です。ふとつて、目が大きく、とび色の髪はふさふさとしており、口もとがかわいく、じぶんでもいくらか得意の白い手をしています。

十五になるジョウは、せいが高く、やせて、小麦色の肌をして、すらりと長い手足をもてあましているようすから、なんとなく仔馬を思わせます。きりつとした口もと、おどけた鼻、きつい灰色の目をもつ顔は、ときにはするどくなり、ときにはおどけ、ときには思い深げになります。その長いゆたかな髪は、すぐれて美し

いけれど、いつもむぞうさにネットのなかに束ねています。

みんながベスとよぶエリザベスは、ばら色の血色の、くせのない髪の毛の、あかるい目をした十三の少女で内気でおだやかですから、おとうさんが「ひっそり姫」という名をつけたのは、たしかにうってつけでした。

エミイは、一ばん下ですが、じぶんでは一ばんだいじな人物だと思っっています。目は青く、ちぢれた金髪を肩までたらし、あどけない少女で、青白く、やせて、いつも起居ふるまいに気をつける、わかい貴婦人です。

時計が六時をうちました。ベスはストーブのまわりを掃いて、

スリッパをならべてあたためました。やがて、おかあさんのお帰りです。四人の顔によるこびがかがやき、メグはお説教をやめてランプをとりました。

すると、その古いスリッパが問題になりました。みんなが、じぶんが買っておかあさんにあげるといいはり、また、一もめ、もめそうでしたが、ベスが、

「みんなで、おかあさんにクリスマスプレゼントをあげましょうよ。じぶんのものは、買わないで。」と、いったので、それはいい思いつきだということになり、あれこれ考えたあげく、メグは上等の手袋、ジョウは上等のスリッパ、エミイはへりのついたハンカチ、ベスは coron 水の小瓶にきめました。

ジヨウは、せなかに手を組み、天井をあおいで部屋を歩きながらいいました。

「おかあさんには、わたしたちが、じぶんのものを買っていると
思わせておいて、びつくりさせてあげましょうよ。メグ、明日の
午後に買物にいかないと、クリスマスのお芝居のことで、するこ
とがたくさんあるわ。」

すると、メグがいました。

「あたし今度きりで、もうお芝居なんかしないつもりよ。あんな
こと子供くさいもの。」

「だって、ねえさんは一ばんの役者ですもの、ねえさんがぬけた
らおしまいよ。エミイ、さあ、いらつしやい。おけいこしましよ

う。気を失うところをなさい。あんたは火ばしみたいにかたくなるんだもの。」

「しかたがないわ。気を失うとこなんか見たことないんですもの。」

「こうやるのよ。手を組み合せて、ロデリゴ！ 助けて、助けて！ と気狂いみたいにさけびながらよろけて部屋を横ぎるの。」

ジヨウは、ほんとに悲鳴をあげてやってみせました。それにならってエミイもやりましたが、まるでぎこちなく、おお！ という声だって、絶望どころか、身体にピンでもささった時のようでした、ジヨウががっかりしてうめくと、メグは笑いだすし、ベスマおかしがって、パンをこがしてしまいました。

「おけいこしてもむだだわ、そのときになって、できるだけになさい、見物が笑つても、あたしのせいにしてはいやよ、さあ、それでは、今度はねえさんよ。」

それからは、すらすらと進行しました、ジヨウのドン・ペデロは長い科白をまくしたてて世をあざけり、魔女のハーガーは、ひきがえるのいっぴいはいった釜をのぞいて呪文をとなえ、ロ德里ゴは、おおしくも鉄のくさりをたちきり、ユーゴーは毒をあおいで苦しみながら死んでいきました。

「今までのおけいこのうちで、一ばんうまかったわ、」と、メグがいうと、ベスも「ジヨウねえさん、どうしてこんなにっぴなものが書けるの？ それに、お芝居もじょうずだわ、」

「それほどでもないけど、この『魔女の呪い』は、すこしはいいかもしれないわ、それはそうと、シエークスピアの『マクベス』がやってみたいのよ。」と、いって、

「目の前にちらつくは短剣か？」と、有名な悲劇役者のしぐさをまね、目の玉を光らし、虚空をつかんでいいました。すると、メグがさげびました。

「あら、フォークにさしてやいてるのは、パンじゃなくて、おかあさんのスリッパよ、」

なるほど、スリッパが火にかかっていました。ベスは、おけいこを見て夢中だったのです。みんなは大笑いしました。

「ずいぶん、たのしそうね。」と、戸口でおかあさんの声がしま

した。ねずみ色の外套を着て、流行おくれのボンネットをかぶったおかあさんも、娘たちの目には、この世でならびない、すばらしい人としてうつりました。

「今日はべつになんにもなかったの？　おかあさんは、明日送ります慰問箱の仕度でいそがしくて、御飯までに帰れなかったの。バス、どなたかお見えになった？　メグ、かぜはどう？　ジヨウ、あなたはひどく疲れているのね、さあさあ、みんな来て、キツスしてちょうだい。」

マーチ夫人はぬれた外套をぬぎ、あたたかいスリッパをはき、ソファに腰をおろして、エミイを膝にのせ、多忙な一日の一ばんたのしいときを、たのしむのでした、メグとジヨウとバスは、さ

つそくとびまわって、食事の支度をし、すべてととのうと、みんなテーブルのまわりにつきました。

「晩御飯がすんだら、みんなにおみやげをあげますよ。」

さつと、あかるいほほえみが、みんなの顔をかがやかしました。ジヨウは、ナフキンをほうりあげてさけびました。

「手紙だ、手紙だ、おとうさん、ばんざい！」

「ええ、いいお便りです。おとうさんは、おたっしやで、案じていたほどでもなく、この寒い冬を元氣でお過しなされそうですつて。」

おかあさんは、そういつて、まるで宝物でもはいつているように、ポケットをたたいて見せました。さあ、もうゆるゆる食事な

んかしてられません。パンを床に落したり、お茶にむせたりしてたいへんでした。

「さあ、それでは、お手紙を読んであげましょうね。」

みんなは、ストーブの前にあつまりました。おかあさんはソファにかけました。こういう非常のときの手紙は、つよい感動をあたえるものですが、この手紙もそうで、危険に身をさらしたとか、つらいとかということとは、すこしも書いてなく、露營、進軍、戦況などがいきいきとした筆で書かれ、たのしく希望にみちていましたが、最後のところで、大きな感動をあたえました。

「娘たちに、わたしの愛とキスをあたえて下さい。昼は娘たちのこと思い、夜は娘たちのために祈り日夜娘たちの愛情のうちに慰

めを見出しています。娘たちとあうまでの一年は、長く思われるが、待ちわびるそのあいだに、たがいに仕事につとめ、日々をむだにしないようにとお告げ下さい。娘たちは、御身には愛すべき子供であり、忠実に義務をおこない、心中の敵と勇ましく戦い、みごとにうち勝って、わたしが凱旋のときには、以前にもまして愛らしく、誇りうるように生長しているように、出発のときに申し聞かせたことを、すべてよく記憶していると思います。」

ここまできると、みんな鼻をすすりはじめました。涙をとめることはできません。

「あたしわがままだったわ、おとうさんが失望なさらないように、いい子になります。」と、エミイがいますと、メグが、

「みんないい子になりましたよ！ あたし見栄ばかり気にして、はたらくこときらいだったわ、もうやめるわ。」と、さげびました。

「あたしも、いい子になって、らんぼうなまねやすわ。どこかへ、いきたいなんて思わずに、家でじぶんのつとめをするわ。」

ジョウは、家でおとなしくしてるのは、敵一人や二人にたちむかうよりむずかしいと思いつながらいました。ベスは、だまつていましたが、青い軍用靴下でそつと涙をふき、身近の義務を果すための時間のむだにしまいとして、せつせと編みました。

おかあさんは、ジョウの言葉につづいた沈黙を、快活な声でやぶりました。

「あなたたちが小さかったとき、「巡礼ごっこ」の遊びをしたことおぼえていますか？ みんなせなかに、あたしの小布のふくろをしょって、帽子をかぶり杖をつき、まいた紙をもって、破滅の市の地下室から、日の照っている屋根の上までいき、そこで天国をつくるために、いろいろな美しいものをいただくくらい、うれしいことはなかったでしょう。」

みんなは、そのときのいろんなできごとを思いだして話しましたが、エミイまでが、もうこんなに大きくなつては、あんなあそびできないというのをとがめて、おかあさんはいいました。

「いいえ、年をとりすぎてはいません。あたしたちは、まあお芝居をしているようなものです。荷物はここに、道は目の前にあり

ます。よいことと、しあわせを求める心が、たくさんの苦労や、あやまちのなかを通りぬけて、ほんとの天国、いいかえれば平和に導いてくれるのです。さあ、小さい巡礼さんたち、今度はお芝居あそびではなく、本気でやって、おとうさんがお帰りになるまでに、どのあたりまで巡礼ができるか、やってみてはどう？」

「おかあさん、それで、荷物つてどこにありますの！」と、エミイが尋ねました。

「ベスのほかは、みんながじぶんの荷物が、なにか、いいましたよ。ベスは、きつとなにもないのでしよう。」

「いいえ、ありますが、あたしのはお皿とはたきと、いいピアノをもっている娘をうらやむしがることですね。」

「それでは、みんなでしましょう。巡礼ごつことというのは、よい人になろうと努めることね。」

メグは、考えこむように、そういいました。

「あたしたちは、今夜は、絶望の沼にいたのね、すると、おかあさんが来て、あの本のなかで、救助がやったように、ひきあげて下すつたんです。だけど、掟の巻物を、どうしましょう？」

ジヨウが、そういうと、おかあさんが答えました。

「クリスマスの朝、枕の下をごらんなさい。見つかるでしょうよ。」

ばあやのハンナが、テーブルを片づけているあいだに、四人の少女たちは、あたらしい計画について話し合い、それからマーチ

おばさんの敷布をつくるために、四つの小さな仕事かごがもちだされ、せっせと針をはこぶのでしたが、今夜はこのおもしろくない仕事に、だれも不平をいいませんでした。

九時に仕事をやめて、いつものとおり、おわる前に歌を合唱しました。バスはおんぼろピアノで、こころよい伴奏をしました。メグは笛のような声で、おかあさんと二人で、この合唱隊をリードしました。姉妹たちは、この歌を、

「きらりきらり、ちっちゃな、星さま」と、まわらぬ舌でうたったところから、今だにつづけています。おかあさんは生れつきうたがじょうずなので、これが行事の一つとなったわけでした。朝、まず聞えるのは、家のなかを、ひばりのようにうたうおかあさん

の声で、晩に聞える最後の声も、おなじたのしいその声でした。姉妹たちはいくつになっても、そのなつかしい子守唄を、聞きあきるといふことはありませんでした。

第二 たのしいクリスマス

クリスマスの朝、まだほのぐらい明方に、ジョウが一ばんさきに目をさました。ジョウは、おかあさんとの約束を思いだして、枕の下へ手をさしこみ、小さい赤い表紙の本をひきだしました。それはこの世でもっともすぐれた生活をした人の美しい物語で、よい道案内だと思いました。ジョウは、「クリスマス、おめでと

う。」といって、メグを起し、枕の下を見てごらんなきいといきました。ありました。やはり、あかい絵のある緑の表紙の本で、おかあさんの手でみじかい言葉が書かれていました。まもなく、ベスとエミイが目をさまし、枕の下に本を見つけました。一冊は鳩羽色、一冊は空色の表紙でした。みんなは起きなおり、本をながめて話し合いましたが、そのうちに東の空がばら色に染つてきました。

メグがいました。

「まい朝、目がさめたらすこしずつ読んで、その日一日、あたしを助けてもらいましょう。」

メグが読みはじめると、ジヨウは片手をメグの身体にかけ、ほ

おをすりよせました。ほかの二人もしずかに頁をくりました。三十分ばかりして、メグはジョウといっしよに、おかあさんにプレゼントのお礼をいいに階下へかけおりていきました。

「おくさまは、どこかの貧乏な人がおもらいに来たので、なにかいるものを見に、すぐお出かけになりました。おくさまみたいに、食物や着物や薪までおやりになる方はありませんよ。」と、ハンナが答えました。ハンナは、メグが生れてから、この家族といっしよに暮ってきて、女中というよりは、友だちとしてあつかわれているのです。

「すぐにお帰りになると思うわ。だから、お菓子をやいて、すっかり用意しておいてね。」と、メグはかごにに入れてソファの下に

かくしておいたプレゼントを、いざというときに、とり出せるようにしてから、

「あら、エミイのコロナ水の瓶は？」

「エミイが、リボンをかけるとかといつて、もっていったわ。」と。ジョウがいました。

「ねえ、あたしのハンケチいいでしょう。ハンナが洗ってアイロンをかけてくれたのよ。マークはあたしがつけたの。」とベスは、ぬいどりの文字をほこらしげにながめました。

「まあ、この子は、エム・マーチでなく、マザアなんてぬいどりして、おかしいね。」と、ジョウがいうと、ベスはこまったような顔をして、

「いけないの？、エム・マーチだと、姉さんもおなじだから。」

「いいのよ、それならまちがいつこないから。きつとおかあさんの氣にいるわ。」と、メグは、ジョウには顔をしかめ、ベスには笑顔を見せていました。そのとき、扉の音がしたので、ジョウは、「そらおかあさんだ、かごを早くかくしなさいよ。」

エミイが、いそいで入ってきました。

「どこへいつていたの？ うしろに、かくしているのなあに？」

メグは、怠け者のエミイが、朝早く外出してきたのを見てびっくりして尋ねました。

「笑っちゃいや。あたし小瓶を大瓶にかえてきたの。これでお金はないわ。もうよくばりはやめにするのよ。」

エミイのかわいい努力に感じて、メグはさっそく彼女を抱きしめ、ジョウは窓へいき、じぶんの一ばんいいばらの花をとってきて、その瓶をかざりました。

また扉の音がしました。かごはソファの下にかくされ、姉妹たちはテーブルにつきました。おかあさんがくると、姉妹たちは口をそろえていいました。

「クリスマス おめでとう 本をありがとうございました。もう読みはじめました。まい日読もうと思います。」

「みなさん、クリスマス、おめでとう！ さっそく読みはじめてうれしく思いますよ。つづけて読むようになさいね、ところで、食事の前に一言いいたいことがあります。すぐ近くに、あかちや

んを生んだ貧乏な女の人があります。火の気がないので、六人の子供たちが、ごごえないように、一つのベッドにだき合つてねえます。それに、なにも食物がないので、一ばん上の子が寒くてひもじくて、とても苦しんでいるといいにきました。みなさん、あなた方の朝御飯を、クリスマスのプレゼントにあげませんか？」

みんなは一時間近くも待つていたので、ひどくお腹がすいていたので、ちよつとのあいだ、だまつていました。が、ジョウが勇ましくさげびました。

「食べないうちに、おかあさんが帰つていらして、ほんとによかつた。」ベスは御飯を運ぶお手伝いをしたいといい、エミイは、クリームと軽焼を持つていつてあげるといいました。その二つと

もエミイの一ばん好きなものでした。メグは、早くもそばをつつみ、パンを大きな皿にもりました。おかあさんは、満足そうにほほえみながらいました。

「きつと、みなさんは賛成すると思っていました。さあ、来て手伝って下さい。帰ったらパンとミルクで朝御飯をすませて、夕飯にそのうめ合せをしましょう。」

すぐ仕度をして、みんなで出かけました。いってみておどろきました。なんと、あわれな部屋でしょう。窓はやぶれ火の気はなく、蒲団はぼろぼろでした。おかあさんは病気で、あかんぼうは泣き、青い顔のひもじい子供たちは、一枚の蒲団にくるまってかたまっていました。みんながはいつていくと、子供たちは目を大

きく見はり、青ざめた唇にほほえみをうかべました。

「ああ、神さま！ 天使たちがいらした！」と、そのあわれな女は、うれし泣きに泣きながらさげびました。ジョウは、

「頭をかけ手袋をはめたおかしな天使でしょう。」と行って、家中の者を笑わせました。

たちまち、この家にやさしい精霊がはたらきだしたように思われしました。薪を運んできた。ハンナは火をおこし、古い帽子や、じぶんの肩かけで窓のやぶれをふさぎました。おかあさんは、母親にお茶やかゆをあたえ、あかんぼうをじぶんの子供みたいに着物を着せ、これからお世話をしなすと約束してなぐさめました。姉妹たちは、そのあいだにテーブルの支度をし、子供たちを炉の

まわりにすわらせ、お腹のすいている小鳥たちを養うように食べさせました。

「ああ、おいしい、子供の天使！」と、子供たちは食べながらいつて、紫色にごごえた手をあたたかい火であたためました。

帰ってから、姉妹たちは、パンとミルクしか食べませんでした。が、それはたのしい朝御飯でした。おそらくこの市で、この少女たちより、幸福であった人はなかったでしょう。

おかあさんが、すこしおくれて帰って来たとき、プレゼントはもう用意され、ベスの陽気な行進曲とともに、メグがおかあさんを、ていねいに設けの席につけました。おかあさんは、ほほえみをたたえて、プレゼントについている札を読み、スリッパをすぐ

にはき、ハンケチにコロソ水をかけて、かくしにしまい、ばらの花を胸にさし、きれいな手袋をはめました。それから、たのしい談笑とくちづけがつづき、よい思い出してみんなの心に残るところばかりでした。

やがて、めいめい仕事をはじめました。仕事は晩のお芝居の支度で、金をかけずにあり合せのもので、気のきいた小道具や衣装をつくるのでした。

その晩、招かれた十人あまりの少女たちが、上等席のベッドの上にならびました。まもなくベルがなり幕があがりました。「魔の森」です。鉢植や箆筒を利用して森と洞穴をあらわしました。

魔女が、洞穴の炉にかかっている鍋をのぞきこんでいると、悪漢

ユーゴーが腰の剣をがちやつかせて登場しました。ユーゴーは、ロデリゴへの憎しみと、ザラへの愛をうたい、ロデリゴを殺してザラを手にいれたい決心をのべ、洞穴へしのびより、「おい、女、御用だぞ。」と、いつてハーガーに出てくるように命じました。

メグは、白い馬の毛を顔にたらし、赤と黒の衣をまとい、杖をもつてあらわれます。ユーゴーが愛の魔薬と死の魔薬を求めると、ハーガーは、あたえることを約束し、愛の魔薬をもつてくるように歌で妖精をよびました。

すると、やわらかな音楽につれて、洞穴のかげから、きらきらした翼をつけ、金髪にばらの花冠のかわいい妖精があらわれ、愛の魔薬をいれた金色の瓶をおとして、すがたをけします。そこで、

ハーガーがもう一度うたうと、ものすごいひびきとともに、真黒な小鬼があらわれ、しやがれ声で返事をしたかと思うと、黒色の瓶をユーゴーに投げつけてすがたをけしました。すると、ハーガーは、ユーゴーに、むかしじぶんの友人を二三人殺したことがあるから、じぶんは彼の計画のじやまをするつもりだといいます。かくて、幕はさがりました。

第二幕の舞台はりっぱでした。城の塔が高くそびえ、窓にランプがともっていました。青と白の衣をつけてザラがあらわれ、ロデリゴが来るのを待っていると、まもなく、羽かざりのある帽子をかぶり、赤い外套を着て、ギターをもったロデリゴが来て、塔の下でやさしく小夜曲をうたいました。ザラは、城をぬけだすこ

とを歌で答えます。そこで、ロ德里ゴは縄梯子をかけ、ザラはそれをつたっておりるのでした。

ところが、とんだことが起りました。それはザラが、衣の裾の長いことを忘れ、ロ德里ゴの肩に手をかけておりようとしたとき、裾がからまり塔はすごい音とともに倒れ、二人はその下敷になったのです。芝居はめちやめちやになりそうでしたが、気をきかしたドン・ペドロがとびこんできて「笑っちゃだめ、知らん顔をしてやるのよ。」といいながら、じぶんの娘のザラをすばやくひきだし、ロ德里ゴにむかつて立てと命じ、怒りと嘲りを浴せながら王国から追放するぞと宣告しました。ロ德里ゴはなにをと、その老人をののしり、立ち退くことを拒みました。その勇ましい態度

に、ザラもちからを得て、父である領主にたてついたので、彼は二人を城の牢屋にほうりこむことを命じますと、家来がだまつてひきたてていききました。

第三幕は、城の広間で、魔女ハーガーが、牢屋の二人を救い出し、ユーゴーを殺そうと思つてあらわれます。魔女はユーゴーの足音を聞いてかくれます。ユーゴーは二つのコップに魔薬をつぎ、小女に、「これを牢屋にいる囚人にあたえ、わしがすぐに行くと告げよ。」と、いいつけます。家来はそばへいつて、なにかを告げる間に、ハーガーは二人のコップを害のないものにかえます。小女はそれを運んでいき、ユーゴーはうたつた後に魔薬のはいたほうを飲み、もだえ死にます。そこで、ハーガーは、じぶんの

したことを告げますが、その歌は、一ばんすばらしいできばえでした。

第四幕、ロデリゴが、ザラにうらぎられたと知って、絶望して胸に短刀をつきさそうとします。そのとき部屋の下で歌がうたわれザラの心はかわらないが、今あぶない目にあっているから、ロデリゴにもし真心があるなら、ザラを救いだせると告げます。ロデリゴはよろこび、投げあたえられたかぎで扉を開け、くさりをたち切つて愛人を救いに走ります。

第五幕は、ザラと父ドン・ベデロのはげしい争いからはじまります。父はザラを尼寺へやろうとしますが、ザラは聞き入れず、悲痛な訴えをつづけ、気絶しそうになったとき、ロデリゴがきて

結婚を求め、つれていこうとします。父はロデリゴが金持でないのを理由にこばみます。そこへ、家来がハーガからの手紙と袋をもつてきますが、手紙にはハーガーは、わかい二人に遺言によつて莫大な財産をあたえ、もしザラの父がわかい二人を幸福を妨げるならば、その身におそろしい呪いがかかると書いてありました。そして、袋を開けると、ブリキの金貨がきらめきました。これで、頑迷な領主の心もとけ、わかき二人の結婚を許したので、一同はたのしい合唱をして、感謝のいのりのうちに、愛する二人は、ザラの父の前にひざまずき、祝福をうけるところで幕がおりました。嵐のような喝采がおこりましたが、上等席のベッドが、きゆうにたたまれ、大きわぎになりました。幸にけがもなく救いだされ

ましたが、そのさわぎのおさまらないうちに、女中のハンナがあらわれ、

「おくさまが、みなさんに、夕飯に階下へ来るようにとおっしゃつてです。」と、いいました。

これは、ふいうちで、食卓を見たとき、息がとまるほどおどろきました。だって、アイスクリームが、赤と白と二皿、お菓子、果実、フランスボンボン、そして、食卓の上には、温室咲きの大きな花束がありました。

「妖精が下すつたの？」と、エミイ。すると、ベスは、
「サンタ・クロースよ、きつと。」

メグは、白いひげをはやし、白い眉毛をつけたまま、

「おかあさまだわ。」と、いいました。ジヨウは、

「マーチおばさまが、すてきな思いつきで、とどけて下さったのよ。」と、いいました。

おかあさんは、にっこり笑いながら、

「みんなちがいます。ローレンスさまが、下すつたのです。」

「ローレンスの、ぼっちゃんのおじいさまですって？ どうしてでしょう？ わたしたちを、ごぞんじないのに。」と、メグが、おどろいていいました。

「ハンナが、ローレンスさんの家の女中さんに、今朝のことを話したのです。ローレンスさんは、それを感心なさって、ていねいな手紙で、今日のお祝いにプレゼントをしたいと言って、およこ

しになったのです。」

「ぼっちゃん、思いついたんだわ。いいぼっちゃんだわ。お友だちになりたいけど。」と、ジヨウがいいきますと、それをきつかけに、ローレンス家のうわさに花がさきました。

ローレンスさんは、お金持だが、ちよつとかわつていて、あまりつきあいもしませんが、ぼっちゃんは、いい子で遊びにきたいらしいけど、はにかみ屋だもので、遊びに来れないらしいというようなことが話されました。すると、おかあさんは、

「ぼっちゃんは、りっぱな紳士のようなです。いい折があつたらお友だちになるといいと思います。この花は、じぶんで持っていたらいいです。二階のさわぎを耳にして、さびしそうに帰られ

たのです。」

「では、いつか、ぼっちゃんが見てもいいお芝居をしましょう。」と、ジョウがいました。

「あたし花束なんか、もらったことないわ。きれいなえ。」と、メグは花束に見入っていました。そのとき、おかあさんが、

「花束はかわいいけれど、ベスさんのばらはなおかわいい。」と、いって、胸にさしたベスのしほみかけたばらをかぎながらいますと、ベスはおかあさんに身をすりよせて、

「あたし花束をおとうさんのところへお送りしたかったの、おとうさんは、あたしたちみたいに、たのしいクリスマスをしてはいらっしゃらないでしょう。」と、小さい声でいきました。

第三 ローレンスのぼっちゃん

「ジョウ、どこ！」と、メグが屋根部屋の梯子の下からよびました。

「ここよ。」

かけあがっていくと、ジョウは日なたぼっこをして林檎をかじりながら本を読んでいました。

「とても、いいニュース。明日の晩、来てほしいという、ガーデンアのおくさんの正式招待状よ。」と、メグはその手紙を嬉しそうに読みました。

「大晦日の晩に、小宅で舞踏会を催します。ミス・マーチ、ミス・ジョセフィン、お二人とも御光栄下されたく存じます。ガーデンア夫人——おかあさんはいつてもいいって。だけど、あたしなにを着ていこうかしら？」

「そんなこと、きいたってだめよ。ポプリンの服しかないんだから、あれを着ていくほかないの知ってるくせに。」と、ジョウは、林檎を口いっぱいほおばっていいました。

さあ、それから、メグは、絹の服があればいいとか、手袋のいいのがないとか、くよくよと、こだわってばかりいましたが、ジョウは服に焼けこがしがあるけど、平気が着ていくし、手袋なしですますつもりでした。ジョウにとっては、そんなことたいして

心わずらすことではありませんでした。

「あたしのことは心配しないでいいわ。できるだけ、おすましまして、しくじらないように気をつけるわ。それでは返事を出しなさいよ。」

そこで、メグは、服の用意にとりかかるために出ていき、ジョウは、なおしばらく林檎をかじって本を読んでいきました。

大晦日の晩は、客間はからっぽでした。二人の妹は、着付役にまわり、二人の姉は、夜会のお仕度という、きわめて重要なお仕事に夢中でした。化粧はかんたんでも、二階へかけあがったり、かけおいたり、笑ったりしやべったり大さわぎで、メグが額の上にくすくす捲髪がほしかったので、ジョウがこてで焼いたら、つよ

い髪の焼けるにおいが家中にただよいました。その失敗に、メグは泣きだすしジヨウは心苦しそうでした。このほか、小さい失敗は、かず知れず、それでもやつと二人の仕度はできあがりしました。メグは、銀褐色の服、空色ビロウドの、リボンに、レースのふち飾り、そして、真珠のピンをさしました。ジヨウは、海老茶色の服に、かたい、男のするようなカラア、それに白菊を飾りにしただけでしたが、ともかく、二人ともすつきりとしていました。二人とも、きれいな手袋を片方ずつはめ、よごれた方をもちました。苦心のお仕度でありました。

姉妹が、すまして歩道へ出ると、おかあさんは、

「いってらっしゃい、お夜食はたくさん食べちゃいけませんよ。」

ハンナを十一時に、お迎えにあげるから、帰っていらつしやい。」と、いつて、窓をしめましたが、すぐに、また、

「もしもし、二人ともきれいなハンカチもっていますか？」と、念をおしました。

「ええ、まつ白よ、ねえさんはコロン水もかけました。」と、ジヨウは答えました。

二人は、カーデナア夫人の家に行くと、その化粧室で、かなり長いあいだ鏡をのぞいてから、すこしびくびくしながら、階下におりていきました。二人は、めったに舞踏会などに招待されたことがないので、今晚の会は略式でも、二人にとっては大きな事件でした。

りっぱな老夫人カーデイナア夫人は、にこやかに二人を迎えてくれ、六人の娘のなかの長女に二人を渡しました。メグはサーリーさんを知っていたので、すぐに親しく話し出しましたが、女の子らしいおしゃべりに興味をもたないジヨウは、服に焼けこがしがあるので、用心ぶかく壁をせにして立っていました。部屋のむこうで、快活な五六人の男の子が、スケートの話をしていたので、ジヨウはそこへいってもいいかと、メグに合図をしました。メグの眉がおどろくほどあがったので、動くことができずじまつた。しかたなしに、ジヨウは、ただ一人とりのこされ、ダンスがはじまるまで、人々をながめているばかりでした。

ダンスがはじまると、メグはすぐに相手ができ、にこにこし

て踊りましたが、きゆうくつな靴の痛さをがまんしていることは、だれにも気がつかれませんでした。ジョウは、髪の毛の赤い青年がやってくるのを見て、ダンスを申込まれては大へんだと思い、いそいでカーテンのかげに入ると、そこには、はにかみ屋さんの「ローレンスのぼっちゃん」がいました。ジョウは、さつそく、クリスマスのプレゼントのお礼をいいますと、

「あれは、おじいさんのプレゼントです。」

「でも、おじいさんにおっしゃったのは、あなたでしよう？」

ぼっちゃんは笑っていました。それから、いろいろ話しているうちに、ジョウは、このぼっちゃんが、ローリイという名で、長いあいだ、外国にいたことを知りました。

「まあ、外国へ、あたしは旅行の話を聞くのは大好き！」

ローリイは、どう話したらいいかわからないようでしたが、ジヨウが熱心にいろいろ質問したのでエヴェの学校のことや、この前の冬、パリイにいた話をしました。ジヨウは、めずらしい外国の話にたまらなくなつて、

「ああ、いつてみたい！」と、いいました。

それから、話はフランス語のことになり、ジヨウが、じぶんは読めてもしやべれないだけれど、ちよつと話してみてもほしいといえますと、ローリイは、フランス語でいいました。

「あのかわいいスリツパはいた人はだれですか？」

ジヨウは、わかつたので、すぐに答えました。

「あれは姉のマーガレットです。あなたは、わたしのねえさんをかわいいと思いますか？」

「ええ、おねえさんは、なんとなくドイツの少女を思わせます。いきいきして、それでしとやかで、りっぱな淑女みたいに踊りますね。」

ジョウは、姉をほめられてうれしく、ぜひメグに話してやろうと思いました。ローリイは、もうすっかりはにかみもせず、心を開いて話し、ジョウも、今は服のことなど忘れて、快活ないつものジョウになり、ローリイが好きになりました。それで、ローリイのことを、姉妹に話してやるために、顔かたちや身体つきなどをよく憶えておこうと思つていくども見なおしました。けれど、

年はいくつでしょう？ ジョウは、おいくつといいそうにしましたが、やつとこらえて、遠まわしに尋ねることにしました。

「もうじき大学へいらつしやるんでしょう？」

「まだ二三年はだめです。十七にならなくてはいけません。」

「では、まだ十五ですか？」

「来月、十六です。」

「あたしは大学へいきたいけれど、あなたはいきたそうではありませんのね。」

「ぼくはいやです。ぼくはイタリイに住んでじぶんの好きなように暮りたい。」

ジョウは、ローリイのいう、その好きなように暮りたいという

ことを、くわしく聞きたいと思いましたが、眉をひそめてふきげんに見えたので、気をかえさせようと思つて、足拍子をとりにがら、

「ああ、いいポルカね。あなたなぜいつてダンスなさらないの？」と、尋ねました。

「あなたもいけば。」

「あたしはだめ。あたし姉さんに踊らないといつたの、なぜつて、
いうと……」

ジョウが、いおうか、笑つてすまそうかとしていると、ローリイは、しきりにわけを尋ねます。だれにもいわないならばと念をおして、

「服にやけこがしがあるんです。あたしわるいくせがあつて、よくやけこがしするの。」

ローリイは笑いませんでした。

「そんなこと平気ですよ。それじゃ、あつちの細長い広間で踊りましょう。だれにも見られないから。」

ジヨウは感謝して、よろこんでついていき、だれもない、その広間で、ポルカを踊りました。ローリイは、ダンスがじょうずで、ドイツ流を教えてくれたが、まわったりはねたりすることが多いのでおもしろく踊れました。音楽がやむと、二人は階段にやすんで話しましたが、つぎの部屋でメグが手まねきしたので、ジヨウがしぶしぶいってみると、メグは足をかかえ、青い顔をして

ソファにすわっていました。

「高いかかたがひつくりかえって、くるぶしをひどくいためたの。痛くて立てそうもないわ。どうやって家へ帰ろうかしら？」

ジョウは姉のくるぶしをそつとなでてやりながら、

「あんまりかかたが高いから、けがすると思つたわ。お気のどくね。だけど、どうしたらいいでしょう。馬車を頼むか、ここに夜通しいるか。」と、こまつた顔をしました。

「馬車を頼めば高いし、頼みにいってもらう人もいないし、ここへはとめてもらえないし、あたしハンナが来たら、なんとか考えるわ。あら、みんな夜食にいくわ。あなたもいって、あたしにコーヒーもらつて来てよ。あたし疲れて動けないわ。」

ジヨウは、いそいでいきましたが、あちこち部屋をまちがえて、やっと食堂にはいり、コーヒー茶わんに手をかけたたん、こぼして服の前をよごしてしまいました。それを、あわてて手袋ですったので、手袋もよごしてしまいました。

「お手伝いしましょう。」

親しみのある声がしました。それは片手にコーヒー茶わん、片手にアイスクリームの皿をもったローリイでした。

「あたしねえさんのところへ、コーヒーをもつていこうとしましたら、また、やりそこないましたの。」

「ちようどいい。わたしがもつていってあげましょう。」

ジヨウがさきにいきました。ローリイは、なれたものごしで、

コーヒーとアイスクリームを、メグにすすめ、ジヨウのために、もう一度とりにいってくれました。三人が、しばらく話しているうちにハンナが来ました。メグはびっこをひきひき帰り支度をしに二階へいきました。そのあいだに、ジヨウは玄関へ行って、下男らしい人に、馬車をやとうことを頼みましたが、その人はその日だけやとわれた下男で、近所のことは知りませんでした。すると、ローリイが聞きつけて来ていいました。

「どうか送らせて下さい。道はおなじですし、それに雨もふつています。」

ローリイは、じぶんを迎えに来たおじいさんの馬車に、メグとジヨウとハンナをのせました。みんなは、ぜいだくな箱馬車にの

って、たのしい、ゆたかな気持ちにひたりながら帰りました。ローリイは馭者台にのつたので、メグは痛い足を前に出すことができ、姉妹は気がねなしに話をすることができました。

「あたし、とてもおもしろかったわ。」と、ジョウは髪をかきあげながらいいました。

「あたしもよ、けがするまでは、サーリイさんのお友だちの、マフォットさんという方と仲よしになったのよ。サーリイさんと一週間とまりがけで来るようにと行って下すったわ。サーリイさんは、春になってオペラがはじまるといらっしやるんですって。あたしおかあさんがいかして下さるといいけど。」

メグは元気づきながらいいました。

「おねえさんは、あたしがにげ出したあの赤い髪の人と踊ったのね、あの人、いい人だった？」

「ええ、髪はとび色よ。ていねいな方で、あたし気持よく踊ったわ。」

「あの人、足を出すとき、ひきつった、きりぎりすみたいだったわ。ローリイさんとあたし笑ってしまってたわ。あたしたちの笑うの聞えなかった？」

「いいえ、それやぶしつけだわ。あなたたち、そこにかくれて、なにしてたの？」

ジヨウは、そこでじぶんたちのやったことを話しました。その話がおわったとき、馬車は家へつきました。姉妹は、あつくお礼

をのべて馬車をおり、そつと家へはいりましたが、扉の音で二つの小さな頭がうごき、ねむそうな、けれど熱心な声がしました。

「ねえ、会の話をしてよ？」

ジョウは、メグのいう、ひどいお作法をやつて、妹たちにボンボンをもつてきてやりました。妹たちはそれをもらい、その夜の胸のわくわくするような話を聞いて、まもなく寝入つてしまいました。メグは、ジョウは、薬をぬつてほうたいをしてもらいなから、

「馬車で夜会から帰り、ねま着のまますわつて、女中に世話してもらつて、りっぱな貴婦人みたいだわ。」と、いいました。

「あたしたちは、髪の毛をやいたり、服が古かったり、手袋が片

方だけだったり、きつい靴をはいてくるぶしをくじいたり、とんまのまぬけだけどね、たのしかったわねえ。」と、ジョウがいました。がほんとにそのとおりだったのです。

第四 重い荷をかついで

「やれやれ、またお荷物かついで仕事をはじめるの、なんてつらいんでしよう。」

会のある朝、メグはため息をつきました。一週間たのしく遊んだあとで、いやな仕事はやすやすはじめられませんでした。

「いつまでも、クリスマスかお正月だといい。そうしたらおもし

ろいでしようね。」と、ジヨウは、あくびまじりに答えました。

「そしたら、今よりか半分もおもしろかないわ。だけど、お夜食や花束をいただいたり、会へいたり、馬車で帰ったり、読書したり、休養したりして、こつこつはたらかないですむような人、うらやましいわ。」と、メグがいました。

「でも、そんなことできないわ。だから、ぐちをこぼさないで、おかあさんみたいに、ほがらかに歩いていきましよう。」

けれど、メグの心は晴れません。髪をきれいにする元氣すらありません。

「ああ、いやだ。せつせとはたらいて、年をとって、きたない気むずかし屋になるんだわ。貧乏でおもしろく暮せないばかりに

」。

こういつてメグは、ふくれた顔をして階下へいき朝の食事のときもふきげんでした。みんなも気分がひきたちませんでした。ベスは頭痛がするので、ソファの上に横になり、親ねこと三びきの子ねこを相手に気をまぎらそうとしました。エミイは勉強がはかどらないのに、ゴム靴が見つからないのでぷりぷりしました。ジョウは口笛をふいて、さわぎをひきおこしかねないようすでした。おかあさんは、いそぎの手紙を書くのにいそがしく、ハンナも前の晩おそかったので、ふきげんでした。

「こないじわるの家ってありやしない！」

ジョウは、インキのつぼをひっくり返し、靴のひもを二本とも

切ったので、とうとうかんしゃくを起して、じぶんの帽子の上にごさりとすわり、大声でそうさげびました。

「なかで、あなたが一ばんいじわるよ。」と、エミイがやり返し、石盤の上にこぼした涙で、まちがいだらけの計算を消してしまいました。

「ベス、こんなうるさいねこ。あなぐらにほうりこんでおかないと。水でおぼれさせれしまうわよ。」と、メグは、じぶんのせなかにかじりついたねこを、はなそうとしながらいいました。

ジヨウは笑う。メグはしかる。ベスはあやまる。エミイは、十二の九倍がいくつになるか、わからなくて泣きました。

「さあ、しずかにしておくれ、今朝早く出さなければならぬの

に、がやがやうるさくして、書けやしません。」と、おかあさんは手紙の書きそこないを消しながらいいました。

それで、ちよつと静まりました。ハンナが来て、熱いパイを二つおいて、出ていきました。姉妹たちのいく道は遠く寒く、三時前までに帰れないので、これはおべんとうでもあり、また、手をあたためることもできました。それでこのパイのこと「マフ」ともよんでいました。

「では、かあさんいつてまいります。今朝はあたしたちだだつ子でした。でも、天使になって帰って来ます。」

ジョウは、そういつて、メグといっしょに出かけました。町角でふりかえると、いつも窓でにっこり笑うおかあさんの顔があり、

それが励ましになるのでした。二人は今朝もふりかえり、おかあさんの笑顔を見ると、元気になろうとつとめ、しばらく歩いてから、べつべつの道をいきました。メグは保姆の仕事、ジヨウはマ―チおばさんのところへはたらきにいくのでした。

おとうさんが、不幸な友人を救おうとして財産を失くしたとき、二人はすこしでも家のためになりたくてはたらき、それからずつとはたらいているのです。メグの給料はわずかで、しかもまい日キング家で、年上の姉妹たちが、ぜいたくをしているのを見るので、だれよりも貧乏をつらがつていました。ジヨウはびつこのマ―チおばさんの世話をしますが、気みじかのおばさんと、よく気が合いました。それに、死んだおじさんの文庫がすばらしく、お

ばさんが昼寝をしたり、来客でいそがしいときさつそく文庫には
いりこんで、詩、歴史、旅行記だのに読みふけりました。それは
いいとしても、思うさまかけまわったり、馬にのったりできない
のは、なやみの種でした。

ベスは、はにかみ屋で、学校へもいけないほどでした。それで
おとうさんが勉強を見ていましたが出征しなすつてからはおかあ
さん、かあさんが軍人後援会へいくようになってからは、ひとり
で勉強します。性質は勤勉で家事が好きで、ハンナを助けて家を
きれいにしますが、まだ子供で、人形と遊ぶことが、なによりの
たのしみでした。けれど、このベスにも、苦になることがありま
した。それは、音楽好きなのに、よいピアノもないし、音譜もな

いことで、音楽の勉強が思うようにできないので、涙をながすことがときどきありました。

エミイのつらいことには、鼻が美しくないことで、エミイにいわせると、あかんぼのとき、ジヨウが手をすべらして炭取のなかへ落したためだそうです。エミイは絵がじょうずで、花を写生したり、空想的な絵もかきます。それに十あまりの曲もひくし、フランス語も読めるし、性質は素直でおとなしいので、みんなからかわいがられました。

さて、晩に、みんながいつしよにお裁縫をはじめたとき、メグがいました。

「今日はほんとにくさくさした日だったわ。なにかおもしろい話

でもない？」

すると、ジヨウがすぐにいいました。

「あたし、今日はへんなことあったのよ。マーチおばさんがいねむりはじめたので、おばさんが読め読めという、つまらない、ベルシヤムを読みかかったら、こつちもねむくなり、大きなあくびをしたの。そうしたら、おばさんは、罪ということについて、ながながとお説教をやりだし、お説教がすむと、よく考えなさいと、またいねむりよ。そこでわたしは、「村牧師」を出して読みだしたのよ。そしたら、水のなかへころげこむところで、つい大声をあげて笑ったの。すると、おばさんが目をさまして、それを読んで聞かせなさいとおっしゃるの。私は読んであげた。

おもしろかったのね。だから、お昼すぎに、あたしが手袋をとり
にいったら。おばさんは、じぶんで「村牧師」を熱心に読んで
のよ。ね。やっぱリベルシヤムなんかよりおもしろいのよ。おば
さんみたいな金持だつて貧乏人とおなじような心配があるんだわ。
だから、「村牧師」にひきつけられるのだわ。」

すると、メグがいました。

「それで、あたしも話すこと思いついたわ。今日キングさんのと
ころへいったら、なんだかへんなの。それで、あたし一人の子に
尋ねたら、一ばん上の兄さんがなにか大へんなことをして、おと
うさんから家をおいだされたんですつて。泣き声、どなり声がし
て大へんだったわ。家のはじになるような、らんぼうな男の兄弟

がいなくてよかったわねえ。」

すると、エミイがいました。

「今日、スージーさんは、先生の漫画を書いたので、三十分も教壇にたたされたの。あたしスージーさんが、きれいな、めのうの指輪をはめて学校へ来たので、うらやましく思っていたけれど、あんなはずかしい目にあうようじゃ、いい指輪はめたってしあわせじゃないわ。」

つぎに、ベスが話しました。

「今朝あたしハンナにかわって、魚屋へかきを買いにいったの。すると、貧乏そうな女の人に来て、仕事がなくて子供に食べさせるものがないから、みがきものでもさせて、お魚をすこし下さい

と頼んだの。すると、魚屋さんいそがしいもので、つつけんどんに、だめよといったの。すると、そのときローレンスさんがしおれて帰っていく女に、大きな魚をステツキでひっかけてあげたの。女は、びつくりして、よろこんで、なんどもお礼をいって、ローレンスさんに天国へいけるようにつて祈ったの。」

みんなはベスの話を笑いましたが、もちろん心をうたれました。そして、おかあさんにお話をねだりました。

「そうね、おかあさんは、会で青いネルを裁っていたら、おとうさんのことが、みように心配になって、もしものことがあつたら、どんなに頼りなく、さびしいだろうと思っていました。すると、なにか註文をもっておじいさんが、心配そうな、疲れたようすで

やって来ました。身の上を尋ねてみたら四人息子が戦争に出ていて、二人は戦死をし、一人はとりこになり、一人はワシントン病院にいるんですって。そして、これからそこへいくんですって。けれど、すこしもぐちをこぼさないで、よろこんでお国のために、子供たちを出したというのです。おかあさんは、たった一人おとうさんを出してつらがつています。はずかしくなりました。そればかりか、おじいさんは、たった一人ぼっちですがおかあさんには四人も娘がいて、なぐさめてくれます。ほんとに、おかあさんは、じぶんの恵みふかい幸福がありがたかったので、おじいさんに、つつみとお金をあげ、教えていただいた教訓に、心からのお礼をいいました。」

みんなは、この話にも心をうたれました。ジヨウは、もう一つ、今のようないい話をと望みました。おかあさんは、にっこり笑つて、すぐに話しはじめました。

「むかし、食べたり着たり、なに不足のない四人の娘がありました。たのしみも、よろこびもありあまり、親切なお友達や両親があつて、愛されていたのに、娘たちは満足しませんでした。（ここで聞き手たちは、こつそり見かわして、お裁縫に精を出しました）娘たちはよくなるうと決心するのですが、やりとげることができないで、これがあつたらとか、あれができたらかと、考えました。それで、あるおばあさんに、幸福にしてくれるまじないがあれば教えて下さいといいましたら、あなたがたが満足に思う

とき、恵みということを考えて感謝なさいといいました。（ここ
でジョウは、なにかいいたそうでしたが、話がおわらないのでい
うのをやめました）それで、りこうな娘たちが、その言葉を試し
てみますと、じぶんたちがいかによい暮しをしているかわかつて
びつくりしました。一人は、お金持でも家のはじと悲しみは救え
ないということがわかりました。一人は、貧乏でも、若くて元気
なら、じぶんのたのしみもたのしめない、気むずかしいおばあさ
んより、ずっと幸福ということがわかりました。一人は食事の仕
事はいやだけど、食物をもらって歩くのは、つらいということが
わかりました。一人は、めのうの指輪よりもお行儀のいいほうが
いいということがわかりました。それで、四人の娘たちは、ぐち

をやめ、さずかった恵みを感謝し、もっとよくなろうと考えました。」

「おかあさんは、あたしたちのお話をとって、あたしたちをお説教なさるの、ずるいわ。」と、メグがいいますと、ベスがいいました。

「あたし、そういうお説教すきだわ。おとうさんがよく話して下さったわ。」

エミイは、つぶやくように、

「あたし、そう不平いわないけど、もっとつつしむわ。スージーさんのやりそこないで、あたしほんとに教えられたんですもの。」すると、ジョウが、ふざけて、

「おかあさんの教えは、よかったわ。もしか忘れたら、チヨール人のおじいさんみたいに、子供らよ慈悲ちゆうもんを、ようくかんげえねせえと、おかあさん、おつしやつて下さい。」と、いいました。これでおもしろい空気が、あかるくなりました。

第五 おとなりどうし

「まあ、ジヨウ、なにをなさるの？」

ある雪のふる午後、妹のジヨウがごむ靴をはき、古ばけた上衣に、ずきんといういでたちで、ほうきとシャベルをもって広間へ出て来たのを見て、そうたずねました。

「運動にいくの。」

「今朝、二度も散歩して来たんだもの、たくさんだわ。家にいて火にあたりなさいよ。」

「いやなこった。ねこじやあるまいし、火のそばでいねむりなんかするの大きらい。あたし冒険がすき、これからなにかさがしにいくの。」

メグは炉に足を出して本を読み、ジヨウは通路の雪をどけはじめました。ところで、マーチの邸はローレンスの邸と、生垣でへだてられていました。いずれも、森や芝生の多い、いなかめいた気分のなかにつつまれていましたが、ローレンスの邸では、大きな馬車をいれる納屋や、温室や、りっぱな石づくりの家があるの

に、マーチの邸には、赤茶けたふるびた家が見すばらしくあるだけでした。

けれど、ローレンスのりっぱな家はなんとなくさびしく、ここにおじいさんと、ただ二人で住むぼっちゃんに友だちもありませんでした。ジョウは考えました。「かわいそうに、少年の心のわからないおじいさんから、お部屋にとじこめられているんだわ。

ローリイには、にぎやかな、わかわかしい遊び相手がいるんだわ。
」

ジョウはなんとかして、ぼっちゃんを誘い出そうと、冒険をもくろんでいると、ローレンス老人が馬車で出かけました。すてき、すてき、ぼっちゃん一人ならと、生垣のところまで道をつけてい

くと下の窓にはカーテンがおりていて、召使の姿も見えませんが、上の窓には、やせた手と、ちぢれた髪の黒い頭が見えました。

「かわいそうに、病気でねているんだわ。こんなさびしい日に。」

ジョウは、一かたまりの雪を窓を目がけてなげました。黒い頭がすぐにふりむき、大きな目がいきいきとかがやきました。

「いかが、御病気なの？」

ローリイは、窓を開けてしやがれ声で答えました。

「ありがとう。いくらかいいんです。ひどいかぜをひいて、一週間ねちやいました。」

「まあ、お気のどく、なにして遊んでいらつしやるの？」

「なにもしてません。家はお墓みたい。」

「本は読まないの？」

「あんまり読みません。読ませてくれないんですもの。」

「だれにも読んでいただけなの？」

「おじいさんに、ときどき。でもぼくの本はおじいさんにおもしろくないし、ブルック先生に頼むのは、いつだっていやだし。」

「じゃ、お見舞に来る人もいないの？」

「いないんです。男の子はがやがやさわぐし、ぼくは頭がよわってるんです。」

「女の子はいないの、本を読んだりなぐさめてくれる女の子は？
女の子は静かだし、看護婦ごっこすきよ。」

「そんな女の子知りませんもの。」

「あんだ、あたしを知ってる？」

ジョウが笑うと、ローリイがさげびました。

「知ってる！ あんた来てくれる？」

「ええ、あたしは、おとなしくも、やさしくもないけど、おかあさんがいいとおっしゃったらいくわ。」

ジョウは、ほうきをかついで家へ帰りました。そのあいだに、ローリイはお客を迎えるために、髪にブラシをかけ、あたらしいカラをつけ、五六人の召使たちに部屋をかたづけさせました。やがて、ジョウが玄関にたちベルをおしました。ローリイは、ころよくジョウを迎えました。

ジョウは、親切のあふれた顔をして、片手にはおおいをした皿

をもち、片手にはベスの三匹の子ねをだいてあらわれました。

「おじやまにあがりました。荷物までしよつて、おかあさんがよろしくつて。メグはお手製の白ジエリイをお見舞ですつて。おいしいんですよ。それから、ベスはねこをおなぐさみにつれていくようにつて。お笑いになるでしょうが、ことわりきれなくて。」

ローリイは、ねこを見て笑い、はにかみを忘れ、すぐにうちとけました。ジョウが、皿のおおいをとると、緑の葉のわと、エミイの秘蔵のジエラニユームの赤い花をそえた白ジエリイがあらわれました。

「ああ、きれいだ、食べるのがおいしい。」

「たいしたものではないの。ただ、みんながお目にかけたかった

だけ。でも、あつさりしてるからめしあがれてよ。それにやわらかいから、のどが痛くても、するつとはいつてしまうわ。それはそうとこの部屋なんて気持がいいんでしよう。」

「女中が女中なので、片づいていなくて。」

「じゃ、あたし二分間で片づけてあげるわ。」

ジョウは、てきぱきとはたらかしました。部屋の感じが一変したので、ローリイは満足してお礼をいいました。

「さあ、今度はぼくがお客さまをよろこばせなくちや。」

「いいえ、あたしはあなたをなぐさめに来たのよ。なにか本を読んであげましようか？」

「ありがとう、でもそこにある本、みんな読んでしまったんです。」

だから、あなたさえよかったら、お話のほうがいいんだけど。」

「いいですとも、一日だって話すわ。ベスはあたしがおしやべりをはじめたら、いつやめるかわからないなんていうのよ。」

「ベスさんというのは、ときどき小さなバスケットをもって出ていく、あかい顔の。」

「ええ、いい子ですわ。」

「すると、あの美しいかたがメグさんで、まき毛のかたがエミさんですね？」

「どうしてごぞんじ、そんなによく。」

ローリイは、さっと顔をあかめました。

「だって、ここにいます。たのしそうなみなさんがよく見えるん

ですもの、夜、カーテンを閉め忘れた窓ごしに、おかあさんをか
こんで、いらつしやるところも見えます。おかあさんの顔は、
やさしく花のようです。ああ、だけど、ぼくには母はいない。」

母の愛にうえた少年の目は、ジヨウのあたたかい胸をうごかし
ました。すなおなジヨウは、じぶんが、いかにゆたかな家庭の愛
に恵まれているかを感じたので、よろこんでそれを病気のさびし
いかれに、分けあたえたいと思いました。

「では、カーテンをおろさずにお好きだけ見せてあげます。い
いえ、それより家へいらつしやい。おかあさんはいい人よ、ごち
そうたくさんして下さるわ。ベスは歌をうたい。エミイはダンス
をする。メグとあたしはおかしなお芝居の道具を見せて笑わして

あげるわ。そうして、みんなでおもしろく遊ぶのよ。でも、おじいさん来させて下さる？」

「あなたのおかあさんが頼んで下さればね。おじいさんは親切で、ぼくのすきなことをさせてくれます。」

ローリイは、マーチ家の人たちのことについてたくさんの興味をもち、ジョウの口から姉妹たちのことを聞いてうれしそうでした。ことに、ジョウが、せつかちの、気むずかしいお婆さんの世話をしにいく話をおもしろがって、そのお婆さんのところへ気どった老紳士が結婚申込に来たとき、むく犬がその紳士のかつらをひっぱって、はげ頭がむき出しになった話では、ころげまわって、涙が出るほど笑ったので、女中がおどろいて、のぞきに來たくら

いでした。

ジョウは、話が成功したのでとくいになって、家のお芝居のこと、いろんな計画のこと、おとうさんのこと、その希望や心配、家のなかの一ばんおもしろいことなど、のこらず話しました。それから本の話になりましたが、ジョウはローリーがやはり本ずきで、じぶんよりもたくさん読んでいるのをうれしく思いました。

「そんなに本がすきななら、おじいさんの文庫へいきましよう。」

文庫は、ジョウをよろこばせました。ずらりとならんだ本のほかに、絵や彫刻や古い品物のはいったたんすがあり、ゆったりしたイスがそなえてありました。ジョウは、そのビロウド張りのイスに腰をかけて、

「まあ、りっぱだ！　あなたは、一ばんこの世でしあわせなぼつちやんですよ！」と、いいましたがそのときベルが鳴りました。

あ、おじいさんだと、はつと、しましたが、まもなく女中が来て、お医者さんが来たといい、ローリイは診察してもらいに出ていきました。ジヨウは、ほつとして、文庫のなかを見物しましたが、老紳士のりっぱな肖像画の前に足をとめてながめました。そのとき、扉が開いたけれど、ジヨウはふり返つてもみずに、

「この人、親切そうな目をしていらつしやるから、あたしもうこわくないわ。でも口もとはきつそうだし、とても意地っぱりみたいね。うちのおじいさんほど、きれいではないけど、あたし好きだわ。」

すると、うしろで声がありました。

「どうも、ありがとう。」

ふりかえると、ローレンス老人が立っていたので、ジョウはちぢみあがりました。顔はあかくなり動悸がうちます。逃げ出すのに卑怯だし、ふみとどまることにしたものの、ほんものの老人の目は、肖像画の目よりも、もつとやさしかったので、そんなにこわくなくなりました。

「そうすると、あなたは、わたしがこわくないのかね？」

「そんなに。」

「あなたのおじいさんほど、きれいではないというのだね？」

「ええ、きれいではありませんわ。」

「わしは、意地っぱりかね？」

「そう思います。」

「それなのに、わしが好きだって？」

「ええ、好きです。」

この答えが老人をよろこばせました。老人はジヨウの手をにぎり、その顔をのぞきこんで、

「顔はにいていなくても、あなたは、りっぱなおじいさんの性質をうけついでいる。おじいさんは勇気があり正直だった。わたしは、あのかたと、友だちであったことを誇りに思っていますわい。」

「ありがとうございます。」

ジヨウは、気がらくになりました。

「あなたは、家の子と、なにをしていなさったのかね？ ええ？」

「近所づきあいをしようにとただけです。」

「あなたは、あの子を元気づける必要があるとお考えかね？」

「ええ、すこしさびしそうですもの。わかいお友だちがあるといいでしよう。わたしたち、女ですけど、お役にたきたいと思いません。あなたのとどけて下さったりっぱなクリスマスのプレゼントを、とてもありがたく思っていますのよ。」

「いや、あれはあの子の考えたことじゃ。ところで、あの気のどくな婦人はどうしたな？」

「らくに暮していますわ。」

「そうか、おかあさんのやり口は、いつも貧乏な人たちを恵んだ

おじいさんのやり口とおなじだ。いつか天気の良い日に、おかあさんをお訪ねしたいといっておいて下され。ほら、お茶のベルだ。さあいっしょにお茶をのんで、近所づきあいをしてもらおう。」

ローレンス老人は、礼儀正しくジョウにうでをさし出し、二人はうでをくんで階段をおりていきました。すると、そこへローリイが帰って来て、そのありさまを見てびっくりしました。まったく、これは考えることもできないことでした。

老人は、四はいのお茶をのむ間、あまりしゃべりませんでしたが、老人は、ローリイがジョウと快活にしゃべって、顔が今日にかぎって、あかくいきいきしているのを見まもっていたからです。

「ふむ、この娘のいうとおり、孫はさびしいのだ。今日、孫はか

わった。よし、この家の娘たちが、孫をどうするか見ていよう。」

老人も、ほんとは気さくで、こだわりがない人だったので。

だから、孫のことも理解することができました。お茶がすむと、ジヨウは帰るといい出しましたが、ローリイはひきとめて、ジヨウを温室へつれていき、りょう手にもてないほど、美しい花をたくさん切つて、

「これ、おかあさんにかけて下さい。そして、おとどけ下さったお薬、とても気にいりましたとおっしゃって下さい。」

客間へ帰ったとき、老人は炉の前に立っていました。ジヨウの目は、そこにあるグラウンド・ピアノにすいつけられました。

「あなた、ひくの？」

「ときどき」と、ローリイは、ひかえ目に答えました。

「今、ひいてちようだい。帰ったらバスに話してやりたいから、聞いていききたいの。」

「あなた、さきにひかない？」

「あたしだめなの。音楽はすきだけれど。」

ローリイがひきました。ジョウは花たばに鼻をおしつけながら、耳をすましました。ローリイが、じょうずなのに、ちつとも気どらないので尊敬をよせました。ひきおわってから、あまりほめたのでローリイはまっかな顔をしました。

「いや、ほめるのはもうたくさん。この子の音楽はまずくはないが、もっとほかのだいじなことに、身をいれてもらいたいのだじや。」

ああ、もうお帰りか。ありがとう、またお出で、おかあさんによろしく。では、さよなら、お医者さんのジヨウさん。」

老人の握手はかたかったが、なにか気にいらぬような感じがした。あとで、ローリイにたずねたら、ぼくがピアノをひいたからだといいました。なぜかというと、いつか話すといいました。ローリイは、

「また、来てね。」と、名残りおしそうでした。

「あなたが、よくなったら、家へ来るといふ約束をすれば。」

「ええ、いきます。」

ジヨウが帰って来て、のこらず報告すると、みんなもおしけたくなりました。マーチ夫人は、おとうさんのことを忘れないで

いる老人と話したかったし、メグは温室が歩きたかったし、ベスはグランド・ピアノに心ひかれ、エミイはりっぱな絵や彫刻が見たかったのです。

「おかあさん。ローレンスさんは、なぜローリイさんがピアノをひくのをきらうのでしょう？」と、せんさく癪をジヨウが出しました。

「よく知らないけど、ローリイさんのおとうさんが、イタリアの女の音楽家と結婚なさったのをきらうからでしょう。ローリイさんがまだ小さいとき、両親がなくなったので、おじいさんがひきとったわけですが、おかあさんのような音楽家になりたいなどという、望みを起されたら、こまるからでしょう。」

「まあ、小説みたいね。」と、メグ。すると、すぐに、ジヨウが「まあ、いやだ。音楽家になりたければならせて、いやな大学にいかせて、苦しめなくてもいいのに。」

ひとしきり、ローリイのことで話ははずみました。話のすえに、メグがいました。

「夜会であつたけど、たしかにあなたの話のとおり、ローリイは、お作法を知ってるわ。おかあさんがあげた薬って、ちよつと、気のきいたいいまわしね。」

「白ジェリイのことでしょう？」

「まあ、なんておばかさんでしょう！ あなたのことを、おつしやつたのよ。」

「そうなの。」と、ジヨウは、思いがけないというようすで目をまるくしました。

「あんたみたいなのってあるかしら？ お世辞をいわれてわからないんですもの。」

「そんなばかなこといいっこなしよ。お世辞をいうなんて考えずに、かあさんのないぼっちゃんをみんなで親切にしてあげましょう。ローリイ、遊びに来てもいいでしょう、おかあさん？」

「ええ、ええ、けっこうです。それから、メグさん、子供はできるだけ、いつでも子供でいるほうがいいのよ。」

「あたし、じぶんを子供だなんていわないねまだ十三にもなっていないんですもの。」と、エミイがつぶやきました。

「ベス、あなたはどうか？」

「あたし、あの巡礼ごつこのこと考えていたの。おとなしくなるうとして、失望の沼をとおり、試練の門をぬけて、けわしい山のぼっていくことだの、あのりっぱなものたくさんあるローレンスさんの家が、あたしたちの美しい宮殿になるかもしれないってことだの、考えていたの。」

「あたしたちは、まあライオンのところまで来ることができたんです。」と、ジョウは、ベスの言葉にいくらか賛成らしく答えました。

第六 美しい宮殿

大きな家は、とうとう美しい宮殿になりました。けれど、みんながそこへいくのに、かなりの時間がかかり、ことにベスがライオンのそばをとおりにぬけるのに、かなり骨がおれました。そして、ローレンス老人は、一ばん大きなライオンでしたが、訪ねて来て、娘の一人一人に、おどけ言葉や親切な言葉をかけ、おかあさんとむかし話をしてからは、もうだれも老人をこわがりませんでした。もう一つのライオンは、こちらが貧乏で、むこうが金持ということで、それもそのうちに、ローリーが、貧乏でも、愛のこもった家から受けるなくさめを、どんなにありがたがっているかがわかったので、じぶんたちがローレンスの家から受けるものを、べつ

に恐縮しないでもいいと思うようになりました。そして、そこに春の草のめばえのように、あたらしい友情がもえました。

ローリイは、今までおかあさんの味も、姉妹の味も知らなかったので、マーチ家にみなぎるゆたかな、あたたかなものに心をひかれ、ひまさえあると、遊びに来ました。それを心配してブルック先生は老人へくわしく告げました。

「いや、かまわん。遊ばせておくさ。あとでとりかえせばいい。マーチ夫人の意見のとおり、あまり勉強させすぎたのがいけないのだ。マーチ夫人がよくやってくれる」

老人は、もうわかっていました。そして、みんなはどんなにおもしろく遊んだでしょう！ お芝居、そり遊び、氷すべり、にぎ

やかな夜会、たのしい談話。マーチ家からも三人の姉妹がおしかけ、メグは温室で花たばをつくり、ジョウは文庫で本をむさぼり読み、エミイは絵をうつしました。ただ、バスだけは、グラランド・ピアノにあこがれながら、老人をこわがって、逃げて帰りました。老人は、そのことを知って、わざわざ訪ねて来ておかあさんにいいました。

「ローリイは、ピアノを怠けています。やりすぎたから、いいあんばいなのですが、ピアノは使わんといかん。どなたか来て使ってもらえんかな、いつはいつて来てでもいいし、口をきかんでもいい。だまって来て、だまってひけばいいんだが。」

聞いていたバスは、もうたまらなくなつて、

「あたしベスです。音楽が好きです。おじやまでなければ、まいりたいのですが」

「どうぞ。どうぞ。半日だれもないんだから、えんりよなく、ピアノを使ってもらえれば、こちらからお礼をいわねばならん。」

ああ、ベスは顔をほてらし、ローレンスさんの手をにぎり、お礼の言葉がいえないので、ただきつくにぎりしめました。老人は、そつとベスの髪に口をあてて、

「わしには、こういう娘があつた。ああ、かわいい子じゃ、さよなら、おくさん。」

老人が大いそぎで帰っていくと、ベスはおかあさんといっしょによろこび、そのうれしいニュースを仲よしの人形たちに告げに

二階へかけあがっていきました。その晩、ベスは今までにない、たのしきでうたいました。あくる日、老人とローリイが出かけたのを見とどけたベスは、こつそりと、客間へしのびこみ、ふるえるゆびでピアノをひきました。おお、その美しい音、ベスはうつとりとなり、よろこびはてしなく、やすまずにひきつけ、ハンナが食事のむかえに来るまで手をやめませんでした。その後、ベスはまい日のように生垣をくぐり、客間にしのびこんでひきました。ベスは、老人がそのしらべを聞くために、じぶんの部屋の扉を開けることも、新らしい音譜をそなえておいてくれることも、ローリイが広間にいて女中たちの来るのをおっぱらってくれることも知りませんでした。ただ、ベスは、じぶんの望みのかなった

ことを感謝して、まことにたのしかつたのであります。

二三週間たちました。ある日、バスはおかあさんにいいました。「おかあさん、あたしローレンスのおじいさんに、スリッパを一つ、つくつてあげたいの。あたしお礼をしたいんだけど、ほかにどうしていいかわからないんです。」

おかあさんは、にっこり笑つて、

「ええ、ええ。つくつておあげなさい。きつとおよろこびになるでしょう。みんなも手伝つてくれるでしょうし、かかるお金は、おかあさんが出してあげますよ。」と、いいましたが、おかあさんは、バスがめつたにおねだりをするのがないので、今、バスの望みをかなえてやるのを、とくべつうれしく思いました。

ベスは、メグやジョウと相談して、型をえらび、材料をととのえて、スリツパをつくりはじめました。紫紺の布地に、しなやかな三色すみれの花をおいたのが、たいそうかわいいと、みんながいました。ベスは、手が器用でしたし、ほとんど朝から晩までかかりきりでしたから、まもなくできあがりしました。それから、ベスはごくみじかい手紙を書き、ローリイに頼んで、ある朝、老人がまだ起きないうちに、こっそり書斎のテーブルの上に、スリツパといっしょに、のせておいてもらいました。

ベスは、心待ちに、待ちましたが、その日も、つぎの日の朝も、なんの返事ありません。きつと老人をおこらせたのだと、ベスは心配しはじめました。けれど、その日の午後、ベスがちよつと

お使いに出た帰りに、思いがけないことが起りました。バスが家のちかくまで来たとき、四つの頭が客間の窓から、見え、たくさんの手がふられ、いつせいにさけぶ声が耳をうったのです。

「ローレンスさんから御返事よ！」

バスは胸をとどろかせながら、いそいで帰って来ました。すると、姉妹たちは扉口のところに待っていて、バスをつかまえ、わいわいいいながらかついで、客間へつれていきました。

「ほれ、あれよ！」と、みんなが、ゆびさすほうを見たとき、バスはうれしいのと、おどろいたのとで、まっさおな顔色になりました。ああ、そこには、小さなキャビネット・ピアノが置いてあって、ぴかぴかしたふたの上に「エリザベス・マーチさん」にあ

てた手紙がのっけていました。

「あたしに？」と、ベスはジヨウにつかまり、たおれそうな気がしながら、あえぐようにいいました。ジヨウは、手紙をわたしながら、

「そう、あなたによ、いい方ね、世の中で一ばんいいおじいさんね、かぎも手紙のなかにあるわ。」といいました。

「読んでちょうだい、わたし読めないわ。へんな気がして、ああ、とてもすてき！」と、ベスはそのおくりものに、すっかりどぎもをぬかれてしまつて、ジヨウのエプロンに顔をかくしました。ジヨウは、手紙を開きましたが、最初の言葉を見て笑い出しました。そこには、

「マーチさん、親愛なるおくさん」と、書いてあつたからです。

「まあいいこと！ あたしにも、だれかがそんなふうを書いて手紙くれるといいわ。」と、エミイがいました。エミイは、こういうむかし風の書き出しは、たいそう上品のように思われました。「小生これまでに、かず多くスリツパを使用したし候が、あなたよりおくられしスリツパのごとく、小生に似合うものこれなく、三色すみれ、すなわち心を安める花は、小生の愛する花にて、やさしきおくり主を常に思い起させてくれるものと存じ候。よつて小生は小生の負債をはらいたく、なにとぞこの老紳士の小さき孫のものたりし、あるものを、あなたにおくることをお許し願ひ上げ候。心よりの感謝と祝福をこめて、あなたのためよるこんでいる友

だちでもあり、いやしき召使の、ジェームス・ローレンス。」

「ねえ、ベス、あなた、じまんしてもいいわ！　ローリイが話しただけど、おじいさんは、亡くなったお孫さんが好きで、そのお孫さんのものはちゃんとしまっておおきになるんですって。そのピアノを、あなたに下すつたのよ。大きな青い目をして、音楽が好きなためよ。」

ジョウは、そういつて、今までに見たことがないほど、たかぶつて、ふるえているベスを、おちつけようと思いました。すると、メグも、

「ごらんなさい。このローソク立て、まんやかに金のぼらのあるみどり色の絹のおおい、きれいな楽譜かけに、腰かけと、みんな

そろってるわ。」と、楽器を開けて、そのきれいなものを見せながらいいました。

そのとき、

「さあ、ひいてごらんなさいまし、かわいいピアノの音を聞かして下さい。」と、家族のよろこびにもかなしみにも、いつでも仲間入りする女中のハンナがいました。

そこで、ベスがひきました。みんなは口をそろえて、こんないい音は聞いたことがないといいました。それは、あたらしく調律されて、調子がととのっていました。ああ、なんといいすばらしい音色だったでしょう。

「おじいさんどこへ行って、お礼をいわなくちやいけないわ。」

と、ジョウが、じょうだんのつもりでいいました。むろん、はにかみ屋のベスが、ほんとにいくとは思わなかったからですが、ベスは、

「ええ、いくわ、今すぐ」と、いって、庭におり、生垣をくぐり、ローレンス邸の扉を開けてはいつていきました。これには、みんなは、あきれてしまいました。ベスがそれからどうしたかを知れば、もつとおどろいたにちがいありません。というのは、ベスは書斎の扉をたたき、おはいりという声を聞くと、はいつていき、おどろくローレンスさんのそばへ立ち、手をさし出しながら、

「あたし、お礼を申しに来ました。」と、いいましたが、やさしい老人の目につきあたって、もうあとの言葉が出なくなり、いき

なり、老人の首にだきついて、じぶんの唇をあてました。

老人は、たとい、屋根がふいにふきとばされても、もつとおどろきはしないでしょう。老人は、すっかりおどろきました、それがうれしく、そのかわいい唇づけで、いつものふきげんは消えうせてしまいました。老人は、ベスをじぶんのひざの上ののせて、そのしわだらけのほおを、ベスのばら色のほおにすりよせ、まるでじぶんのかわいい孫娘が、生きかえって来たような気持になりました。ベスは、そのときから、もう老人をこわがらなくなりました。そして、まるで生れたときから、ずっと知っている人に話すように、やすらかな気持で話しました。なぜなら、愛はおそれをおいのけ、感謝は誇りをおしつぶすからです、ベスが家へ帰る

とき、老人は門まで送り、あたたかい握手をしてくれました。そして、いかにもりっぱな軍人らしく帽子に手をかけて、敬礼をし、堂々とひきかえしていきました。

姉妹たちは、そのありさまを見て、おどろくとともに、うれしくてたまりません。ジヨウは、じぶんの満足をあらわすために、おどりあがつてダンスをはじめ、エミイはびっくりして、窓からころげおちそうになり、メグは手をあげて叫びました。

「まあ、この世の中は、とうとうおしまいが来たようね！」

第七 はずかしめの谷

ある日、ローリイが馬にのつて、家の前をむちをふつて通りすぎるのを見て、エミイがいました。

「ローリイさんが、あの馬につかうお金のうち、ほんのすこしでもほしいわ。」

メグが、なぜお金がいるのか尋ねますと、

「だって、わたしたくさんお金がいるの、借りがあるんですもの、お小遣は、あと一月もしないともらえないし。」

「借りがあるって？ なんのこと？」

メグは、まじめな顔になりました。

「塩漬のライム、すくなくつても、一ダースは借りがあるの。それに、おかあさんは、お店からつけでもって来るのいけないとお

っしやるし。」

「すっかり話してごらんなさいよ。」

「今ライムがはやっているの？」

「ええ、みんなライム買うわ。メグさんだって、けちだと思われなくなかったら、きつと買うわ。そして、みんな教室で机のなかにかくしておいてしゃぶるの。お休み時間には、鉛筆だの、ガラス玉だの、紙人形やなにかと、とりかえっこするの。また、好きな子にはあげるし、きれいな人の前では見せびらかして食べるの。みんなかわりばんこにごちそうするの、あたしも、たびたびごちそうになったわ。それをまだお返ししてないの、どうしてもお返ししなればねえ、だってお返ししなれば顔がつぶれてしまう

わ。」

「お返しするのに、どのくらいいるの？」

メグは、財布をとり出しながら尋ねました。

「二十五銭でたりますわ。あまったぶんで、おねえさんにも、ごちそうできますわ、ライムお好き？」

「あまり好きじゃないわ。あたしのぶんもあげます。では、お金、できるだけ長く使うのよ、ねえさんだって、もうそんなにないんですから。」

「ありがとう。お小遣のあるの、いい気持ねえ、みんなにごちそうしてあげるわ、わたしこの週は、まだ一度もライム食べないわ。ほんとは食べたいけど、お返しできないのに、一つでもいただく

の気がひけるわ。」

つぎの日、エミイはいつもよりすこしおそく学校へ行きました。けれど、しめった、とび色の紙づつみを机のおくにしまう前に、みんなに見せびらかしてしまいました。すると、それから五分とたたぬうちに、エミイが二十四のおいしいライム（エミイはその一つを学校へ来る途中で食べました。）をもっていて、それを大ぶるまいするとううわさが、たちまち仲間につたわり、お友だちの、エミイへのおせじは、ものすごいものとなりました。ケティはつぎの宴会によぶといいましたし、キングスレイは、つぎのお休み時間まで、時計を貸してあげるといいましたし、ライムをもっていないといつて、エミイをあざけたことのあるスノーと

いう、いじわるの子もたちまち好意をよせて、エミイの得意でない算数を教えてやるといいました。けれど、エミイは、スノーのいったわる口を忘れてはいけませんでした。それで、きゆうにそんな親切はむだよ、あなたにあげないという、電報を発して、スノーの希望をペしやんこにしてしまいました。

ところが、ちようどその日、ある名士が学校へ参観に來ました。そして、エミイのかいた地図がおほめにあずかりました。その名譽にエミイは得意になり、スノーははげしい苦しみを味わいました。そこで、名士が教室から出ていくと、重要な質問でもするよくなふうをして、デビス先生のそばへいき、エミイがライムを机のなかにかくしていることを告げました。

デビス先生は、きびしい先生で、チュウインガムのはやったときも、とうとうやめさせてしまいましたし、小説や新聞をもつて来ると、とりあげてしまいました。生徒が手紙をやりとりすることもよさせました。ですから、ライムがはやりだすと、ライムをもつて来てはいけない、もしもつて来た者を見つけたらむちでうつと、おごそかにいわたしたのです。それは、つい一週間ほど前のことでした。

それに、この日、先生はたしかにきげんがわるかったのです。それで、スノーの告げたライムという言葉は、まるで火薬に火をもつていったようなものでした。

「みなさん、しずかに！ エミイ・マーチ、机のなかのライムを

もつてここへ来なさい！」

となりになっていた生徒が、ささやきました。

「みんなもつていくことないわ。」

そこで、エミイはす早く半ダースほどを、つつみからふり落して、先生のところへもつていきました。先生は、このライムのおいが大きらいでしたから、顔をしかめて、

「これで、みんなですか？」

「いいえ。」と、エミイは口ごもりました。

「のこりをもつて来なさい。」

エミイは、じぶんの席へ帰り、いわれたとおりにしました。

「たしかに、もうのこっていませんか？」

「うそ、いいません。」

「よろしい、それでは、このきたならしいものを、二つずつもつていって、窓からすててしまいなさい。」

このはずかしめに、顔をあかくして、エミイは六度も窓へ往復しました。ライムがすてられると、窓の下の往来から子供たちのよろこびの声が起りました。みんなは、その声を聞いて、ライムをおしみ、無情な先生をにくみました。エミイが、すっかりライムをすててしまうと、えへんと、せきばらいをして、きびしい顔つきでいいました。

「みなさんは、一週間ほど前に、わたしがいい聞かせたことをおぼえているはずです。ところがこうしたことが起つて、まことに

ざんねんです。わたしはじぶんのつくった規則をまもります。さ、マーチ、手を出しなさい。」

エミイは、びっくりして、りよう手をうしろへまわし、かなしそうな、許しを乞うような目をしました。エミイは、先生のお気にいっていた生徒の一人でしたし、その嘆願の目つきは言葉よりもつよく、先生の心を動かしたようでしたが、だれかが、ちえつ！ と、舌うちする音がしたので、かんしやくもちの先生は、エミイを許すことなんか、考えようとせず、

「手を出して、さあ！」と、宣告をしてしまいました。

エミイは、自尊心のつよい子でしたから、泣いたりあやまつたりするようなことはなく、頭をもたげひるむことなく、その手が

はげしく五六度うたれるままに、まかしていました。けれど、人からうたれるのは、これがはじめてで、そのはずかしめは、エミイにとっては、先生からなぐりたおされたほどにも感じました。

「休み時間まで教壇の上に立っていないさい。」

デビス先生は、どこまでも、ばつを加えるつもりでした。

これもエミイにとって、たまらないはずかしめでした。けれど、それをやらなければなりません。エミイは、その場にたおれそうになる足をふみしめて、その不名誉の場所に立ち、まつさおな顔をして立ちつづけました。一時間ほどにも思われる十五分がすぎ、先生が、

「休め、もうよろしい、エミイ」と、いったときには、もううた

れた手の痛みを忘れ、うれしくてたまりませんでした。エミイは、だれにも口をきかず、ひかえ室へいき、じぶんのものをひつつかんで二度と来るものかと、怒りの言葉をもらして、立ち去りました。

エミイが、家へ帰ったとき、すっかりしよ氣ていました。やがて、ねえさんたちが帰ってきました。ねえさんたちは話を聞いてすっかりふんがいました。

メグは、エミイのはずかしめられた手を、リスリンと涙で洗ってやり、ジヨウは、すぐにデビス先生をしばらくあげろといいました。ベスは、じぶんのかわいいねこも、こんなときのエミイにはなくさめにならないと、思いました。ハンナは、わる者めと、い

つて、げんこをふりあげ、夜の食事のじやがいもが、わる者でももあるように、すりこ木でつぶしました。ただ、おかあさんだけは、あまり口もきかず、心をいためていたようでしたが、エミイをやさしくなぐさめました。

エミイが逃げて帰ったことは、親しい友だちのほか、だれも気がつきませんでした。けれど、よく気をつく生徒たちは、デビス先生が、その日の午後からたいへんやさしくなり、それでいっつになくびくびくしているのに気がつきました。ちようど授業のおわるころ、こわい顔をしたジョウが来て先生に母の手紙をわたしました。

それから、のこっていたエミイのもちものを一まとめにまとめ

ると、それをもって帰っていきました。

その晩、おかあさんがいいました。

「エミイ、退学させました。むちでぶつことには賛成できません。デビス先生の教育方針にも感心できないし、友だちもためにならないようです。けれど、ほかの学校へかわることは、おとうさんとうかがってからでないとできません。だから、まい日、これからバスといっしょに勉強するんです。ただ、あなたがライムを机のなかにいれていたことは、同情できません。規則をやぶったのですから。」

「ね、おかあさんは、あたしがあんなふうには、人の前ではじをかかさされたのを、あたり前と思っていらっしゃるんですか？」

「あやまちを改めさせるのに、おかあさんならば、あんなやり方をしません。ただ、あなたは、このごろ、すこしうぬぼれが強くなつていくようです。なおさなくてはいけません。あなたは、才能も素晴らしい性質ももっているけど、それを見せびらかしてはだいなしです。へりくだるといふ気持、それがあなたをぐつと美しくするでしょう。」

そのとき、むこうで、ジヨウと将棋をさしていたローリイが大声でいきました。

「そのとおり！　音楽のすばらしい才能をもっているながら、じぶんでは気づかずにいる、あるおじょうさんを、ぼくは知っています、その人は、ひとりでいるとき、どんなりっぱな音楽を作曲

しているのか知らずにいるし、そのことを人からいわれても本気にしません。」

ローリーのそばに立っていたバスが、それを聞いていました。「そんなすてきな方とお友だちになりたいわ。きつと、あたしのためになる方よ、あたしなんて、とてもだめ。」

ローリーは、いたずらっ子らしく、

「あなたは知っていますよ。その人は、ほかのだれよりも、あなたのためになっていますよ。」と、いったので、バスは顔をあからめ、はずかしがってクツシヨンに顔をうめました。

ジョウは、バスをほめてもらったお返しに、ローリーに勝をゆずりました。バスはほめられてからは、いくらすすめられても、

ピアノをひこうとしませんでした。ローリイは、いいきげんで、たのしそうにうたいました。

ローリイが帰っていつてから、エミイは、

「ローリイは、なんでもできる方なの？」と、いうと、おかあさんが、

「教育もあり、天分もあるから、かわいがられて、増長しなければ、りっぱな方におなりでしょう。」と、答えました。

「うぬぼれたりなさらないでしょう？」と、エミイが尋ねました。「ちつとも。だから人をひきつけるのよ。」

「たしかに、気どらないのは、りっぱなことだわ。」と、エミイはしみじみいいました。

「教養とか才能は、へりくだっていても、あらわれて来ます。見せびらかさなくてもいいわけです。」

ジョウが、そのとき、

「あなたの帽子や服やリボンを、みんな一度に身につけて、人に見せびらかさなくてもいいわけね。」と、いったので、おかあさんのお説教は、にぎやかな笑い声のなかにおしまいとなりました。

第八 ジョウの原稿

エミイが、土曜日の午後、ねえさんたちの部屋へいくと、メグとジョウが外出の支度をしていましたが、ないしよらしいので、

「おねえさんたち、どこへいらつしやるの？」と、尋ねました。すると、ジヨウは

「どこへだつていいじゃないの、小さな子はそう聞きたがらないものよ。」と、つつけんどんにいいました。

「わかつたわ！ ローリイといつしよに、七つの城のお芝居を見にいらつしやるのね。あたしもいくわ。おかあさんは、見てもいいとおつしやつたわ。あたしお小遣もあるし。」

メグは、なだめすかすように、

「まあ、あたしのいうことをお聞きなさいよ。おかあさんは、あなたの目がまだなおっていないから来週バスやハンナといつしよに、いくといいつて。」

エミイは、あわれっぽい顔をして、

「いやだあ、おねえやんやローリイといく、半分もおもしろくないわ。ね、お願いだからいかせてよ。長いことかぜひいて家にはかりいたんですもの、ねえ、おとなしくしますから。」と、せがむのでした。

「いつしよにつれていつてはどう？ あつ着させていけば、おかあさんだつて、なにもおつしやらないでしょう。」と、とうとうメグが、しかたがないというようにいいました。

「それなら、あたしいかないわ。二人だけ招待されたのに、つれていくのは失礼だわ。」

このジョウのいいかたや態度は、ますますエミイを怒らせまし

た。靴をはきながら、エミイは、

「メグねえさんがいいっておっしゃったから、あたしいきます。

じぶんで切符買うから、ローリイにめいわくかけません。」

「あたしたちのは指定席よ。と、いって、あなた一人はなれていられないしさ、そうすると、ローリイがじぶんの席をゆずるでしょう。それじゃ、つまらない。もしかしたら、ローリイが切符も一枚買うかもしれないけど、それじゃずうずうしいわ。だから、おとなしく待っていていらっしやい。」

ジョウは、仕度にあわてて、針で指をさしたので、ますますふきげんになって、エミイをしっかりとつけました。

エミイは泣き出しました。メグがなだめていると、階下でロー

リイがよんだので、二人は、いそいでおりていきました。二人が出かけていくのを、エミイは窓から見おろして、おどかすようにさげびました。

「今に、後悔するわよ。ジヨウさん、おぼえていらっしやい！」
「ばかな！」と、ジヨウがやり返して、玄関の扉をぴしゃつと閉めました。

「七つの城」のお芝居は、とてもよかったので、三人はたのしく見物しました。けれど、ジヨウはときどき、きれいな王子や王女に見とれながらも、心にくらい影がさしました。妹が、後悔するわよといった言葉が、あやしく、耳にのこっていたからでした。

ジヨウとエミイは、前からよくはげしいけんかをしました。二

人とも気がみじかく、かつとするとひどくめんどうなことになる
のでした。けれど、二人とも長く怒ることはなく、けんかの後で
は、たがいによくなるうとするのですが、日がたつと、またくり
返すことになるのでした。

二人が家へ帰ったとき、エミイは知らん顔をして本を読んでい
ました。ジョウは、帽子を二階へしまいにいきましたが、この前
けんかをしたとき、エミイがひき出しをひっくり返したので、た
んすやかばんや、たなの上などをしらべましたが、なんともなっ
ていないので、エミイがじぶんを許してくれたものと思いました。
けれど、それはジョウの思いちがいであることが、あくる日に
なつてわかりました。その日の午後ジョウは血相をかえて、メグ

とベスとエミイが話しあっているところへ、とびこんで来て、息をきらして尋ねました。

「だれか、あたしの原稿とった？」

メグとベスは、いいえといいましたが、エミイは炉の火をつついてだまっていました。

「エミイ、あなたですね。」

「あたし、持ってないわ。」

「じゃ、どこにある？」

「知らないわ。」

「うそつき！ 知らないとはいわさないわ。さあ、早い白状なさい。白状しないか。」

ジヨウは、ものすごい顔でどなりました。

「いくらでも怒るがいいわ。あんなつまらない原稿なんか、もう出ないわよ。」

エミイは、どうにでもなれというような、いいかたでした。

「どうして！」

「あたしが焼いちやったから。」

「なに？ あんなに苦労して、おとうさんがお帰りになるまでに書きあげるつもりなの、あの大切な原稿を、ほんとに焼いたの？」

ジヨウは、まっさおになり、目は血ばしり、ふるえる手でエミイにとびかかりました。

「ええ、焼いたわ。昨夜、いじわるしたからよ。おぼえていらっ

しやいといったでしょう。」

ジョウは、悲しみと怒りに、かつとなつて、

「ばか、ばか！ 二度と書けないのよ。あたし一生あなたを許さない。」

メグもベスも、どうしようもありませんでした。ジョウは、エミイの横つつらをひっぱたいて、部屋をとび出し、屋根部屋のソファに身を伏せて泣きました。

おかあさんは、帰宅してその話を聞き、エミイをしかりました。エミイはわるいことをしたと思いました。けれど、ジョウの原稿は、五六篇のかわいいお伽話でしたが、文学的才分と全精力を数年間かたむけて書いたもので、ジョウにとっては、とり返しので

かぬ損失でしたから、ジヨウは、お茶のベルが鳴ったとき、いかにもこわい顔をして出て来ました。エミイは、ありったけの勇気をふるい起して、

「ジヨウ、ごめんなさいね、あたし、ほんとうにわるかったわ。」と、あやまりました。

ジヨウは、ひややかに、

「許してあげるものか。」と、答え、エミイにとりあいませんでした。

だれも、この大事件のことを口にしませんでした。ジヨウがじぶんの怒りをやわらげるまで、なにをいってもしようがないからです。そんなわけで、その晩はたのしくなく、みんなだまって針

仕事をしました。おかあさんが、おもしろい物語を話しても、なにかもの足りなくて、家庭の平和は、すっかりみだされていました。おもくるしい気分は、メグとおかあさんがうたつても晴れませんでした。

おかあさんは、ジョウにおやすみなさいのキッスをしたとき、やさしい声で、

「ねえ、怒りを明日まで持ち越さないように、今夜中にきげんをなおしましょうね。おたがいに、ゆるし合い助け合いしましょう。明日からは、またたのしくね。」と、ささやきました。

ジョウは、おかあさんの胸に、顔をうずめました。悲しみと怒りを、涙で流したかった。けれど、あまりにいたでは深く、とう

とう頭をふり、エミイに聞えよがしに、

「あんまりひどいんですもの、許してやれませんか。」

そういつて、ジョウは、さっさと寢室へいつてしまったので、その夜はおもくるしい気分でおわりました。

つぎの日も、おもくるしい気分は去らず、みんなつまらなそうでした。ジョウは、ぶんぶんして、ローリイを誘つてスケートにでもいつてみようと思つて出かけていました。エミイは、じぶんのほうからあやまったのに、ジョウがまだ怒つていたので、なお気をわるくしました。メグは、エミイにむかつて、

「あなたがわるかったのよ。大切な原稿をなくされたんですもの、なかなか許せないわ。だけど、いいおりを見て、あやまればいい

と思うの。だから、あなたもスケートにいつてごらんさい。そしてジョウがローリイと遊んで、きげんがよくなつたとき、ジョウにキツスしてしてあげるか、なにかやさしいこととしてあげるのよ。そしたら、心から仲なおりしてくれるにちがいないわ。」

この忠告が氣にいったので、エミイはいそいそと仕度をして、後をおいかけました。川までは、そんなに遠くはなかつたが、エミイがいったとき、二人はすべる用意ができていました。ジョウは、エミイのすがたを見ると、くるりとせなかをむけました。ローリイは、エミイの来たのに氣がつかず、氷のあつさをしらべるために、そのひびきを聞きわけながら、用心ぶかく岸にそつてすべつていきました。ローリイは、角をまがるとき、

「岸について来なさい。まんなかはあぶない。」

そういつて、すがたが見えなくなりました。

ジョウが、すべって、その角までいったとき、エミイはずつとはなれたところで、川のまんなかへすべっていきました。ジョウは、みような心さわぎをおぼえましたが、ふいに氷のさける、ぱりつという音とともに水けむりをたて、エミイがりよう手をあげ、悲鳴とともに落ちこむのを見ました。その悲鳴に、ジョウは心臓がとまると思うくらい、おどろきました。ローリイをよぼうとしました。ローリイをよぼうとしました。すると、なにかが、じぶんのそばを走ったと思うと、

「ぼうをもって来て、早く、早く！」と、ローリイのどなる声が

聞えました。

それから、ジヨウは、まるで夢中でした。ただし冷静なローリーのさしずのままになって、おびえているエミイを救いあげることができました。

ふるえて、ぼとぼとしずくをたらしながら泣いているエミイを、二人は家までつれて帰りました。ジヨウは、口ひとつきかず、青い顔をし、手にきずをし、服はさけたままで、とびまわり、なにかと用事をしました。さわぎがおさまった後、エミイは毛布にくるまって炉の火の前でねむってしまいました。

おかあさんは、エミイのそばにすわってましたが、ほつとして、ジヨウをよんで、手にほうたいをしてやりました。

「おかあさん、だいじよぶでしょうか？」

「ええ、けがもしていないし、かぜもひかなかったようです。あなたも、よくくるんで、大いそぎでつれて来てくれたからね。」

「ローリーが、みんなしてくれたのです。わたしは、エミイをほつといたから、一人ですべていって落ちたんです。もしかして死んだら、あたしのせいですわ。」

ジョウは、後悔の涙を流しましたが、それはもつと重い心の痛みからのがれることのできた、感謝の涙でもありました。

「みんな、あたしの、おそろしいかんしやくからですわ。ああ、どうして、こうなんでしょう。おかあさん。どうぞあたしを救って下さい。」

「ええ、ええ、救ってあげますよ。そんなに泣かないでね。今日のことよく覚えておいて、二度としないと誓いなさい。おかあさんだつて、じつは、あなたとおなじくらい、かんしやくもちなんですよ。それに、おかあさんはうち勝とうとしているんです。」

「まあ、おかあさんが？ だつて、一度だつて、かんしやくを起しなすつたの、見たことがありますわ。」

ジョウは、おどろしい目をまるくしました。

「なおすのに四十年かかりました。やっとおさえられるようになりました。ほとんど、まい日、怒りたくなるけど、顔に出さぬようになつたのです。これからは、怒りたくならないようにしたいのですが、それには、もう四十年かかるかもしれませぬ。」

ああ、その言葉はジヨウにとって、どんなお説教より、はげしいおしかりより、よい教訓でありました。そして、四十年も祈りつづけて欠点をなくそうとしたおかあさんのように、じぶんもどうかしてこの欠点をなおしたいと思いました。

「ねえ、おかあさん、どういうやりかたなさるの？ 教えて下さい。」

「そう、あたしは、今のあなたより、すこし大きくなったころ、おかあさんをなくしました。あたしは、自尊心が強いので、じぶんの欠点をたれにうち明けることもできず、ただ一人で長い年月を苦しみました。なん度も失敗して、にがい涙を流しました。そのうちに、あなたたちのおとうさんと結婚して、しあわせになっ

たので、じぶんをよくすることが、らくになりました。けれど、四人の娘ができ、貧乏になって来ると、またまたむかしのわるい欠点がでて来そうです。もともと、あたしは忍耐がないので、娘たちがなにか不自由しているのを見ると、とてもたまらない気持ちになるんです。」

「まあ、おかあさん！ それじゃ、なにがおかあさんを救って下さったんですか？」

「あなたのおとうさんです。おとうさんは、忍耐なさいます。どんなときも、人をうたがうことなく不平なく、いつも希望をもつておはたらきになります。おとうさんは、あたしを助けなぐさめ、娘たちの御手本になるように、教えて下さったのです。だから、

あたしは娘たちのお手本になろうとしてじぶんをよくすることに努めました。」

「ああ、おかあさん。もしあたしが、おかあさんの半分もいい子になれたら本望ですわ。」

「いいえ、もつともつといい人になって下さい。今日味ったよりも、もつと大きな悲しみや後悔をしないように、全力をつくして、かんしやくをおさえなさい。」

「あたし、やってみます。でも、あたしを助けて下さいね。あたしね、おとうさんは、とつてもおやさしいけど、ときどき真顔におなりになり、指に口をあてて、おかあさんをごらんになるのを見ましたわ。そうすると、おかあさんは、いつも口をむすんで、

部屋を出ていらっしやいます。そういうとき、おとうさんに、お
かあさんは、お気づかせになつたんですか？」

「そうなんです。そういうふうに、助けて下さいとお頼みしたん
です。おとうさんは、お忘れにならないで、あのちよつとしたし
ぐさや、やさしいお顔つきで、あたしがきつい言葉を出しそうに
なるのを救つて下さつたのですよ。」

ジョウは、おかあさんの目に涙があふれているのを見て、いい
すぎたかしらと、心配になつて尋ねました。

「あたし、あんなふうにいったの、いけなかつたでしようか？
でも、あたし思ったこと、おかあさんにみんないつてしまうの。
とてもいい気持なんですもの。」

「ええ、なんでもおつしやい。そうやって、うちあけてくれると、おかあさんはうれしいのよ。」

「あたしは、おかあさんを悲しませたのではないかと思って。」
「いいえ、おかあさんは、おとうさんのことを話しているうちに、お留守ということががしみじみさびしくなり、おとうさんのおかげということを思ったりしたので。」

「だって、おかあさんは、おとうさんに従軍なさるように、おすすめになったし、出発のときもお泣きにならなかつたし、留守になつてからも一度もこぼしたりなさらないし、だれの助けもあてにしていらつしやらないし。」と、ジョウは、いぶかしそうにいました。

「あたしは、愛する御国のために、あたしの一ばん大切なものをささげたのです。どうしてぐちがいえましよう。あたしが人の助けがいらないように見えるのは、おとうさんよりも、もつといいかたがおかあさんが慰め励まして下さるからなの、それは、天国のおとうさんです。天国のおとうさんに近づけば、人の知恵や力に頼る必要はなく、平和と幸福が生れます。さ、あなたもこのおとうさんのところへいきなさい。すべての心配や悲しみや罪をもつて。ちようど、あなたがおかあさんのところへ心から信頼して来るように、」

ジョウの答えは、ただおかあさんに、しつかりすがりつくことでした。そして、だまって、心からある祈りをささげ、いかなる

父や母よりも、いつそう強いやさしい愛で、すべての世の子供をむかえて下さる「おとうさん」に、近づいていくのでした。

エミイは、眠ったまま、ねがえりをうって、ため息をつきました。ジヨウは、今すぐに、じぶんの過失をつぐないたいと思うためか、今までにないまじめな表情をしました。

「あたし、かんしやくをつぎの日までもち越して、エミイを許さなかった。もしローリさんがいなかったら、とんだことになったんだわ。ああ、どうしてあたしは、こんなにいけないんでしょう？」

ジヨウは、エミイの上によりかかり、枕の上のみだれ髪をなでながら、そういいましたが、それが聞えたもののように、エミイ

はぼつちり目を開け、ほほえみをうかべて手をさし出しました。二人はなんともいいませんが、毛布にへだてられながらも、しっかりと抱き合い、心こめたキスに、すべてを許し忘れてしまいました。

第九 虚栄の市

四月のある日、メグはじぶんの部屋で、いもうとたちにかこまれながら、トランクに荷物をつめこんでいました。おかあさんは、娘たちが年ごろになったら与えようと考えて、むかしのはなやかだった時代の記念品のしまつてある杉箱を開けて、絹の靴下と、

きれいな彫刻のある扇子と、かわいい青いかざり帯を下さいました。

あくる日は、うらかな天気で、メグはたのしい二週間の遠出に家を出ました。上流のマフォット家の客になりに行くのです。おかあさんは、あまりこの訪問をよろこびませんでした。メグが熱心に頼むし、サリイがよく面倒を見ると約束してくれたので、冬の間よくはたらいたごほうびの意味で許したので、メグは、上流社会の生活を味わう第一歩をふみ出したのであります。

マフォット家に客となつてみると、メグはそのすばらしい家や、そこに住む人々の上品さに、気をのまれてしまいました。その生活は、軽薄でしたが、みんなが親切でしたから、らかな気持にな

りました。すばらしいごちそうをたべ、りっぱな馬車で乗りまわし、上等な服を着かぎって、なにもせず遊び暮すことは、たしかに、たのしいことでした。それはメグの趣味にかない、メグはその家の人たちの、会話や態度や服の着こなしや、髪のちぢらしかたなどを、まねしようと努めました。そして、金持の家の暮らしのゆたかさにくらべると、貧乏なわが家の暮しが、いかにも味気なく不幸に見えて来ました。

メグは、マフオット家の、三人のわかいおじょうさんたちの氣にいつて、散歩、乗馬、訪問、芝居やオペラ見物、夜会など、いつもいつしよに、たのしい時間をすごしました。そして、ベルには婚約者があることがわかりましたが、メグはそれに興味をもち、

ロマンチックなことに思えました。

マフオット氏は、ふとつた老紳士で、メグのおとうさんを知っていました。マフオット夫人も、やはりふとつた婦人で、メグをかわいがってくれ、「ひな菊さん」という名で、よんでくれました。

いよいよ、夜会があるという日、三人はみんなすばらしい服を着て、はしゃいでいるのに、メグはじぶんのポプリンの服のみすぼらしさに心がおもくなりました。それでも、服のことなど、なんとも思っていないように、三人は親切にメグにむかつて、髪をゆつてあげようとか、かざり帯をしめてあげようとかいいましたが、メグはその親切のなかに、じぶんの貧しさへのあわれをみて

とり、いつそう心は重くなるのでした。

そこへ、女中が花のはいつている箱をもつて来ました。アンニイが、

「ジョージから、ベルへ来たんだわ。」と、いいましたが、女中は、手紙をさしだしながら、

「マーチさんへと、使いの者が申しました。」と、いいました。

「まあ、すてき。どなたから？ あなたに恋人があるとは知らなかったわ。」

みんなは、強い好奇心をいだきました。

「手紙は母から、花はローリイからですわ。」

「まあ、そうなの。」と、アンニイは、みような表情でいいまし

た。

母からの手紙は、みじかいけれど、よい教訓でした。メグはポケットにしまいました。また、花はしずんだ気持をひきたててくれました。その幸福な気持で、メグは、しだとばらをわずかとつて、あとは気前よくわけましたので、メグのやさしさに心ひかれたいようでした。メグが、みどりのしだを髪にさし、ばらの花を胸にさしたので、服はそのためにいくらかひきたって見えました。

メグは、その夜、心ゆくまでダンスをしました。みんなが親切にしてくれ、歌をうたえばいい声だとほめ、リンカーン少佐は、あの目の美しい令嬢はどなたと尋ねましたし、マフオット氏は、メグの身体にばねみたいなものがある、ぜひメグとダンスすると

いいました。

こうしてたのしくしていたのに、温室のなかに腰かけて、ダンスの相手がアイスクリームを持って来てくれるのを待っていたとき、うしろで話す話し声をふと聞いて、メグは気分をこわされました。

「いくつぐらいでしょう?」

「十七八かしら、」

「あの娘たちのうちの一人が、そういうことに、なったらたいしたものですよ。サリイがいつてましたが、あの人たちは、このごろとても親しくしていて、それに、あの老人は娘たちに、まるで夢中になっているんですって。」

「それやマーチ夫人の計略ですよ。娘のほうではそんな気はなさそうだけど、」

そういったのは、マフオット夫人でした。

「あの子ったら、おかあさんからだなんてうそついて、花がとどいたら顔をあかくしたわ。いい服さえ着せたら、きれいになるでしょうに。木曜日にドレス貸してあげようといったら、あの子、気をわるくするかしら？」

「あの子、自尊心は強いけれど、モスリンのひどい服しかないのだから、気をわるくはしないでしょう。それに今晚の服をやぶくかもしれないから、貸してあげる口実になるわ。」

「そうねえ。あたしローレンスをよんで、あの子をよろこばして

あげましょう。そして、後で、からかってあげましょう。」

そこへ、ダンスの相手もどつて来ました。メグは、今のうわさ話に怒りをもやし、すぐにも家へ帰って、おかあさんに心の痛みを訴えたくなりました。

けれど、メグの自尊心は、むろんそのことをさせるわけもなく、できるだけ、ほがらかにふるまったので、だれもメグの努力に気づきませんでした。

夜会がおわると、メグはほっとしました。ベットのなかで考えていると、ほてったほおに、涙が流れました。あのおろかなうわさ話は、メグに新らしい世界を開いてくれ、古い平和の世界を根

こそぎみだしてしまいました。あわれなメグは、ねぐるしい一夜をあかし、おもいまぶたの、いやな気分で床をはなれました。

その朝は、だれもぼんやりしていました。娘たちが編物をはじめる気力が出たときには、もうおひるでした。メグは、みんなが好奇心で、じぶんのことを気にしていることを知りましたが、ベルが手をやめて感傷的ないかたで、こういつたので、なにもかもわかりました。

「ねえ、ひな菊さん、木曜日の会に、あなたのお友だちのロールンスさんに招待状を出しましたの。あたしたち、お近づきになりたいし、それに、あなたに対する敬意ですからね。」

「御親切にありがとうございます。でも、あのかた、いらつしや

らないでしょう。七十に近い、お年よりですもの。」

「まあ、ずるい、あたしのいうのは、わかいかたのほうよ。」と、ベルは笑いました。

「わかいかたって、いらつしやいませんわ。ローリイなら、ローリイなら、まだ子供で、いもうとのジヨウウくらいでしょう。あたしはこの八月で十七ですもの。」

「あんなりっぱな花をおくって下すって、ほんとにいい方ね。」と、アンニイが、意味ありげにいいました。

「ええ、いつでも下さるの。あたしの家のみんなに。あのかたの家には、いっぱい花があるし、あたしの家ではみんなが花がすきだからです。母とローレンスさんとはお友だちでしょう。だから、

あたしたち子供同志も遊びますの。」

メグは、この話を、うちきつてくれればいいと思いました。

「ひな菊さんは、まだ世間のことにうといのね。」と、クララはうなずきながら、ベルにむかつていいました。

「まるで、まだあかちゃんね。」と、ベルは肩をすぼめました。

そのとき、マフオット夫人が、レースのついた絹の服を着てはいつて来ました。

「あたし、これから娘たちのものを、もとめにまいります、みなさん御用はありませんか？」

「ございませんわ、おばさま、ありがとうございます。あたしは木曜日には、あたらしいピンクの絹のを着ますし。」と、サリイがいました。

「あなた、なににお召しになるの？」と、メグにサリイが尋ねました。

「昨夜の白いのを来ますわ。ひどくさけましたが、もしうまくなおせましたら。」

「どうして、かわりを家へとりにおやりにならないの？」と、気のきかないサリイがいました。

「かわりなんか、あたしありませんわ。」

やっとメグがいったのに、サリイは人のよさそうな、びつくりしたふうで、

「あれつきり、まあ、」と、いいかけましたが、ベルは頭をふつて、サリイの言葉をさえぎってやさしくいいました。

「ちつともおかしくないわ。まだ社交界に出ていないのに、たくさんドレスこしらえておく必要ないわ。ひな菊さん、いく枚あつても、お家へとりにいかせなくてもいいわ。あたしの小さくなつた、かわいい青色の絹のが、しまつてありますから、あれを着てちようだいな。」

「ありがとうございます。でも、あたしみたいな子供には、この前のでたくさんですわ。」

「そんなことおっしゃらないで、あなたをきれいにしてみたいの。だれにも見せないように仕度してシンデレラ姫みたいに、ふたりでふいに出ていって、みんなをおどろかしたいの。」と、ベルは笑いながら、けれど、あたたかい気持ですすめるので、メグもそ

れをこぼむことはできませんでした。

木曜日の夕方、ベルと女中で、メグを美しい貴婦人にしあげました。髪をカールし、いい香りの白粉をぬりこみ、唇にさんご色の口紅をぬり、空色のドレスを着せ、腕環、首かざり、ブローチなど、装身具でかざりたてました。美しい肩はあらわに、胸にばらの花はあかく、ベルも女中も、ほれぼれとながめました。

「さあ、みんなに見せてあげましょう。」と、ベルは、ほかの人たちのつめかけている部屋へ、メグをつれていきました。

メグは、ハイヒールの青い絹の舞踏靴をはき、長いスカートをひきずり、胸をわくわくさせながら歩いていきました。鏡がかわいい美人だと、メグにはつきり教えてくれたので、メグはかねて

の望みがかなえられた満足を味わい、じぶんから進んで、美しさを、見せびらかそうとさえしました。ベルは、ナンとクララにむかつて、

「あたしが、着かえて来る間に、ナン、あなたは裾さばきと、靴のふみかたを教えてあげてね。ふみちがえてつまずくといけないから、それから、クララ、あなたの銀のちようちよを、まんなかにさして髪の左がわのカールをとめてあげてちようだい。あたしのつくった、すてきな作品をだめにしちやいやよ。」と、いつて、じぶんの成功に、さも満足らしい顔つきで、いそいで出ていきました。

ベルが鳴りひびき、マフオット夫人が、使いをよこして、娘た

ちにすぐ来るように、告げたとき、メグはサリイに、ささやきました。

「あたし、階下へいくのこわいわ。なんだか、とてもへんな、きゆうくつな気持で、それに半分、はだかみたいで。」

「とてもきれいだからいいわ。あたしなんかとてもくらべものにならない。ベルの趣味はすてき、ただつまずかないようにね。」

心のなかにその注意をたたみこんで、メグは無事に階段をおり、客間へ、しずかにはいっていききました。メグは、たちまちみんなの目をひきつけ、この前の夜会のとくと、まるでちがつて、わかいい紳士たちが、ちやほやして、いろいろ気にいるようなことを話しかけました。ソファに腰かけて、他人の品定めをしていた数人

の老婦人たちは、メグに興味をもち、なかの一人がマフオット夫人に身もとを尋ねました。

「ひな菊マーチです。父は陸軍大佐で、あたしどもとおなじ一流の家がらですが、破産しましてね、ローレンスさんと親しいんです。家のネットはあの子に夢中なんですよ。」

「おや、そんなんですの。」と、その老婦人はもつとよく見ようとして眼鏡をかけました。

メグは、聞えないふりをしましたが、夫人のでたらめにはあきれました。けれど、その妙な気持を心のすみにおしつけ、笑いをたたえて、貴婦人らしくふるまっていました。ところがメグの顔からきゆうに笑いがきえました。正面にローリーの姿を見たから

で、その目はじぶんを非難しているではありませんか。ローリイは、笑っておじぎをしましたが、メグはこんな姿でなくじぶんの服を着ていればよかったと思いました。メグは、そばへいき、

「よくいらっしやいました。お出でにならないと思っていました。」

「ジョウが、ぜひいつて、あなたのようにすを見て来てほしいというので来たんです。」

「ジョウに、なんておっしやるつもり？」

「どこの人だかわからなかったといいます。だって、まるで大人みたいで、あなたらしくないんですもの。」

「みんなでこんななりにさせたの、あたしもちよつとしてみたか

ったけど。ジョウびつくりするでしょうね？　あなたもこんなの、おいや？」

「ぼく、いやです。わざとらしく、かざりたてたの、いやです。」
年下の少年からいわれた言葉としては、あまりにするどく、メグはふきげんになって、

「あなたみたいな、失礼な人、知らないわ。」と、いつて、そこを去り、窓ぎわへいつてたたずみ、きゆうくつなドレスのために、ほてったほおを夜気にひやしました。大好きなワルツの曲がはじまっても、そのまましていると、ローリイが来て、ていねいに手をさしのべました。

「失礼なこといつて、お許し下さい。いつしよに踊つて下さい。」

「お気持をわるくするとこまります。」

「いいえ、ちつとも、ぼくダンスしたいのです。そのドレスは好きじゃないけど、あなたはほんとうに、すてきです。」

メグは、にっこり笑って気持をやわらげ、二人は音楽に合わせておどりはじめました。

「ローリイ、あたしのお願ひ聞いてね、家へ帰つてもあたしのドレスのこといわないでね、家の人々は、じょうだんがわからないし、おかあさんには心配させるから。」

「どうしてそんなものを着たんです？」

ローリイの目がなじっていました。

「どんなに馬鹿だったか、自分でお母さんにいうから、あなたい

わないでよ。」

「いわないと約束します。でもきかれたらどういいましよう！」

「あたしがきれいで、たのしそうだったとだけ、いってちようだい。」

「きれいだけど、さあ、たのしそうかしら？ たのしそうに見えない。」

「ええ、たのしくないの。おもしろいことしてみたかったけど、やっぱり性にあわないわ。あきてしまうわ。」

このとき、マフオット家の若主人のネットドが来たので、ローリイは顔をしかめました。

「あの人、あたしに三回もダンスを申しこんでいるの。だから来

たんでしよう。」

メグがいかにもいやそうにいうので、ローリイは、これはおもしろいと思いました。

ローリイは、それつきり夕飯のときまで、メグと話しませんでした。食事のとき、ネツドとその友達のフィツシヤアを相手に、メグがシャンペン酒を飲むのを見たローリイは、だまつていられませんでした。

「そんなもの飲むと、明日、頭痛がしますよ。ぼくは飲みません。おかあさんだって、お気にいらないうでしよう。」

ローリイは、ネツドとフィツシヤアに聞かれないうに、メグによりそつて、そうささやきました。

「今夜は、あたし気ちがいみたいなお人形なの。明日からはいい子になるわ。」

「それじゃ、明日もここにいたいんですね。」

ローリイに、ついとはなれて立ち去りました。

メグは、踊ったり、ふざけたり、しゃべったり、ローリイがあきれるほど、はしやぎました。帰りがけに、ローリイがあいさつに来ると、メグは、もう頭痛になやまされていましたが、

「いいこと！ 頼んだこと忘れないでね。」と、むりに笑顔をつくっていいました。

「死をもつての沈黙」と、ローリイは、フランス語で、芝居がかかりで答えて立ち去りました。

メグは、もう疲れきっていました。わびしい気分です。床にはいりましたが、あくる日も一日気分がわるく、土曜日になつて、二週間の遊びと、ぜいたくさんまいにあきあきして家へ帰つて来ました。

日曜日の晩、メグはおかあさんとくつろいだとき、あちこち見まわしながら、

「年中、お客さわぎなどいやだわ。しずかに暮すのたのしいわ。りっぱでなくても、じぶんの家が一ばんいいわ。」と、のびのびした表情でいいました。

「そう聞いてかあさんはうれしい。あなたがりっぱなところへいったので、家がつまらなく、みじめに見えやしないかと、心配し

ていたのよ。」と、おかあさんの目の、気づかわしそうな影が消えました。

メグは、おもしろそうに、いろいろの冒険を話しました。けれど、心の中になにかおもしろいものがあるらしく、九時がうつてジヨウがねようといいい出したとき、メグは思いきったというふう

に
「おかあさん、あたし白状することがありますの。」

「そうだと思っていました。どんなこと！」

「あたし、むこうへいきましようか？」と、ジヨウが気をきかしていいました。

「いいえ、いて。なんでもあなたには、うち明けてるじゃないの。」

いもうとたちの前では、はずかしいけど、あなたには、あたしのした、あさましいこと、すっかり聞いてほしいわ。」

「さあ、聞きましようね。」と、おかあさんは、にこにこしながらも、すこし心配そうでした。

「みんなで、あたしをかざりたてたことは、お話しましたが、髪をカールしたり、白粉をぬったり、ドレスを着せたりしたこと、まだ話しませんでしたね。ローリイは、正気の沙汰ではないと思つたでしょう。あたしは、お人形のようにだとか、美人だとかおだてられました。つまらないこととはわかつていながら、おもちゃになりました。」

「それつきり？」と、ジョウがいました。

「まだ、あるの。シャンペンを飲んだり、ふざけたり、はねまわったり、けがらわしいことばかり」と、メグは自責の念に堪えられないようでした。

「もつと、なにかあったでしょう？」と、おかあさんが、やさしくメグのほおをなでながらいきました。

「ええ、とてもばかげたことなの。だって、みんながあたしとローリーのこと、あんなふうにいたり考えたりするのんですもの。」

メグは、マフオット家で聞かされたいろんなうわさ話をしました。おかあさんは、こんな考えを純真なメグの心につきこんだことを不快に思っ、唇をぎゅつとむすんでいました。ジョウは、

怒ってさげびました。

「そんなばかなこと、あたし聞いたことがないわ。なぜおねえさんは、その場でいってやらなかったの？」

「あたしにはできなかつたの。でもあんまりひどいので、しやくにさわるし、はずかしいし、帰って来なければならぬのに、帰るのも忘れてしまつて。」

「あたしたちのような貧乏人の子供について、そんなつまらぬうわさ話をしていることを、ローリイに話したら、きつとどなりつけるでしょうね。」

「ローリイにそんなこといったら、いけませんわ。ねえ、おかあさん。」

おかあさんは、まじめな顔でいいました。

「いけません。ばかなうわさ話は、二度と口にしてはいけません。できるだけ早く忘れることです。あなたをいかせたのは、おかあさんの失敗でした。親切なんでしょうが、下品で、教養があさく、わかいい人たちにいやしい考えを持たせる連中ですからね。メグ、今度の訪問があなたにわるい影響があるようなら、かあさんは残念です。」

「御心配下さらないで。あたしは、自分のいけなかつたことをなおりますわ。けれど、あたしはみんなから、ちやほやされて、ほめられるの、わるい気はしませんの。」

メグは、はずかしそうにいました。

「それは、しぜんな気持です。それがために、ばかげたことをしなければいいんです。ただ、ほめられたとき、それだけの価値がじぶんにあるか反省して、美しい、へりくだる娘になることです。」

それから、話は計略のことになりましたが、メグはおかあさんにむかつて尋ねました。

「マフオット夫人のおっしゃったように、計略をたてていらつしやるの?」

「ええ、たくさんたてています。だけどマフオット夫人のいうのとはちがいます。あたしのは、娘たちが、美しくて教養のある、善良な人になって幸福な娘時代をすごし、よい、かしこい結婚を

して、神さまの御意により、苦勞や心配をできるだけすくなくして、有益なたのしい生涯を送つてほしいのです。りっぱな男の人に愛され、妻としてえらばれることは、女の身にとって一ばんたのしいことです。あたしは、娘たちがこういう美しい経験をすることを、心から望んでいます。そういうことを考えるのはしぜんで、メグ、その日の来るのを望み、その日を待つのは正しいことですし、その支度をしておくことはかしこいことです。あたしは、あなたがたのために、そういう大望をいだいています。けれど、ただ世間へおし出し、金持と結婚させたいものではありません。お金持だからとか、りっぱな家に住めるからとか、そんなことだけで結婚したら、それは家庭といえませんが、愛がかけているからで

す。お金は必要で大切なものです。上手に使えばたつといものですが、ぜひと手に入れるべき第一のものとか、ごほうびとか思つてはこまります。かあさんは、あなたがたが、幸福で、愛されて、満足してさえいれば、自尊心や平和なくして王位にのぼつてゐる王女さまたちになつてもらうより、かえつて貧乏人の妻になつてもらいたいと思います。」

メグは、そのとき、ため息をしていいました。

「貧乏な家の娘は、せいぜい出しゃばらなければ、結婚のチャンスはつかめないって、ベルがいつてましたわ。」

ジョウは、氣づよくいいました。

「そんなら、あたしたちは、いつまでも、えんどおい娘でいまし

よう。」

「ジョウのいうとおりです。不幸な奥さんや、だんなさんをあさりまわっている娘らしくない娘よりも、幸福なえんどおい娘でいたほうが、よろしい。なにも心配することはありません。メグ、ほんとに愛のある人は、相手の貧乏などにひるむことはありません。かあさんの知っているりっぱな婦人のなかには、むかしは貧乏だったかたがいくらもあります。けれど、愛をうける、ねうちのあるかたのばかりだったから、人がえんどおい娘にしておかなかったのです。そういうことは、なりいきにまかせておけばいいので、今は、この家庭を幸福にするように努め、やがて結婚の申しこみをうけたらばその新らしい家庭にふさわしい人になるし、

もしかしこい結婚ができなければ、この家に満足して暮すのです。それから、もう一つ、よく覚えていてほしいのは、かあさんはいつでもあなたが秘密をうち明けることのできる人ということ、また、おとうさんは、あなたがたのよいお友だちであるということ、です。そして、おとうさんとあたしは、あなたがたが結婚しても、独身でいても、あたしたちの生活のほこりであり、なぐさめであることを信じ、また望んでもいるということをおね。」

メグとジヨウは、

「おかあさん、あたしたちきつとそうなります！」と、ほんとに、心からさげんで、おやすみなさいをいいました。

第十 ピクニック・クラブと郵便局

春がめぐって来ると、いろいろと新らしいたのしみがはやり、しだいに日がのびるにしたがつて、長い午後の時間に、いろいろの仕事やあそびができるようになりました。

庭に手入れをしなければなりませんでした。姉妹はめいめい四分の一の地所をもらって、じぶんのすきなようにやりました。ハナが、どれがどのかたの庭か、支那から見たってわかると思いました。が、まさにそのとおりで、四人の趣味はひとりひとりちがつていました。

メグは、ばらとヘリオトロープと天人花と、かわいいオレンジ

の木をうえました、ジヨウの花壇には、二シーズン、けっしておなじじものがうえられたことがなかったのは、たえず新しい実験を試みるからで、今年は日まわりをうえるはずで、その種子はにわとりと、そのひよこの餌にするためでした。ベスは、スイート・パイ、もくせい草、ひえん草、なでしこ、パンジイ、よもぎなど、古風な香りゆたかな花や、小鳥の餌になるはこべ、子猫のためのいぬはつかなどをうえました。エミイは、小さくはあるが、かわいいあずま家をつくり、にんどうだの、朝がおだのを、その上にはわせ、いろんな花を咲かせました。そして、せの高い白ゆりだの、やさしいしだなど、たくさんの花をうえこみました。

晴れた日には、庭いじり、散歩、川でのボートあそび、花の採

集など、雨の日には、室内のあそびごとに時間をすごしました。そのあそびのなかには、もとのからのもあり、新らしいのもありましたがその一つ、ピクニック・クラブというのは、イギリス文豪ジケンスの作品中から、その名をとったものでした。このクラブは、そのころはやっていた秘密会で、土曜日の夕方、ひろい屋根部屋で開き、ずっと一年もつづけて来たのです。会はこんな順序で行われます。ランプをおいたテーブルの前に、三つのイスをならべ、ちがった色でクラブの頭文字のP、C、二つの大きな字をぬいつけた四つの白いきしように用意されました。そして、「ピクニック週報」という週刊新聞が発行され会員はみんななにか寄稿することになって、文才のあるジョウが、編集にあたりました。

今後七時、四人の会員は、クラブ室にのぼっていき、くびに、きしよをまきつけ、ものものしい態度で席につきました。ディケンスの小説のなかの名を借りて、メグは一ばん年上なので、サミエル・ピクイツク氏。ジョウは文学的才能があるので、オーガスタス・スノーダグラス氏、ベスは、トラシイ・タツプマン氏、エミイは、ナザニエル・インクル氏でありました。会長のピクイツクが、週報を読みました。週報には、創作物語、詩、地方のニュース、おかしな広告、たがいの、欠点や短所を注意しあういましめなどが、いっぱいのおつていました。今夜は、玉のはいつていない目がねをかけた会長が、テーブルをたたいて、せきばらいをし、おもむろに読みはじめました。

会長が、週報を読みおわると、いつせいに拍手の音が起り、つぎにスノーダグラス氏が、ある提案をするために立ちあがりました。

「会長ならびに紳士諸君。」と、議会で演説するような堂々たる態度と調子ではじめました。「わたくしは、ここに一名の新会員の入会許可を提議したいと思うのであります。その人は、その名誉をあたえられるにふさわしい人物でありまして、入会されたならば、クラブの精神、週報の文学的価値に寄与するところ大なるものがあります。そして、その人とは、ほかならぬテオドル・ローレンス氏です。ねえ、入れてあげましょう。」

ジョウの演説は、最後で調子がかわったので、みんな大笑いし

ました。けれど、すぐに、みんな気づかわしそうな顔をして、ひとりも発言しませんでした。そこで、会長が、

「投票によつてきめることにします。」と、いい、つづいて「この動議に賛成のかたは、賛成といつて下さい。」と、大声でうながしました。

すると、おどろいたことに、ベスのトラシイ・タツプマン氏が、おずおずした声で、

「賛成」と、いいました。

「反対のかたは、不賛成といつて下さい。」

メグとエミイ、すなわち、ピクイツク氏と、インクル氏は、不賛成でありました。そして、まずエミイのインクル氏が立ちあが

つて、いと上品にいいました。

「わたしたちは、男の子たちを入会させたくありません。男の子たちは、ふざけたり、かきまわしたりするだけです。これは、女のクラブですから、わたしたちだけで、やっていきたいと思います。」

ついで、メグのピクイク氏が、何かうたがうときにするくせの、ひたいの小さなカールをひっぱりながらいいました。

「ローリイは、わたしたちの週報を笑いものにし、あとでわたしたちをからかうでしょう。」

すると、スノーダグラス氏は、はじかれたようにとびあがって、熱をこめて、

「わたしは紳士として誓います。ローリイはそんなことは致しません。かれは書くのがすきで、わたしたちの書いたものに趣きをそえ、わたしたちがセンチメンタルになるのを防いでくれると思います。そう思いませんか？ わたしたちは、かれにすこししかなし得ませんが、かれはわたしたちにたくさんのことをしてくれます。よって、かれに会員の席をあたえ、もし入会すれば、よろこんで迎えたいと思います。」

いつも受けている利益をたくみに暗示されたので、ベスのタツプマン氏は、すっかり心をきめたようすで立ちあがりました。

「そのとおりです。たとえば、すこしぐらいの不安はあつても、かれを入会させましょう。もしかかれのおじいさんも、はいりたけれ

ば入会させてよいと思います。」

ベスのこの力ある発言に、みんなおどろき、ジョウは席をはなれて握手を求めに来ました。

「さあ、それでは、もう一度投票します。諸君はわたしたちのローリーであることを頭にいれて、賛成といつて下さい。」

ジョウのスノーダグラス氏が、いきおいこんでさげぶと、たちまち、賛成という三つの声がいっしよに聞えました。

「よろしい、ありがたいしあわせ！ さて、それでは、時をうつさず、さっそく新会員を紹介させて下さい。」と、ジョウは、戸だなを開けると、くずいれぶくろの上に、おかしさをこらえて顔をあかくして、ローリーがすわっていました。このいたずらに、

すっかりやられた三人が、

「いたずら者。ひどいわ！」と、ぶつぶついつているあいだに、ジョウはかれをひき出し、会員章をあたえて席につかせてしまいました。

「きみたち、ふたりのずるいにはおどろかされましたぞ。」と、ピクイツク氏は、こわいしかめつ面をしようとしましたが、かえつてにこにこ顔になってしまいました。その新会員に、うやうやしく敬礼をして、きわめて愛想のよいようすでいいました。

「会長閣下および淑女諸君、いや、これは失礼、紳士諸君、どうぞ自己紹介をお許し下さい。わたくしは、このクラブの末席をけがすサム・ウエラーと申します。」

「すてき すてき」と、ジヨウはテーブルをたたきながらいきました。

「ただ今、わたくしを、じょうずにひっぱり出して下すつた、忠実な友だち、そして、尊敬すべき後援者は、今夜のずるい計画については、すこしも責任はないのでありまして、これはすべてわたくしがたてた計画で、わたくしがむりをいって、やつと承知させたのであります。」

ローリイが、手をふりながらそういうと、そのじょうだんが、おもしろくてしようがないというふうに、スノーダグラス氏は、「みんなじぶんのせいになくつてもいいわ。戸だなにかくれることは、あたしがいい出したんだわ。」といいました。

「この人のいうことなど心にかけてはいけません。計画をしたわる者はわたくしです。しかし名誉にかけて、二度とこんなことはしません。今後は、永久につづくこのクラブのために、大いに力をいたす考えであります。」

「ヒヤ！ ヒヤ！」と、ジョウはフライ鍋のへりをたたきながらさげびました。

「つづける！ つづける！」と、インクル氏は、会長がうやうやしく礼をしている間にいいました。

「おお、一言申しておきたいことは、小生の受けた名誉を感謝いたしたく、となり合う両国民の親善関係をふかめる一助として、庭のすみに郵便局をつくったことであります。もとはつばめ小屋

でしたが改造しました。手紙、原稿、本、小づつみ、なんでもとりつぎ、時間の節約に役だつと思います。両国民はそれぞれかぎをもちますわけで、ここにそのかぎを贈呈することをお許し下さい。」

ウエラー氏が、かぎをテーブルの上において、自席にもどると、さかんな拍手、さけび声がありました。つづいていろんな討議がおこなわれ、めいめい、かつぱつに意見をかわしました。そして、新人会員のばんぎいを、最後にとなえて散会しました。

たしかに、ローリーのサム・ウエラー氏の入会は、このクラブに生気をふきこみ、書くものでも、週報にちがったおもむきをそえました。郵便局は、すばらしい考えでした。たくさんの奇妙な

ものがとりつがれました。悲劇台本、ネクタイ、詩、漬もの、草花の種子、長い手紙、譜本、しょうがパン、ゴム靴、招待状、注意書き、小犬などでした。ローレンス老人も、このあそびをおもしろがって、おかしな小づつみや、ふしぎな手紙や笑いの電報などを送って来ました。また、ローレンス家の園丁はマーチ家の女中ハンナにひきつけられ、本気で恋文を書いて来ました。その秘密がばれたとき、みんなはどんなに笑いころげたことでしょう！

第十一 経験が教える

「六月一日、明日はキングさんの家の人、みんな海岸へ出かけて

いって、あたしはひまになるの！　三ヶ月のお休み！　なんてうれいんでしよう！」

あるあたたかい日、家へ帰って来たメグが、ジヨウを見つけてさげびました。ジヨウは、いつになく疲れたようすで、ソファの上に横たわり、バスがそのほこりだらけの靴をぬがしてやっています。エミイは、みんなのためにレモン水をつくっていました。

ジヨウがいました。

「マーチおばさんも、今日お出かけになったわ。すてきでしょ。いっしょにいつてほしいと、いわれやしないかと、びくびくしちゃった。それで、あたし、おばさんを早くたたせたいので、お気にめすように、それこそいっしょうけんめいにはたらいたわ。だ

けど気のきいたこのおつきを、つれていこうと思われたら大へんだと心配したの。それでおばさんを馬車にのりこませると、なにかいつてたけど聞えないふりをして、大いそぎで逃げて帰ったの、ほんとに助かったわ。」

「よかったわね。それで、メグねえさん。この休みになにをなさるつもり？」と、エミイが尋ねました。

「うんと朝ねぼうして、なにもしないの。だって冬からこつち、朝早くからたたき起されて、ひとのためにはたらいてばかりいたんですもの。大いに休んであそぶのよ。」

「ふうむ、あたしはそんなだらけたの大きらい。たくさん本を集めておいたから、あの古い林檎の枝の上で、このかがやかしい少

女時代をよくするために勉強するの。」と、ジヨウがいました。
「あたしたちも、勉強はやめにして、おねえさんのまねしてあそびましょう。」と、エミイがいうと、ベスも、よろこんで、

「ええ、いいわ。あたし新らしい歌をすこしおぼえたいし、人形さんの夏服もつくらなければならぬし。」と、いいました。

そのとき、おかあさんが、針仕事の手をやめて、みんなにむかっつていいました。

「一週間、はたらかないであそんでごらんなさい。土曜日の晩になると、つまらないということが、きつとわかるでしょう。」

「そんなことありませんわ。とてもうれしいわ。きつと。」と、メグがいました。

「ねえ。わが友、祝杯をあげましょうよ。あそびは永久に！ あくせくしつこなし！」と、ジョウはレモン水がいきわたったとき、そのコップを高くささげてさげびました。

みんなはたのしそうに飲みほしました。そのときから、ぶらぶらあそびがはじまりました。あくる朝も、メグは十時までねどこのなか。ジョウは花瓶に花もささず、ベスはそうじをしないし、エミイの本はちらかったまま、ただ「おかあさんの領分」だけがきちんと片づいているだけでした。この部屋では、メグは、休息も読書もできず、あくびが出るばかり、給料で夏のどんなドレスが買えるかなどと考えるのでした。ジョウは、午前のうちはローリイと川へボートこぎにいき、今後は林檎の木の上で「広い世界」

という物語を涙を流して読みました。ベスは、戸だなをかきまわし、そのままにして、ピアノへ気をうつしていきました。エミイは、じぶんの花園のスケッチをはじめました。それから散歩にいきました。夕方になってぬれねずみになって帰って来ました。

お茶のとき、四人はその日のことを、いろいろ話し合いました。が、たのしかったけれど、いつになくその日は、永く感じられたということに、みんなの意見は一致しました。そして、つぎの日も、また、つぎの日も、休んであそびました。ところが、いよいよ一日が永く感じられ、なんとなくおちつかない気分になって来ました。すると、悪魔は四人の心をねらい、いろんなわるいことを見つけて、あばれはじめたのであります。

たとえば、メグは布地を小さくきりすぎて、一枚の服をだいなしにしてしまいました。ジョウは、本を読みすぎて目がぼやけ、いらいらした気分となつて、やさしいローリイと、けんかしてしまいました。ベスは、あそんでばかりいないで、いつもの習慣で家事のお手つだいをするので、わりにいいほうでしたが、それでも、家のなかの気分にかきまわされて、いらいらしてしまい、人形をしっかりとぼしたりしました。エミイは、ひとりであそぶことが、むずかしいことがわかりました。一日中、絵をかいてもいられませんし、人形あそびはきらいでしたし、すっかり心のつかれをおぼえました。

金曜日の晩になると、だれもあそびにあきたとはいいませんで

したが、もう一日で一週間がおわるので、うれしく思いました。おかあさんのほうでも、ほうれいざんと、ちゃんと見てとって、この教訓をいつそう印象づけたいと思つて、わざとハンナに土曜日一日、休みをあたえました。

土曜日の朝、みんなが起きてみると、台所には火の気はなく、食堂には朝御飯はなし、おかあさんもハンナもいません。

「あら、どうしたつていうんでしょう！」

ジョウがさげんだとき、メグはもう二階へかけあがつていき、まもなく、ほつとして、けれど、すこしはおかしそうな顔をしておりて来ました。

「おかあさんは、御病気ではないけど、おつかれでおやすみよ。

今日一日は、みんなで好きなようになさいって。」

「そう。いいじゃないの、おもしろいわ、あたしなにかしたくて、うずうずしてたんですもの。」と、ジョウがいました。

まったく、今、四人はすこし仕事がありました。メグがコック長となつてさつそく食事の仕度が始まり、みんなおもしろがつてやりました。おかあさんは、じぶんのことはかまわないでどいいましたが、おかあさんの食事は用意され、ジョウが二階へはこびました。わかしすぎた紅茶はにがく、オムレツはこげ、ビスケットは重曹でかたまつて、ぶつぶつしていましたが、おかあさんは、感謝して受け、ジョウが去つてしまうと、おかしくてたまらなくて、ひとりで笑つてしまいました。

「かわいそうに、みんなこまっているでしょう。でも、そうつらいとも思っていないだろうし、後のためにもなることだから。」と、つぶやいて、おかあさんはじぶんで用意しておいたもつとおいしい食物をとり出し、運ばれた食事はわからないようにしまつして、食べたことにしておいたので、みんなはうれしかったです。これはおかあさんらしい、ちよつとしたうそでした。

ところで、階下ではいろんな不平が起りました。食事の失敗に、コック長はひどくくやしがりました。ジヨウは、

「いいわ。お昼の食事は、あたしが女中になって用意するわ。ねえさんはおくさんになって、お客さまの相手をしてちょうだい。」と、いって、ローリイをよぶことを提案しました。

これは、賛成されました。そこで、ジョウは、さっそくローリイに招待状を書いて郵便局へ出しておきました。けれど、ジョウのうで前は、すこしあぶないようでした。メグが心配すると、

「だいじょうぶ、コンビーフも、じゃがいももある。つけ合せに、アスパラガスとえびを買ってくるわ。それから、ちさでサラダをつくりましょう。つくりかたの本を見ればいいわ。デザートは、白ゼリイといちご、もつとぜいたくすれば、コーヒーも出すのよ。」

「ジョウ、あなたは。しょうがパンとキャンディだけしかつくないじゃないの。あたしこの御馳走には関係しないわよ。だって、あなたが勝手にローリイをよんだんだから。」

「おねえさんは、ローリイを、そらさないようにして下さればいいわ。でもこまったら、なんでも教えて下さるでしょうねえ？」と、ジョウはむつとしました。

「ええ、でもあたしいろんなこと知らないわ。おかあさんに、尋ねてからにするほうがいいわ。」

ジョウは、じぶんのうでをうたがうようなことをいわれたので、ぷりぷり怒って部屋を出て、おかあさんへ相談にいきました。

「好きなようになさい。おかあさんのじやまをしないでね。あたしは食事は外でします。家のことなかまっついていられません。今日はお休みです。本を読んだり、手紙を書いたり、お友だちをたずねたりして過します。」

いつもいそがしいおかあさんが、今日は朝からゆれイスにかけて本を読んでいるふしぎなありさまと、けんもほろろな、その言葉に、ジヨウは、

「へんだわ。おかしいわ。」と、ひとり言をいいながら階段をおりて来ると、ベスの泣き声が聞えました。いつてみると、鳥かごのなかでカナリヤが死んでいました。

「みんな、あたしのせいよ。えさも水もちつともないわ。」と、ベスはこわばって、つめたくなつたカナリヤを手の上にのせて、かいほうしましたが、もうだめでした。

「お墓へいれてやるわ。もうあたし小鳥なんかかわない。」
ベスは、すっかり気を落していました。

「おとむらいは、お昼からにして、みんなでおまいりしましょう。さ、もう泣かないで、箱のなかへねかせておやり。」と、ジヨウはいつて、台所へはいりましたが、台所は手のつけられないほど混乱しストーヴは火が消えていました。ジヨウは火を起し、お湯がわくまでに市場に買い出しに行くことにしました。えびとアスパラガスと、いちごを二箱買って来ると、火は起きていました。ジヨウはまず台所を片づけましたが、ハンナがパンをやくように鍋にしかけたままにしてあったのを、メグがこねなおして、ストーブにのせたまま、客までサリー・ガーデナアのお相手をしていました。

ジヨウは、そこへとびこんでいつて、

「ね、パンがお鍋のなかでころがるようになったら、ふくらんだのじゃない？」

サリイは笑い出しましたが、メグはただうなずいただけでした。ジヨウは、すぐにひきかえし、すっぱいパンをそのまま、かまにいれました。

そのとき、おかあさんは、どんなぐあいに行っているか、あちこちのぞきまわり、あわれなカナリヤを箱に入れて、着せてやる服をぬっているベスに、なぐさめの言葉をかけると、外へ出かけてしまいました。娘たちは、なんだかもの足りない気がしました。そこへ、クロツカーがやって来ました。この人は、やせて黄色い顔をしたオールドミスで、いろいろとあたりをながめまし、

お昼の食事をごちそうになりたいたいと言いました。娘たちは、この人がきらいでしたが、年よりで貧乏で友だちもないから、親切にしてあげるようにいわれていました。その人は、いろいろなことを尋ねたり、やたらに批評したり、知人のうわさ話をしたりしました。

その朝のジョウの苦しい骨折は、たいへんなものでありました。ジョウの骨折は、すべて失敗におわり、アスパラガスは、一時間もにてまだかたく、パンは黒くこげ、サラダのかけじるは食べられるしろものではなく、えびには手こずり、じゃがいもはなまにえ、白ジェリイはぶつぶつだらけでした。

「まあ、いいわ。ビーフとパンにバターをつけて食べてもらえばい

いわ。だけど、朝のうちまるで、むだになったのがくやしい。」

ジョウは、いつもより三十分おくらせて食事のベルを鳴らしましたが、いつもりつぱな料理を食べつけているローリイと、失敗をほじくり出すような好奇の眼と、それをしゃべり散らす舌をもつクロツカーの前にならんだ料理をながめて、ジョウは顔がほてり、すっかりしよげてつつ立っていました。

ああ、料理はちよつと味をみただけで、のこされていきます。エミイはくつくつ笑い、メグはこまった顔をし、オールド・ミス・クロツカーは口をつぼめるし、ローリイは景気づけようとして大いにしゃべりました。ジョウの最後の頼みはいちごでした。ガラスの皿に赤いいちごをもり、おいしそうなクリームがかかって

います。だが、それを食べたクロツカーは、しかめ面してあわてて水を飲みました。ローリイは口をゆがめながらも男らしく食べてしまいました。エミイは、むせかえり、ナプキンで口をおさえて、あたふたと食卓からはなれていきました。ジヨウはふるえながら、

「まあ、どうしたの？」と、さげびました。

「お砂糖のかわりに塩をいれたんだわ。クリームすっぱいわ。」と、メグが答えました。

ジヨウは、うめき声をたてて、イスにたおれかかりました。ところが、がまんをしようとしても、おかしくてたまらないというような、ローリイの顔につきあたると、ジヨウはきゆうにこの事

件がいかにもこっけいに思われ、涙のこぼれるほど笑い出しました。すると、ぶつくさ屋のクロツカーもいつしよに、みんな笑い出し、不幸な宴会は、ともかく陽気におわりました。

「あたし、もう片づけの元気ないわ。だから、おとむらいをして、すこしおちつきましょう。」

ジョウは、みんなが食卓をはなれたときにいいました。クロツカーは帰っていききました。きつとこの料理のことを、しゃべりたかったからでしょう。みんなはベスのために、やつとおちつきました。ローリイは、木立のなかの、しだの下にお墓をほり、カナリヤはやさしいベスの手で、涙とともにうめられ、こけでおおわれ、すみれとはこべの花輪が、墓石の上にかざられました。墓石

には、ジヨウが、食事の仕度をしながらつくった詩が書かれました。

おとむらいがすむと、ベスは悲しみと、さっきのえびとで、胸がいつぱいになり、じぶんの部屋へひっこみましたが、ベッドがそのままになっていて、ねる場所ありませんでした。片づいて
いるうちに、悲しみもやわらいで来たので、台所で片づけものをして
いるジヨウの手つだいをしました。二人はへとへとにつかれました。
ローリイは、エミイを馬車にのせてつれ出しました。すっぱいク
リームで気持がわるくなっていたエミイは、大よろこびでした。

やがて、おかあさんが帰宅しました。三人の娘たちがはたらい

ていましたし、戸だなをちよつとのぞいてみて、経験の一部が成
功したことがわかりました。

ところが、やつと片づけたのに、三人は休むこともできません
でした。と、いうのは、数人の来客があり、それお茶、それお使
いというわけでした。けれど、露とともにたそがれがせまるころ、
姉妹たちは六月のぼらが美しく咲きはじめたポーチに集りました。
「なんていやな日だったでしょう。今日は。」

ジョウが口をきると、メグが、

「いつもより短いような気はしたけど、とてもいやだったわ。」

「ちつとも家みたいじゃないわ。」と、エミイ。

「おかあさんと、カナリヤがいなければ、家のような気がしない

わ。」とベスは、涙ぐんで、からの鳥かごを見あげました。

「みなさん、かあさんは帰って来ましたよ、ベス、カナリヤがほしければ、明日買ってあげましょうね。」と、いいながら、おかあさんも娘たちの仲間入りをしました。おかあさんも、一日のお休みが、あまりたのしそうではありませんでした。

「みなさん、あなたたちの経験は、もうたくさんですか！」

「あたし、もうたくさん。」と、ジョウ、ほかの三人も、声をそろえて、

「あたしも！」

「おかあさんは、みなさんが、どんなふうにするかと思つて、わざとなにかもほうつて、出かけました。けれど、今日の経験で、

みなさんは、家をたのしくするには、めいめいが、受持の仕事を忠実にやらなければならぬということがわかったと思います。ハナとあたしが、みんなの仕事をしていれば、あなたがたは、そう幸福で気らくだったとは思いませんが、とどこおりなくやっていったのです。だから、かあさんは、だれもかれも、じぶんのことばかり思ったら、どんなことになるか、教訓としてみんなに見せておきたかったのです。あなたがたが、たがいに助け合い、まい日のお仕事があれば、ひまになったとき、それがとてもたのしく思えるし、くるしいときにはたがいに、しんぼうし合っている、家はどんなにたのしく美しいでしょう。わかりましたか？」

「わかりました。よくわかりました。」

娘たちは、口々にさげびました。

「では、かあさんのいうことを聞いて、もう一度、小さい重荷をしようのですよ。たまには重く思えても、みんなのためになり、なればかるくなつていきます。はたらくことは健康にもよく、たいくつはしないし、わるい心も起らないものです。身体にも心にもよく、お金や流行ものなどより、精神力や独立心をあたえてくれます。」

みんなは、はたらくことにきめました。よろこんで。ジヨウは、お料理をけいこする、メグは、おかあさんにかわつて、おとうさんへ送るシャツをぬう、ベスはピアノやお人形あそびにあまり時間をとれないで、まい日勉強する、エミイは、ボタンのあなかが

りがじょうずになるように、また文法にかなう言葉づかいのけいこをすると、てんでに決心をのべました。

「けっこうです。かあさんは、今度の経験がうまくいって、よかつたと思います。もうくりかえさなくてもいいと思います。でもね。どれいのように、はたらきすぎないように、はたらくにもあそびにも、時間をきめて、まい日を有益にたのしく送って、時間をじょうずに使い、時間のねうちをさとるようになさい。それできたら、貧乏でも、娘時代をたのしくすごせるし、年をとってからも後悔することもなく、この人生をりっぱに生きていけるのです。」

「よくわかりました。」と、娘たちは、おかあさんの教訓を、ふ

かくも心にとどめました。

第十二 ローレンスのキャンプ

ベスは郵便局長でした。たいてい家にいて、時間をきめて局へいくことができましたし、かぎで小さな扉を開けて、郵便物をとって来て、くばるのがすきだったからです。七月のある日のこと、ベスはりょう手にいっぱい郵便物をかかえて帰り、家中にくばりました。

「おかあさん、はい、花束、ローリイは一度も忘れたことないのねえ。」と、いって、ベスはおかあさんの花瓶にさしました。

「メグねえさんには、手紙が一本、手ぶくろが片っぱ。」

メグは、おかあさんのそばにすわって、シャツのそで口をぬつていましたが、

「あら、りょうほう忘れて来たのに。お庭に落して来やしない？」
「いいえ、郵便局に片っぱしかなかったわ。」

「片っぱなんていやだわ。でもそのうちに片っぱ見つかるでしょう。あたしのお手紙は、ドイツの歌の訳したのがはいつているだけ、きつとブルック先生がなさったのね。」

「ジョウ博士には、手紙が二通、本が一冊、おかしな古帽子、帽子は大きくて、郵便局からはみ出していました。」

ベスは、書齋でなにか書きものしているジョウに、笑いながら

いいました。

「まあ、いやなローリイさん、あたし日にやけるから大きな帽子がはやるといいといったら、流行なんか気にしないで、大きな帽子かぶりなさいっていうから、あればかぶるといったの。いいわあたしかぶって、流行なんか気にしないこと見せてあげよう。」

その帽子をそばの胸像にひっかけて、手紙を読みはじめました。それはおかあさんからの手紙で、ジョウの目はよろこびにかがやきました。

「愛するジョウ——あなたが、かんしやくをおさえようと努めているのを見て、かあさんはたいへんうれしく思っています。あなたはその試み、失敗、成功についてなにもいわないし、日々あな

たを助けて下さる神さまのほかには、だれも見えていないと考えておいででしょう。けれど、かあさんものこらず見ていました。そして、りっぱな実がむすびそうですから、あなたの決心が真心からであることがわかります。愛する娘よ、しんぼう強く勇ましくやり通して下さい。かあさんが、あなたに同情をよせていることを、常に信じて下さい。」

「まあ、うれしい。百万円もらって山ほど賞讃されるよりうれしい。かあさんが助けて下さるんですもの、あたしやります。」

ジヨウは、顔をふせたので、うれし涙で原稿をぬらしてしまいました。やっと顔をあげたジヨウはこのありがたい手紙を、ふいにおそって来る敵へのふせぎの楯にするつもりで、上衣の内がわ

にピンでとめました。

もう一つの手紙はローリイからでした。

「やあ、親愛なるジョウさん、明日、イギリス人の男の子と女の子が二三人来るから、おもしろくあそびたいのです。天気がかかったら、ロングメドウへボートでいってテントを張り、べんとうを食べてからクロツケーをし遊ぼうというわけ。焚火をし料理をつくり、ジプシイみたいにやるつもり、みんないい人たちで、そういうことが好き、ブルック先生もいっしょで、男の子のかんとくをして下さるし、ケイト・ボガンさんが女の子をとりしまつて下さいます。みんなぜひ来て下さい。食料の心配は無用、すべてぼくのほうで用意します。右とりいそぎ、あなたの永久の友ロー

リイ。」

「すてきだわ！」と、ジヨウはさげんで、メグに知らせるためにいそぎました。

「ね、かあさん、いってでもいいでしょう。いけばローリイも助かるわ。あたしボートこげるし、メグはおべんとうの世話ができるし、エミイやバスだつてなにか役にたつわ。」

「ボガンの人たち、大人くさくなければいいのね。あの人たちのこと知ってる？」と、メグがいました。

「兄妹四人ということしか知らないわ。ケイトはあなたより年上、ふた児のフレッドとフランクはあたしぐらい、グレースは九つか十でしょう。ローリイは、その人たちと外国で知り合ったんだっ

て。兄妹のうち男の子が好きらしいのよ。でもローリイは、ケイトをあまり好きでないらしいわ。」

メグとジョウは、着ていく服について話し合いました。キャンブだから、しわくちやになってもかまわないものにすることにきまりました。ジョウは、

「さあ、精出して、今日中に、二倍の仕事をしておきましょう。明日、安心して遊べるように」といって、ほうきをとりにいきました。

つぎの日、いい天気を約束しに、お日さまが娘たちの部屋をのぞいたとき、そこでは、娘たちがたのしい遠足の仕度をしていました。バスは、さっさと仕度をすまして、窓ぎわへいって、おと

なりのようすを、たえず知らせました。

「あ、おべんとうをつめている。あら、ローリイが、まるで水兵さんみたいなかこうをして……」

やがて、みんなの仕度ができました。ジヨウは、ローリイがじようだん半分でよこした旧式の麦わら帽子をかぶり、あかいリボンをしばりました。それを見て、メグがやめなさいというと、ジヨウは

「あたし、だんぜんかぶっていくの。だって、かるくて大きくて日よけになるし、みんなおもしろがるわよ。」と、いって、平気で出ていきました。それにつづいて、はなやかな三人の娘たちの小隊がいきました。

ローリイは、かけて来て小隊をむかえ、じぶんの友だちに紹介しました。芝生が応接間になり、そこに陽気な光景がひろげられました。すぐにみんなは心やすくなり、えんりよなく話し合いました。

テントやおべんとうは、クロツケーの道具などといっしょに、さきへ運んでありましたので、一行は二隻のボートにのりこんで岸をはなれました。ローレンス氏は、岸に立って帽子をふっていました。ローリイとジョウが一隻のボートをこぎ、ブルツク先生と大学生のネットが、もう一隻のほうをこぎました。ジョウのおかしな帽子は、みんなを笑わせて気分をやわらげ、ボートをこぐと、つばがばたばたしてすすしい風が起りましたし、ジョウにい

わせれば、もし夕立でもふれば、みんなをいれてあげることができそうでした。

メグは、もう一隻のボートにのっていました。ブルック先生とネッドにとって、よろこばしい存在で、この二人の青年は、メグがいるので、いつもよりいっそうじょうずにボートをこぎました。

ロングメドウについたとき、もうテントがはられ、クロツケをするための、鉄輪がとりつけてありました。そこは、気持のよい緑の野原で、まんなかに、三本の檜の樹が、広く枝をはり、クロツケをする芝生は、きれいに刈りこまれています。

「キャンプ・ローレンスばんざい！」

みんなが、よろこびの声とともに上陸すると、ローリーがいいました。

「ブルック先生が司令官で、ぼくが兵站総監、ほかのみんなは参謀です。それから、女のかたはお客さま、テントはみなさんのために、とくに張ったもので、檜の樹のところは客間、ここが食堂、そちらが台所です。あまり暑くならないうちに、ゲームをやつて、それから、ごちそうの支度をしましょう。」

フランク、ベス、エミイ、それからグレースは芝生に腰をおろし、ほかの八人がクロツケーをはじめました。ブルック先生はメグとケイトとフレッドと組み、ローリーは、サリー、ジョウ、ネッドと組みました。みんな張りきつて、ものすごく戦い、しばらく

くは、どちらが勝つか敗けるわかりませんでした。そのうちに、フレッドが、だれも近くにいなかったので、じぶんの打ちいいように、ボールを靴のさきでころがしました。そして、

「ぼくはいったよ。さあ、ジヨウ、あなたを敗かして、ぼくがーぼんだ。」と、いいました。

ジヨウは、ずるいフレッドにむかって、やり返しました。そして、しばらく戦いましたが、とうとう勝つことができました。

ローリイは、帽子をほおりあげましたが、お客の敗けたのをよろこんではいけないと気がつき、小声になってジヨウにいいました。

「きみ、えらかったぞ。あいつインチキやった。ぼく見てた。み

んなの前でいつてやることできないが、二度とやらないだろう。」
メグも、髪をなおすふりをしてジヨウをひきよせ、さも感心したというような顔で、

「ほんとに、しやくだったわ。でも、よくこらえたわ。あたし、うれしかった。」

「ほめないですよ。メグ。今だつてあいつの横つ面はりとはしたいくらいよ。もうすこしであるとき、かんしやく玉がはれつしそうだったわ。」と、ジヨウは、フレッドをにらみつけました。

時計を出して、ブルツク先生がいきました。

「さあ、おべんとうにしましょう。兵站総監、きみは火を起させたり、水をくませたりして下さい。マーチさんとサリーさんとぼ

くどで食卓の支度をするから、たれかコーヒーをじょうずにいれる人はいませんか？」

「ジョウがじょうずです。」と、メグはよろこんで妹をすいせんしました。

ジョウは、このごろ、料理のけいこをしたので、こんな名誉な役をひきうけられるのだと思いながら、支度にかかりました。そのあいだに、少年たちは火を起し、近くの泉から水をくんで来ました。司令官とその部下は、すぐにテーブルかけをひろげ、食べ物や飲みものをならべ、みどりの葉でかざりました。コーヒーの用意ができると、みんな席につきました。食慾はさかんでしたし、まことにたのしく、しばしば起る大きな笑い声は、近くで草

を食べているおとなしい馬をおどろかせました。

食事がすむと、すずしくなるまで、なにか遊びをしようということになり、櫛の樹のかげ、すなわち客間へ席をうつしました。

ケイトが、尻とり話をしようといいました。

「いいですか、たれかが、勝手なお話をはじめのよ。そして、好きなだけつづけて、おもしろそうなところで、ぷつときつてしまうのよ。すると、つぎの人がそれをつづけ、じゆんに話していくと悲しいのやおかしいのや、ごっちゃになっておもしろいわさ、では、どうぞあなたから。」と、ケイトが命令するような調子でいったので、ブルツク先生がはじめました。

「むかし、ある一人の騎士が立身出世しようと思つて旅に出まし

た……」

ブルック先生は、ゆたかな想像で話しました。この騎士は二十年も旅をつづけ、ある王宮へいきますと、王さまはまだならしていない馬を、うまくしこんだ者に、ほうびを与えると申されました。そこで、騎士はその馬をしこむために、まい日、のりまわしをしていると、お城に美しいおひめさまが、魔法のためにとじこめられ、自由になるお金をつくるために、糸をつむいでいることを知りました。騎士は、貧乏なので、お金はなし、しかたがないので、お城の扉をたたくと……と後の待たれるように話をきりました。

それをつづけたのは、ケイト、ネッド、メグ、ジョウ、フレツ

ド、サリー、エミイ、ローリー、フランクというじゅんでしたが、話のすじは、じつに変化していき、おほりに落ちたり、墓場のようなろうかを歩いていたり、そこで見つけたかぎ煙草をかいだら首がおちたり、そうかと思うと、たちまち生きかえったり、箱の中でダンスしたら、それが軍艦にかわったり、聞いている者も、ときには笑い出し、ときには眉をしかめ、はてしもなく変化していく話をおもしろく思いました。

話がすむと、サリーがいました。

「ずいぶん、へんな話でしたね。だけど、練習すれば、もつといのができそうね。それじゃ、今後はツルースっていうあそびごぞんじ?」

「どんなの？」

「そうね、みんなで手をかさねておいて、かずをきめて、じゅんじゅんに手をのけていって、そのかずにあたった人が、ほかの人の質問になんでも正直に答えるの。それやおもしろいわ。」

「やってみましょう。」と、新しいことの好きなジヨウがいいましました。そして、みんなで手をかさね、じゅんじゅんにのいていくと、ローリイがあたりました。

「だれ、あなたの尊敬する英雄は？」と、ジヨウが尋ねました。

「おじいさんと、ナポレオン。」

「一ばん美しいと思う女の人は？」と、フレッド。

「もちろん、ジヨウ。」

ローリーの、あたり前さというような顔つきに、みんなどつと笑ったので、ジョウは、

「ずいぶん、ばかげた質問ね。」と、けいべつするように肩をすぼめました。

「さ、もう一度やろう。おもしろいね。」と、フレッドが言いました。今度はジョウのぼんでした。

「あなたの一ばん大きい欠点は？」と、フレッドが尋ねました。

「かんしゃく。」

「一ばんほしいものは？」と、ローリーがいましたが、ほしいものをいえば、ローリーがくれそうなので、わざと、

「靴のひも」と、答えました。

「そんなのダメ、ほんとのこといわなくちや。」と、ローリイ。

「天才、あなたは、あたしに天才をくれたと思いますか？」と、
ジョウはいつて笑いました。

「男の美点のなかで、なにが一ぼんだいじ？」

「勇気と正直」

すると、フレッドが、

「今度はぼくのぼんだ。」と、いいました。

ローリイが、あれをいつておやりと、ささやいたので、ジョウ
はすぐにきり出しました。

「クロツケーでインチキやらなかった？」

「うん、ちよつと。」

「よろしい、きみのさっきの尻とり話、海のライオンという本からとらなかつた？」と、ローリイ。

「いくらかね。」

「イギリス国民は、あらゆる点で完全だと思いますか？」と、サリイ。

「そう思わなかつたら、イギリス人の自分は、はずかしいですよ。」

「それでこそほんとのイギリス人だ。さあ、今度はサリーのぼんだ。」

「あなたは、じぶんをおてんば娘だと思いませんか？」と、ローリイ。

「ひどいわ。そんな女じゃないわ。」

「なにが一ばんきらい？」と、フレッド。

「くもと、ライス・プディング。」

「一ばん好きなのは？」と、ジョウ。

「ダンスとフランスの手ぶくろ。」

そのとき、ジョウが、頭をふって、

「つまらない遊びね。それより作家トランプを、おもしろくやらない？」

ネットとフランクと小さい女の子がくわわって遊んでいるあいだ、年上の三人はそこからはなれて腰をおろして話しました。ケイトは、ふたたび写生帳をとり出してかき、メグはそれをながめ

ブルック先生は草の上にねころんでいました。メグは、ケイトのかくのを見て、おどろきの声で、

「なんておじょうずなんでしょう！　あたしもあんなにかいてみたいわ。」と、いいました。

「どうして、おけいこなさらないの？　あなたは絵の天分がおありですわ。」

それから、家庭教師のことになり、ケイトは家庭教師について習ったから、あなたも家庭教師に習うといいとしました。メグは家庭教師につくどころか、じぶんは家庭教師として教えにいつているといいますと、ケイトは、

「まあ、そうなんですの。」と、いいましたが、そのいいかたは、

おやおや、いやなことだと、いうような調子でした。ブルツク先生は、とりなすように、

「アメリカのおじょうさんがたは、先祖がそうであつたように、独立し自活することがたつとばれるのです。」と、いいました。

ケイトは、眉をひそめて、去つていきましたが、それを見送りながらメグはいいました。

「あたし、イギリス人が、女の家庭教師をけいべつすることを忘れていました。」

ブルツク先生は、むしろ満足そうに、

「あちらでは、男の家庭教師だつてよくいいません。なさけないことですがね、なんといつても、われわれはたらく者には、アメ

リカほどいいところはありません。」と、いったので、メグはじぶんのことを嘆いたのを、むしろはずかしくなりました。

「ええ、あたしアメリカに生れたのをうれしく思いますわ。そのために、たくさんよろこびを得ているのですから。ただ、あたし、あなたのように教えることが好きになれたら、どんなにいいでしょう。」

「ローリーがあなたの生徒だったら、あなたも教えるのがたのしくなります。来年ローリーと別れなければならぬので、ざんねんですよ。」

「大学へいらつしやるのでしよう?」

「そうです。準備はだいたいできています。ローリーがいけば、

ぼくは軍隊にはいりません。」

「まあ、すてき！ わかい男のかたは、兵隊にいきたがるのはほんとですね。お家にくるおかあさんや、姉妹たちはつらいでしょうが。」

「ぼくは一人ぼっちです。友だちもすくないし、ぼくが死のうが生きようが、たれも心配する者はいません。」

「ローリイやおじいさんが心配なさいますわ。それに、あたしたちだって、あなたがおけがでもなされれば、悲しみますわ。」

「ありがとう。そう聞いてうれしく思いますよ。」と、ブルツク先生は、また快活になって話しつづけましたが、ネツドが馬のつて来たので、しずかに話し合うことはできませんでした。

たった一つ、メグやジヨウのおどろいたことがありました。それは、ベスが、人をよろこばせたいという一心から、足のわるいフランクに話を聞かせてやっている光景でした。それは、また、フランクのいもうとにとっても、びっくりするようなことで、いもうとのグレースは、

「フランクにいさんが、あんなに笑っているの知らないわ。」と、いいました。

日ぐれ近くまで、また、いろいろのあそびをしました。帰り支度は、みんなでやり、テントをたたみ、クロツケーの鉄輪をぬき、一行はボートにのりこみ、声はりあげてうたいながら、川を下つていきました。ネットドは、センチメンタルになって、

ひとり、ひとり、ああ、ただ、ひとり。

われら、いまだ年わか

みなあたたかき心もつに

なぜにつめたくはなれいく。

と、いうところで、わざとあわれっぽい表情をして、メグをながめましたので、メグは笑い出してしまい、その歌をめちやめちやにしてしまいました。

「あなたは、どうしてぼくにたらくあたるんです？ 今日一日、あなたはあのかたくるしいイギリス人にばかりくつついていて、今度はぼくを鼻であしらうんですね。」

「そんなつもりじゃなくってよ。あんまりおかしな顔をなさるの

で、つい。」

ネツドは怒つて、サリーの同意を得ようとして、

「あの人、すこしも情味のない人ね。」

「ちつとも。だけど、かわいい人。」

サリイは、友だちの短所をみとめながらもかばいました。

「とにかく、あの方は手おい鹿ではないね。」

ネツドは、しやれたつもりでしたが、たいしたしやれとはいへませんでした。

朝、集合したローレンス家の芝生で、みんなは、たがいに、あ
いさつして別れをおしみました。というのは、ボガン家の人たち
は、カナダへ帰っていくからでした。四人の姉妹は、庭を通つて

家へ帰りましたが、そのうしろすがたをながめていたケイトは、今度はかばうような調子などをまじえずにいいました。

「アメリカの娘さんたちは、ずいぶん露骨なところはあるけれど、よく知ってみると、とてもいい人たちねえ。」

すると、ブルック先生がいいました。

「ぼくも同感ですね。」

第十三 美しい空中楼閣

九月のあるあたたかい日の午後、ローリイは、マーチ家の連中が、なにをしているだろうと考えながらも、わざわざ見に出かけ

ていくのもおつくうなので、ただハンモックにゆられていました。かれは、ふきげんでした。その日は、することがうまくいかず、あたたかいので身体はだるく、勉強をすつぽかしてブルック先生をいやがらせ、お昼からピアノをひきつづけて、おじいさんの氣持をそこね、家の犬が一匹、氣がくるったといつて女中をおどかし、馬にひどくしたといつて馬丁とけんかし、世のなかはおもしろくないやと、ぷんぷん怒つて、ハンモックにとびこんだのです。けれど、美しくのどかなので、かれの氣持はやすまり、世界一周の航海をしているような空想にふけつていると、人声がして空想はやぶれました。見るとマーチ家の姉妹たちが出かけていくところでした。けれど、いつもとようすがちがって、めいめい大き

なつばの帽子をかぶり、肩に茶色のふくろをかけて長いつえをつき、メグはクツション、ジョウは本、ベスはひしやく、エミイは紙ばさみを、それぞれ持っていました。一行は、しずかに庭をぬけ、うら木戸を出て、家と川のあいだにある丘をのぼりはじめました。

「ひどいなあ。ぼくを誘わないでピクニックにいくなんて。かぎをもっていないから、ボートにのれまい。よし、持って行ってやろう。そして、なにをするのか見て来よう。」

ローリイは、どの帽子をかぶろうかとまよい、かぎをさんざんさがし、かぎがポケットにはいつているのに気がつくど、さつそく後を追いましたが、少女たちのすがたはなく、ボート小屋へい

きました。だれも来ないので、上へのぼっていきました。すると、松の木立のかけから、風の音よりも、こおろぎの歌よりも、もつとほがらかな声が聞えて来ました。

「すてきだ！」と、ローリイは、目がさめたような思いでした。

姉妹たちは、木かげにすわり、太陽の光と木の影が、その上にゆれていました。メグはぬいものをしていましたが、ピンクのドレスがばらのようにあざやかでした。ベスは、松ぼつくりをよりわけていました。エミイは、一むらのしだを写生していました。そして、ジョウは、大きな声で本を読みながら、あみものをしていました。この光景が、ローリイの心をとらえました。ローリイは、そばへいきたいが、誘われたのでもなし、家へ帰るべきだが、

家はたまらなくさびしく、それで立ち去りかねていると、リスがかれのすがたにおどろいて、するどい声を出しました。その声に、ベスが顔をあげると、ローリーのさびしそうな顔があつたので、安心させるように、につこり笑って手まねきしました。

「ぼく、いつでも、いいですか？」

メグは、眉をつりあげて、いけないといよすをしましたが、ジヨウはメグに顔をしかめて、

「だいじょうぶよ、いらっしやい。お誘いしようと思ったけど、こんな女の遊びなんか、つまらないと思つたのよ。」

「あなたたちの遊びなら好きです。でもメグがいやなら、ぼく帰ります。」

「いやじやありませんわ。そのかわり、ここでは怠けてはいけないという規則だから、あなたもなにかしなければいけませんよ。」

「どうもありがとう。なんでもします。だって家は、さばくみたいに退屈です。」

ローリイは、うれしそうでした。

「それでは、あたしが、かかとをあんでいるあいだに、この本を読んでしまつてね。」

ジョウが本をわたすと、ローリイは、はいと、うやうやしく答えて「はたらきばち会」に入会させてくれた好意に感謝して、熱心に読みはじめました。その物語はあまり長くはなく、ローリイは読みおわると、労にむくいてもらうために、二三の質問を出し

ました。

「ちよつとうかがいますが、この有益な会は、新らしくできたんですか？」

姉妹たちは顔を見合せました。秘密にしておくべきか、それともうち明けるべきか？ ローリイにならいつてもいいと、みんなは考えました。ジョウは、にっこり笑っていました。

「あたしたち、巡礼あそびを、冬から夏までつづけて来たの。そして、この休暇には、怠けないようにと思つて、めいめい仕事をこしらえて精いっぱいやりました。休暇はもうじきおわりませんが、仕事はみんなできて、よろこんでいますの。ところで、おかあさんは、あたしたちを、外へ出したがつていらつしやるので、この

丘へ仕事を持って来て、おもしろくやっているの。」

ローリイは、うなずいていました。

「ああ、それで、ふくろをしよい、杖をつき、古い帽子をかぶるんですね。」

「あたしたちは、この丘のことを、よろこびの山といっていますの。ずっと、むこうまで見わたせるし、あたしたちが、いつかは住んでみたいと思う国も見えるからです。」

ジョウが、ゆびさしたので、ローリイは立ちあがってながめました。あおい川、ひろびろとした草地、そのむこうのみどりの山々、その峰にたなびく金と紫の雲、まことに、天の都を思わせるものがありました。

「なんてうつくしいんだらう！」と、ローリイは、美しさをす早く見つけました。

「あのうつくしい景色のところ、あたしたちのほんとの国で、みんなでそこへいけたら、うれしいと思うわ。」と、ベスがいますと、メグは、やさしい声で、

「あれよか、もつとうつくしい国があるのよ。あたしたちが、りっぱな人になったら、そこへいけるのよ。」と、いいました。

「ベスなんか、いつかいけるでしょうが、あたしなんか、戦ったりはたらいたり、のぼったりすべったりで、いかれそうにもないわ。」

ジョウがいうと、ローリイも、

「ぼく、ベスの道づれになりますよ。でも、ぼくがその旅におく
れたら、やさしい言葉をかけてくれるでしょうね？」

ベスは、なんと返事してよいかこまったようでしたが、快活に
いいました。

「だれだって、ほんとはいきたい気持で、一生、努力の旅をつづ
けたら天の都へいけると思うわ。」

しばらく沈黙がつづいた後、ジョウがいました。

「あたしたちの勝手に考える空中楼阁がみんなほんとのものにな
って、そこに住むことができたら、どんなにおもしろいでしょう
。」

「ぼくは見たいだけ世界を見物してから、ドイツにおちついて、

好きなだけ音楽を勉強して、有名な音楽家になるんです。けれど、ぼくはお金だとか、商売とかすこしも気にかげずに、じぶんの好きなように暮すんです。これがぼくの氣にいつている空中樓閣です。」

ローリーがそういうと、メグがつぎをつづけました。

「あたしは、いろいろぜいたくなものが、たくさんあるうつくしい家がいいわ。おいしい食べもの、きれいな服、りっぱな道具、感じのいい人たち、そして、お金は山ほどあるの。あたしその家のおくさんで、召使をたくさん使つて。でも怠けたりしないで、いいことをして、みんなからかわいがられたい。」

ジヨウは、ずばりと、

「おねえさんは、なぜりこうでやさしい夫と、天使のような子供がいてと、おっしやらないの。それがなかったら、おねえさんの空中楼阁はできないわ。」と、いいました。

「あなたの空中楼阁には、馬とインクつぼと小説しかはいってないんでしょう？」と、メグはすこしむつとしていいかえしました。

「いいじゃないの。アラビア馬のいっぱいはいった馬屋と、本をつみあげた部屋と、魔法のインクつぼがあれば、あたしは、そのインクつぼで、ローリーの音楽とおなじくらい、有名な作品を書くくんだわ。だけど、あたしその空中楼阁へはいる前に、なにかすばらしい英雄的なこと、そうね、あたしが死んでも人から忘れら

れないようなこと、やってみたいわねえ。そうだ、あたし本を書いてお金持になり有名になれたらいいわ。それがあたしに似合っているの。それ、あたしの大好きな空想よ。」

「あたしのは、無事におとうさんやおかあさんといっしょに家で暮して、家の人たちの世話をしてあげることですわ。」と、ベスがいうと、ローリイが尋ねました。

「ほかには、なにか望みはないの？」

「あのかわいいピアノをいただいたから、ほかになんにも望みはありません。」

すると、エミイがいました。

「あたしは、絵をかきにローマへいき、りっぱなものをかいて、

世界中で一ばんえらい画家になることすわ。」

「ぼくたち、なかなかの野心家ですね。ベスのほかは、金持になり、有名になり、あらゆる点でえらくなるうというのですから。」と、ローリイがいうと、ジヨウが、

「今から十年たつて、みんな生きていたらあつまつて、だれが望みをとげたか、だれが望みに近づいたか見ましようよ。」と、いきました。

「そしたら、あたしいくつ？ 二十七ね。」と、メグ。すると、すぐにジヨウが、

「ローリイとあたしが二十六、ベスが二十四、エミイが二十二、なんとみなさん、相当の御先輩というわけね。」

「ぼくは、それまでになにか、じまんになるようなこととしたいな、
だけど、ぼくはこんな怠け者だから、だめだろう。ねえ、ジヨウ
。」

「おかあさんが、あなたにはなにかいい動機があれば、きつとす
ばらしいことなさるって、いつてらしたわ。」

「そうですね。ぼくやります。ぼくは、おじいさんの、氣にいる
ようにしたいんだが、できないんですよ。おじいさんは、後つき
にして、インド貿易商にしたがっているんです。だけど、ぼくい
やだ。大学へ四年いくだけで、満足して下さればいいのに、ああ、
おじいさんを世話して下さるかたがあれば、ぼくは明日にも家を
とび出すんだがなあ。」

ローリイは、ひどく気がたかぶっていました。かれには青年の熱情があり、じぶんのちからで世の荒浪をのりきつていこうとして、いるのでした。ジヨウは同情して、

「あなたの船で海へのり出し、したいほうだいなこととして、あきるまで帰らなければいいわ。」と、じぶんの好きな空想であおりました。びつくりしたメグはいいました。

「いけないわ。ジヨウ、あんなこといって、ローリイもそんな忠告聞いてはだめ。あなた大学で一心に勉強すれば、おじいさんもいつまでもがんこなこといわないで、きつとあなたの望みをかなえて下さいます。だから、さびしがったり、いらいらしないで、じぶんの務めをはたすようになさいね。そうすれば、ブルツク先

生のように、みんなからたつとばれ愛されるようになります。」

それから、メグは、ブルツク先生が、おかあさんのなくなるまで孝養をつくしたこと、おかあさんからはなれたくないので、家庭教師として外国へいけるのをことわったこと、そして、今でもなくなつたおかあさんの看病をしてくれたおばあさんに、まい月、仕送りをしていること、それをだれにもいわずにいたことなど、ローリイのおじいさんが、メグのおかあさんに話したことを話し、どうかそのりっぱなブルツク先生を満足させるように、よく勉強しなければいけないと、まるで、ねえさんみたいに、ローリイにいつて聞かせました。そして、こうつけ加えました。

「ごめんなさい。お説教したりして。けれど、まるでほんとの兄

弟みたいな気がするものですから、思ったとおりのことというのよ。
」

ローリイは、親切なメグの言葉をありがたく思い、

「ねえさんのように、ぼくの欠点をいって下さってありがとうございます。
今日はぼくふきげんだったけど、これでさっぱりした。」

ローリイは、できるだけ愉快にしようとして、メグの糸をまいてやったり、ジョウをよろこばそうとして、詩をうたったり、ベスに松ぼっくりを落してやったり、エミイの写生を手つだつてやったりはたらきばち会の会員にふさわしいように努めました。そのうちに、ハンナの知らせるベルが聞えました。みんなが家へ帰る時間です。ローリイは、

「ぼく、また来てもいい？」

メグは、にこにこして、

「ええ、おとなしくして、本が好きになれたらね。」

「好きになります。」

「じゃ、いらっしやい、あみもの教えてあげるわ。スコットランド人は、男でもあみものするのよ。それに、今とても靴下の注文があるんですって。」

その晩、ベスはローレンス老人のためにピアノをひきましたが、ローリイはそれをカーテンのかけにたたずんで聞きました。ベスのあどけない音楽は、ローリイの気持をはずめてくれ、おじいさんのことが、しみじみとなつかしく思われるのでした。そして、

その日の午後のメグの話の思い出しながら、よろこんで犠牲をはらうつもりで、

「ぼくは、空中楼阁なんてすてて、おじいさんが望むだけ、いつまでも、いつしよにいてあげよう。おじいさんは、ぼくだけしか、頼る人がないんだもの。」と、ひとり言をいいました。

第十四 秘密

十月にはいると、寒さもきびしくなり、日ざしもみじかくなつたので、ジョウは屋根部屋でいそがしい日を送りました。最後のページをおわって、じぶんの名を花文字で書くと、ペンをなげ出

していいました。

「さあ、できあがった、これでだめなら、もつとよく書けるまで待たなくてはならない。」

ソファにころりとあおむきになり、ジヨウは念入りに原稿を読みなおし、ところどころに、線をひいたり、感嘆符をつけたりしました。それから、あかいリボンでとじました。この屋根部屋のジヨウの机は、かべにとりつけてある古いブリキの台所用のたなでした。ジヨウは、そのなかへ原稿用紙や二三冊の本をしまいこんで、ねずみの、がりがりさんに、荒らされないようにしました。がりがりさんは、やっぱり文学好きで、原稿用紙や本をよくかじるからです。ジヨウは、ブリキのいれものからもう一つの原稿を

とり出し、今書き終わった原稿といつしよに、ポケットにねじこんで階段をおりました。それから、こつそり家を出て、通りがかりの乗合馬車をよびとめてのり、いかにもたのしそうな、秘密ありそうな顔つきで、町のほうへいきました。

町へ来たジョウは、大いそぎで、あるにぎやかな通りの、ある番地まで突進しました。やつとある家をさがし出しましたが、そのきたない階段を見あげると、じつと立ちどまっていましたが、きゆうに、また大いそぎで帰っていきました。こんなことを二三回くりかえしたあげく、まるで歯をすっかりぬいてもらうような悲壮な顔つきで階段をのぼっていきました。その建物には歯科医もあつたのです。

それを見ていたのは、むかいがわの建物の、窓のところをぶらぶらしていたわかい紳士でした。

「一人で来るなんて、あの人らしいな。けれど、気分でもわるくなったら、家までつきそってあげなくちや。」

十分とたたないうちに、ジヨウはまっかな顔をして、なにかおどろくほど苦しい目にあつたように階段をかけおりて来ました。わかい紳士は、ほかならぬローリイでしたが、ジヨウがちよいと頭をさげていきすぎたので、すぐに後をおつて尋ねました。

「とても痛かった？」

「そんなでもなかつたわ。」

「早くすんだねえ。ずいぶん。」

「ええ、うまくいったわ！」

「どうして一人でいったの？」

「たれにも知らせたくなかったからよ。」

「ずいぶん、かわっているんだね。きみは、それで、なん本ぬいたの？」

ジョウは、ローリーのいう意味がわからないのでかれの顔をながめました。が、はっと気がついて、おもしろくてたまらないというように笑いました。

「二本ぬいてもらいたいんだけど、一週間も待たなきゃならないのよ。」

「なにを笑ってるの？ また、なにかいたずらしてきたんだね、

「ジヨウ。」

「あんなこそ、玉突屋でなにされてらしたの？」

「はばかりながら、玉突屋ではありません。体育館です。ぼくは剣術を習っています。」

「まあ、うれしい！」

「なぜ？」

「あたし教えてもらえるもの。そうすれば、今度ハムレットをやるとき、あんなレアティスやれるから、二人であのすばらしい剣術の場がやれる。」

ローリーがふき出したので、通行人が、二三人ふりかえりました。

「教えてあげるよ、ハムレットはどうでもいいが、おもしろいよ。やれば身体がしやんとなる。でもそれだけで、あなたが、まあうれいって、あんなに強くいったとは思えないが。」

「そうよ、あんたが玉突屋にいなかったのがうれしかったの。あんた、いくの？」

「そんなに、いきませんよ。」

「いかないほうがいいわ。」

「なにもわるいことはありませんよ。家の玉突では、じょうずな相手がなくてつまらない。だから、ときどきいって、ネット・マフオットや、そのほかの連中とやるんです。」

「いやだわ、だんだん好きになって、時間をお金をむだにして、

いけない子になるんでしよう。品行方正でいてほしいわ。」

「男は、品をおとさなければ、ときどきおもしろい遊びをしてはいけないかしら？」

「それは遊ぶ方法と場処によるわ。ネットの連中、あたしきらい、交際しないほうがいいわ。あたしの家にも来たがっているけど、おかあさんよせつけないようになさるの。あなたが、あの人みたいなら、今までどおりあなたと遊ばせないでしよう。おかあさんは。」

ローリイがいました。

「では、ぼく申しぶんのない聖人になります。」

「聖人なんてまっぴら、すなおな品のある人になってほしいわ。」

キングの家の息子さんみたいに、お金たくさん持って、よつぱらったり、ばくちをしたり、しまいには、家出しておとうさんの名をかたって、なにか偽造までして、こわいわ。」

「ぼくも、そんなことしかねないと思っっているんですね？ どうもありがとうございます。」

「とんでもない。ただあたし、お金はおそろしい誘惑をするって聞いているから、あなたが貧乏だったら、心配しないでもいいと思うことがあるわ。だって、あなた、ときどきふきげんだったり、強情だったりするから、いったんまちがったほうへむいたら、ひきとめるのがむずかしいと思うわ。」

「そう、そんなに心配していてくれるの。」

ローリイは、しばらくだまりこんで歩いていました。ジヨウは、すこしいすぎたかしらんと思いましたが、やがて、ローリイは、「あなたは家へ帰るまで説教するつもり？」

「いいえ、どうして？」

「説教するつもりなら、ぼくバスにのるし、しないなら、いつしよに歩いて、とてもおもしろいこと聞かせてあげる。」

「しない。だから、そのニュース聞かせて。」

「よろしい、これは秘密ですよ。ぼくがいったら、あなたのもいわなければだめですよ。」

「あたし秘密なんかないわよ。」と、ジヨウはいいましたが、じぶんにも秘密があることを思つて、きゆうに口をつぐみました。

「あるでしょう。かくしたってだめ、さっさと白状なさい。いわなければ、ぼくもいわない。」

「あなたの秘密おもしろいの？」

「おもしろいとも！ あなたのよく知っている人のこと。あなたが知っていないなければならぬ秘密だから、教えてあげたくてうずうずしているんです。さあ、あなたからですよ。」

ジョウは、家の人にもいわないこと、からかわないことを念おして、

「じやいうわ。あたしね、小説を二つ、新聞社の人のところへおいて来たの。そして、来週返事があるの。」と、相手の耳にささやきました。ローリイは、

「アメリカにその名も高きマーチ女史ばんぎい！」と、さげんで帽子を高く上げ、それをうけとめました。もう郊外を歩いていたので、それは二羽のがちようと、四ひきのねこと、五羽のにわとりと、六人のアイルランド人の子供をよろこばせました。

「返事なんか来ないわ。このこと、たれにも失望させたくなかつたから、いわなかつたの。」

「なあに、だいじょうぶ、あなたの書くもの、シエークスピアの書いたものくらい、ねうちがありますよ。活字になつたらすてきだな！」

ジョウは、そういわれると、うれしく思いました。友だちの賞讃はいいものです。

「それで、あなたの秘密ってなあに？　公明正大にいいなさい。」

「いってしまふと、こまることになるかもしれないんですが、いわないと気がらくになれないし、あのね。メグの片っぽうの手ぶくろのありかを知っているんです。」

「それつきり？」

「今のところ、それでじゅうぶんだよ、どこにあるかということをお教えたら。」

ローリイは、ジヨウの耳に三つの言葉をささやきました。その言葉でジヨウは、おどろきと不愉快な表情をしてつつ立ち、ローリイの顔を見つけてから歩き出しました。

「どうして知ってるの？」

「見たんだよ、ポケットに。」

「ずっと今でも？」

「ええ、ロマンティックじゃない？」

「いいえ、こわいわ。きらいだわ。ばかばかしい。たまらないわ。メグねえさん、なんていうかしら？」

「たれにもいわないでよ、きみを信用したからいったのさ。」

「それじゃ、当分はいわないわ。でも、いやね。聞かしてくれなければよかった。」

「ぼくは、きみがよろこぶかと思った。」

「たれかがメグをつれ出しに来るっていうことを、あたしがよろこべますか。ああ、あたしには秘密つてもものは性に合わない。あ

あなたがそんなこと聞かすものだから、気持がくしゃくしゃしちや
った。」

ジョウが不満らしくいうと、ローリイは、

「この坂を競走しておりよう。そうすれば、気持がさっぱりする
よ。」

あたりには人かげもなく、平らな道がまねくように坂なつてい
ました。ジョウは走り出し、帽子もくしもふり落し、髪をふりみ
だし、目をかがやかしました。もう不満な色はありませんでした。
「あたし馬だったら、こんなに気持のいい空気のなかを、いくら
かけても息がきれないでしょう。ああおもしろかった。でも、こ
のおかしなかつこう。あたしの落したもののひろって来てよ。」と、

ジヨウは紅葉のちつているかえでの木の下にすわりました。そして、髪をなおしました。そのあいだにローリイは、ジヨウの落しものをひろいにいきましたが、そこへ訪問がえりのメグが、りっぱな服を着て、貴婦人みたいに大人びて、通りかかりました。

「あなた、走ったのね、いつになったら、そんなおてんばやまるの？」

「年をとって、身体がこわばって、松葉杖をつくるようになるまでやめないわ。あたしを大人あつかいにするのいやよ。おねえさんが、きゆうに変ったのを見るのつらいわ。せめてあたしだけいつまでも子供にしておいて。」

ジヨウには、メグが大人びていくように思えるのに、ローリイ

のいった秘密から、やがて別れというおそろしいときが、近く来
そうな気がしました。

「そんなに、おめかしてどこへ？」

「ガーデナアのところへ、サリーは、ベル・マフオットの結婚の
ことをすっかり話してくれました。とてもりっぱでしたって、お
二人はこの冬をパリで送るために、もうおたちになったのよ。ど
んなにうれしいでしょうね。」

そこへ、ローリイも帰って来て、ジヨウといっしよに、メグの
結婚のことを話しているうちに、とうとうメグは、

「あたし、たれとも結婚しないわ。」と、つんと氣どつて歩きは
じめました。二人はその後から、子供みたいに、笑ったり、つつ

き合ったりしてついていきました。

さて、それから一二週間というもの、ジヨウはいかにも奇妙なふるまいが多かったので、みんなおどろいてしまいました。郵便屋の足音がすると玄関へかけていたり、ブルツク先生につっけんどうにしたり、じつとすわりこんで悲しそうな顔をしてメグをながめたり、きゆうに、メグにとびついてキツスしたり、ローリイが来ると、二人で目くばせして、新聞のことを話したり、いたい、どうしたというんでしよう？

ある日、ジヨウは家のなかへとびこんで来て、ソファに横になり、新聞を読むふりをしていました。ベスが尋ねました。

「なに読んでいらっしやるの？」

「はりあう画家という小説。」

「おもしろそうね、読んでちょうだい。」

メグがいうと、ジョウはせきばらいをして、読みはじめましたが、ロマンチックな作で、出て来る人物は最後にみんな死んでしまふという、かなり悲壮なものでした。

「いいわ、恋をするとこ好き、だあれ、作者は？」と、エミイが尋ねると、

「あなたがたの姉妹よ。」

「あなた？」と、メグがさげびました。

「とてもおじょうずね。」と、エミイ。

「ああ、あたし肩身がひろい。」と、ベス。

この成功に、みんなはおどりに出したいほどよろこびました。ハ
ンナもとびこんで来て、おどろきの声をあげ、おかあさんもどん
なにほこらしく思ったでしょう。よろこびが、家中をあらしのよ
うにひっかきまわしました。ジョウは目にいっぱい涙をため、ミ
ス・ジョセフィン・マーチと印刷された名前の新聞が、みんなの
手から手へわたるのをながめていました。

「すっかり、話して聞かせてよ。」「いつ新聞は来たの?」「い
くらいただけるの?」「おとうさんはなんておっしゃるかしら?」
「ローリイは笑わなかった?」と、ジョウのまわりに集った家中
の者が、つぎつぎにさげびました。

「では、なにもかもいっちなまうわ。」と、ジョウは、じぶんの作

品を売りにいったときの話を話し、返事を聞きにいったら、二つともおもしろいが、はじめての人には原稿料を出さないで、ただ新聞にのせるだけ、そのかわり、いいものを書けるようになったら、原稿を買いに来るということだったと話しました。

「それで、あたし二つともわたして来たの。そしたら、今日これを送って来たの。ローリイが見せろつてきかないから見せてあげたの。ローリイは、よくできているからもつと書けというの。そしてこのつぎから原稿料を出させるようにしてやるつて。あたし、うれしいわ。じぶんで書いたもので食べていけて、みんなのくらしもらくにすることが、できるかもしれないんですもの。」

ジョウは、一気でしゃべって息がきれました。そして、新聞で

顔をおおって、涙でじぶんの小説をぬらしてしまいました。ペンで、一人立ちして、愛する人からほめられるようになることは、一ばんジヨウにとっては、うれしいことでありました。

第十五 雲のかげの光

「十一月って、いやな月ね。」と、メグがいったのがきっかけで、ジヨウもエミイも、霜がれの庭をながめながら、いろんな気のひきたたない話をしていると、べつの窓から外を見ていたベスが、「うれしいことが二つあるわ。おかあさんは町からお帰りだし、ローリーさんは、なにかおもしろいお話でもありそうに、お庭を

ぬけて来るわ。」

二人とも家へはいつて来ました。おかあさんに、おとうさんから手紙が来なかったか尋ねました。ローリイは、今日は数学をやりすぎたので頭がふらつくから、ブルツク先生を馬車で送つていくといい、

「どうです、みんないらつしやい。今日は陰気だけど馬車は気持ちいいですよ。」と、じょうずに誘いかけました。

メグは、そうたびたびわかい男といつしよにドライブしないほうがいいという、おかあさんの意見にしたがいたかったので、こわりましたが、ほかの三人は出かけることになりました。ローリイは「おばさん、なにか御用はありませんか？」と、いつもの

愛くるしい声で尋ねますと、マーチ夫人はいいました。

「ありがとう。できたら郵便局へよつて下さい。今日は手紙の来る日だのに、郵便屋さんが来ません。おとうさんは、お日さまがまい日であるように、まちがいなく手紙を下さるのに。」

そのとき、けたたましいベルが鳴つて、まもなくハンナが一枚の紙を持って来ました。ハンナは、「おくさま、おそろしい電報が来ました。」といつて、その電報が爆発でもするかのように、こわごわ出しました。

おかあさんは、それをひつたくるようにして読みましたが、まるで弾丸を胸にうちこまれたかのように、まつさおになつて、イスにたおれかかりました。ローリイは、水をとり、階下へかけお

り、メグとハンナはおかあさんをだき起し、ジヨウはふるえ声で読みあげました。

マーチ夫人へ——ゴシユジン ジュウタイ スグコラレタシ。
ワシントン ブランクビヨウイン エス・ヘール

部屋は水をうったようにしんとなりました。娘たちは、じぶんたちの生活のあらゆる幸福と力がうばい去られるような気がしました。おかあさんは、すぐにわれにかえつて、電報を読みなおし、悲痛な声でいいました。

「あたしはすぐに出かけます。けれど、もうまにあわないかもしれません。ああ、あなたたち、どうかおかあさんが、それに耐えられるように力を貸して下さい。」

しばらくは、とぎれとぎれのなぐさめの言葉や、助け合うという誓いの言葉や、神さまの加護を信ずる言葉にまじるすすり泣きの声のほかにも、部屋にはなんの音もしませんでした。けれど、あわれなハンナがわれにかえり、じぶんでは気づかないちえで、ほかの者にいい手本を示しました。すなわち、ハンナにとっては、はたらくということが、たいていの心配ごとをなおす良薬でありました。

「神さまが、だんなさまをお守り下さいます。わたしは泣いてばかりいられません。おくさまがおたちになる仕度をしなければなりません。」と、ハンナは真心からいって、涙をエプロンでぬぐい、そのかたい手でマーチ婦人の手をにぎって、人一倍はたらく

ために出てきました。

「ハンナのいうとおりです。泣いているときではありません。みんなおちついてちょうだい。そしておかあさんに考えさせておくれ。」

おかあさんが、あおぎめた顔をしながらも、気をとりなおして悲しみをおさえ、娘たちのためにいろいろ考えはじめたとき、娘たちも気をおちつけようと思いました。

「ローリイはどこ？」と、おかあさんは、まず第一になすべきことをきめたのです。

「ここにいます。おばさん、どうぞなにかさせて下さい。」と、ローリイは、いそいでとなりの部屋から出て来ました。かれはこ

の一家の人たちの悲しみのなかに、いかに親しくても、まじってはならぬと思つて、となりの部屋にしりぞいていたのです。

「あたしが、すぐ出発するという電報をうつて下さい。つぎの汽車は明日の朝早く出るはずです。それでいきます。」

「そのほかには？ 馬の用意はできています。どこへでもいきます。なんでもします。」

「それから、マーチおばさんのところへ手紙をとどけて下さい。ジヨウ、ペンと紙とを下さい。」

手紙が書かれ、ローリイはわたされました。

「では、すみませんがお願いします。めちやに馬を走らせてけがなんかしないで下さい。そんなにいそがなくてもいいんですから

ね。」

けれど、その言葉は守られず、ローリイは五分の後には、はげしいいきおいで馬を走らせていました。

「ジョウ、あなたは事務所へ行って、あたしがいけないってことわかって来て下さい。途中で買い物をして来て下さい。今書きますから。それからバスはローレンスさんのところで、古いぶどう酒を二本いただいで来て下さい。おとうさんのためなら、いただくのははずかしいと思つてはいられません。エミイ。ハンナに黒革のトランクをおろすようにいつて下さい。メグ、あなたはおかあさんの、さがしものを手つだつて下さい。あたしはだいぶうろたえていますからね。」

手紙を書いたり、考えたり、さしずしたり、すべてを一度にしなければならぬおかあさんに、メグはじぶんたちではたらくから休んでいてほしいといいました。けれど、おかあさんに休むことが、どうしてできませんでした。無事でたのしかった家は、今や不吉なあらしに吹きあらされ、みんなは木の葉のように、ふきとばされるほかはありませんでした。

ローレンス老人は、ベストともに来ました。親切な老人は、病人のためになりそうなものを、考えられるだけ考えて持って来ました。そして、夫人の留守中は、娘たちの世話はひき受けるといいましたので、おかあさんは安心することができました。また、老人は、なんでも必要なものは提供するといひ、いっしょにワシ

ントンへつきそつていくときえいい出しました。けれど、長い旅に老人にいつてもらうことは、とてもできませんので好意を感謝してことわりました。

老人が帰つていつてまもなく、メグが片手にゴム靴、片手に紅茶を持って玄関をかけていくと、ぼったりブルツク先生にあいまして。

「今、聞いたのですが、ほんとうにお気のどくです。僕はおかあさんのおつきそいをしていこうと思つて来たのです。ローレンスさんが、ぼくをワシントンまでいかせる用事ができたのです。ですから、道中おかあさんのお世話ができれば、ほんとうに満足です。」

メグは、あやうくゴム靴をおとしそうになるほど、感謝にあふれました。

「みなさん、なんて御親切なのでしよう。おかあさんはきつとよろこんでお受けいたすでしょう。あなたがお世話下されば安心してございますわ。お礼の申しようもありません。」

メグは、ブルツク先生を、客間へ案内しておかあさんをよびにいきました。

ローリーが、マーチおばさんからの手紙を持って帰ったときには、すべての支度がととのっていました。その手紙のなかには頼んだお金と、おばさんが前からたびたびいつていたことが書いてありました。すなわち、マーチが軍隊にはいることはいけな

いつもいつていたし、どうせろくなことにならないと、注意しておいたが、こんなことになった。今後はじぶんのいうことにしたが、つてほしいとありました。おかあさんは手紙を火にくべ、お金を財布にいれ、きゅつと口をむすんで、また支度をつづけました。みじかい午後が暮れました。外の用事はすべてすみ、メグとおかあさんは、必要なぬいもの、ベスとエミイは夕飯の支度、ハンはアイロンかけに、みんないそがしく手をうごかしていました。が、どうしたものか、ジョウがまだ帰りません。みんなそろそろ心配しはじめていると、ジョウがみような表情で帰って来ました。そして、すこし声をつまらせて、

「これおとうさんの御病気がよくなって、家へお帰りになれるよ

うにと思つたあたしの心持だけなの。」と、いつておかあさんにおさつのたばをわたしました。

「まあ、どこから手にいれたの？ 二十五ドル、ジョウ、あんたはほんでもないことしやしませんか？」

「いいえ、りっぱなあたしのお金です。じぶんのもの売つたお金です。」

ジョウが帽子をぬぐと、みんなは、あつ！と、おどろきの声をあげました。ふさふさした髪の毛はみじかく切られていました。

「このほうが、さっぱりして気持がいいわ。じぶんの髪をじまんして、虚栄心を起しそうだったが、これでもいいわ。どうぞお金とってちようだい。」

「ジョウ、おかあさんは、満足とは思いませんが、しかりはしません。あなたが愛のために、虚栄心を犠牲にしたことはよくわかります。でもね、そんなことまでする必要はなかったのです。いつか後悔するでしょうね。」

「いいえ、そんなことはありませんわ。」と、ジョウは、じぶんのことしたことを、一がいに非難されなかつたので、ほつとしていいました。

みんなは、ジョウの髪について、いろいろ考えました。なんといつても、重大事件でした。食卓をかこんだとき、髪の話でもちきりでした。いろいろ話があつたあげく、ジョウがいました。

「はじめは髪を売るなんて考えなかつたのよ、どうしたらいいか

と考えながら歩いているうちに、ひよいと床屋の窓を見ると、長いけれど、あたしほどこくない黒髪が、一たば四十ドルなの、とつきにあたしにもお金になるものがあると気がついてはいったいの。そして、いくらに髪を買って下さるか尋ねたのよ。店の人は、女の子が髪を売りに来たことなんか、あまりないらしく、びつくりしていたけど、あたしの髪の色は、今の流行ではないといつて、なるべき安く買おうとするのよ。そこであたしお金のいるわけを話したりして、ぜひぜひといそいだの。そうしたら、おかみさんが聞きつけて出て来て、買って娘さんをよろこばしておあげなさいよ。あたしにも売れるような髪があつたら、家のジンミイのためなら売りますよと、とても親切なんですよ。ジンミイ

「というのは、出征している息子ですって。」

話がおわると、メグが尋ねました。

「切られるとき、こわいと思わなかった？」

「床屋さんが道具を出しているあいだに、あたし見おさめに、じぶんの髪をながめたわ。でも、あたしめそめそしないわ。でもきつてしまつたら、腕か足きられたようなへんな気持ちしたわ、おかみさんはあたしがきられた髪をながめているのに気がついて、長い毛を一本ぬいて、しまっておきなさいといってくれたの。おかあさん、記念にこれさしあげます。きつたらさっぱりして、あたしもう二度とのばそうと思いません。」

おかあさんは、その毛をたたみ、おとうさんのみじかい灰色の

毛といっしよに、机のなかにしまいました。おかあさんは、ただ、ありがとうといっただけでしたが、娘たちはおかあさんの顔色を見て話をかえ、ブルツク氏の親切なことや、明日はよい天気になりそうなことや、おとうさんが帰っていらして、じぶんたちが看病できるたのしきなど、できるだけ元気に話しました。

だれもねたくないようでしたが、十時をうつと、おかあさんは、さあ、みなさんといいました。ピアノで、おとうさんの一ばん好きな讃美歌をひきました。元氣よくうたい出しましたが、一人また一人と声が出なくなり、音楽がいつもなぐさめになるبسだけが、心こめてうたいました。

讃美歌がおわると、娘たちはおかあさんにキッスして、しずか

に床にはいりました。ベスとエミイは、大きな心配ごとがあつても、すぐにねむりましたが、メグはねむれませんでした。ジヨウは、身うごきもしなかつたので、メグはもういもうとがねむつたことと思つていましたが、おさえつけたようなすすり泣きを聞いたので声をかけました。

「ジヨウ、おとうさんのことで泣いてるの？」

「今はそうじゃないの、あたしの髪のこと。」

ジヨウは、そういつて、なおもはげしく泣きました。メグは、なやめるいもうとにキツスし、その頭をなでました。

「後悔はしていないの。だけど、美しいものをなくしたので、ちよつとばかり泣いただけ。でも、もうすっかりおちついたから、

だれにもいわないで。おねえさんは、どうしてねられないの？」

「とても心配なので。」

「たのしいことを考えてごらんなさい。ねむれてよ。」

話しているうちに、ジヨウが大きく笑ったので、メグはおしゃべりをやめようといって、ジヨウの髪にカールをかけることを約束し、やがて二人はねむってしまいました。

時計が、十二時をうち、ひっそりと部屋がしずまったとき、一人の人かがげが、娘たちのベッドからベッドを歩き、ふとんにさわったり、枕をなおしたり、ね顔をながめたり、唇にそつとキツスしたり熱いのりをささげたりしました。

その人かがげが、カーテンをひいて、わびしい夜空を見あげたと

き、ふいに黒雲のかげから月があらわれて、あかるい慈悲ぶかい顔のように、その人かげに照りましたが、その顔は、言葉なき言葉で、こうささやいているように思われました。

「心やすくあれ、いとしき魂よ、雲のかげには、いつも光あり。」

第十六 手紙の花束

寒い、うすぐらい夜明けに、姉妹たちはランプをつけて、今までにない熱心さで聖書を読みました。その小さな書物には、救いとなくさめがあふれていました。

階下へおりにいくと、もう仕度はできて、ハンナがいそがしく

台所ではたらいでいました。おかあさんは、夜ねむらなかつたので、ひどくやつれて見えました。心配の多いおかあさんを悲しませないように、旅に送り出すつもりでしたが、おかあさんの顔を見ると、つい涙ぐまずにはいられなくなりました。おかあさんは、食卓についてもあまり食べませんでした。

馬車の来るまで、みんなはあまり話さずに、おかあさんの身のまわりの用事をしました。おかあさんがいいました。

「おかあさんは、あなたがたを、ハンナとローレンスさんにお願いしていきます。ハンナは心からの律義者ですし、おとなりのあの親切なかたは、あなたがたを、じぶんの娘のように守って下さいます。ですから、すこしもあたしは心配しませんが、ただ、こ

の不幸をよく理解して、留守中、悲しんだり、いらいらしたり、なまけたりせずに、めいめいの仕事をやって下さい、希望をもつてはたらきどんなことが起つても、けっしておとうさんを失わないということ覚えていらつしやい。」

「はい、おかあさん。」

おかあさんは、なおもこまかく、一人一人の娘に注意をあたえました。

馬車の音がしたとき、みんなはよくこらえて、悲しみの声をたてる者はありませんでした。ただ、しずかにおかあさんにキツスして、馬車が動き出したら、元気で手をふろうと思いました。

ローリーとおじいさんが見送りに来てくれました。同行するブ

ルック先生は、いかにも頼もしく見えましたので、巡礼ごつこのなかの案内者グレート・ハート氏という、あだ名を、さつそくつけました。馬車が走り出したとき、いい前ぶれのように、ちょうど日光が見送りのみんなを照らしました。そして、おかあさんが角をまがるとき、最後に目にはいったのは、四つのかがやかしい顔と、そのうしろに護衛のように立っているローレンス老人と、ハンナと、誠実なローリーのすがたでした。

「みなさん、なんて親切にして下さるのでしよう。」と、おかあさんは、ブルック青年の顔にあらわれた尊敬と同情を見ました。

「だれだって、あなたがたに親切にせずにはいられないのです。」と、ブルック先生は、気持よく笑ったので、おかあさんもほほえ

まずにはいられませんでした。こうして長途の旅行は、日光と微笑と、たのしい言葉の、よい前兆ではじめられました。

「あたし、なんだか地震でもあった後のような気がするわ。」と、おとなりの二人が帰って行ってしまおうと、ジョウがいました。

「家が半分なくなってしまうたようね。」と、メグがさびしそうにいいそえました。

そして、娘たちは、勇ましい決心をしていたにかかわらず、その場に泣きくずれてしまいました。ハンナは、気をきかして、そつとしておき、どうやら夕立が晴れもようになったとき、コーヒーわかしを持って来ました。

「さ、おかあさんのおっしやったとおりにやるんです。コーヒ―

で元氣をつけて。」

この朝、とくにハンナが腕をふるったおいしいコーヒーに、みんなはすっかり元氣づけられ、「せつせとはたらけ、希望をもつて」の、標語どおりに、ジヨウは、マーチおばさんのところへ、メグはキング家へはたらきにいきました。そして、エミイとベスは、ハンナを助けて家のなかの仕事を、つぎからつぎへ片づけていきました。こうして、まい日、わりに元氣にあかるく、なにごとともなく過ぎていきました。

それに、おとうさんのことが、娘たちをたいそうなぐさめました。重態ではありましたが、もつともすぐれた看護婦がつきそうようになつてから、その効果はすでにあらわれました。ブルツク

先生がまい日、容態を知らせてくれるので、その速達を一家の長としてのメグが、読みあげることになりましたが、一週、二週とすぎるとつれて、いよいよ娘たちを元気づけてくれました。

みんなずいぶんふくらんだ手紙を書いて、ワシントンへ出しました。その手紙のなかから、こっそり披露してみましよう。

なつかしい、おかあさん。

先日のお手紙がどんなにあたしたちを幸福にしたか申しあげかねるほどでございます。あまりうれしいお便りなので、読みながら泣いたり笑ったりいたしました。ブルックさまは、なんて御親切なのでございましょう。ローレンスさまの御都合で、そんなに長くいて下さって、おとうさんやおかあさんを、いろいろお世話

下さるのは、まことにしあわせでございますね。ジヨウは、あたしのぬいもののお手伝いをしてくれます。あの子の「道徳上の発作」が永つづきしないことを知っていなければ、過労にはならぬと心配になるくらいです。ベスは時計のように正しく、じぶんの仕事をしています。エミイは、わたしのいうことをよくきいてくれます。ボタンの穴かがり靴下のつくろい、わたしに教わってよくやります。

ローレンスさまは、年とったかあさんのにわとりみたいに、ジヨウがそう申します。わたしたちの世話をして下さいます。ローリイもたいそう親切にしてくれます。おかあさんが遠くへいらしたのでわたしたちはときどきさびしくて孤児みたいな気がします

が、ローリイとジヨウが元気づけてくれます。ハンナは、聖人みたいです。日夜おかあさんのお帰りを待っています。おとうさんにくれぐれもよろしくお伝え下さいませ、おかあさんのメグより。においりの、びんせんに、きれいに書いたこの手紙とちがつて、つぎの手紙は、大きなびんせんに書きなぐつてあります。

わたしのたつといおかあさん。

なつかしき父上のために、ばんざい三唱、おとうさんのよくなられたことを、電報で知らせて下さるブルック先生まことに頼もしきかぎり、電報を見て屋根部屋へかけあがり、わたしたちによくして下さる神さまにお礼を申さんとせしも、ただ大声で、うれしいとくり返し泣きましたのみ。でも、長きいのりとおなじかと

存じます。

わたしどもは、おもしろく暮しています。みんなひどく親切で、山鳩の巣にいるごとし。メグねえさんは、おかあさんらしくふるまい、日に日に美しくなり、いもうとたちは、かわいい天使のようです。わたしは、あいかわらずのジョウ。そうそうローリイと、けんかしました。わたしのほうが正しいがいいわけしたのがわるく、わたしがあやまるまで来ないといって帰り、国交断絶、わたしはローリイのあやまりに来るのを待ちましたが来ません。その晩、エミイが川に落ちたときの、おかあさんの教訓を思い出し、聖書を読んだらおちついて、怒ったままねてはならぬと、あやまりに来るローリイとあい、すっかり心は晴れ、元どおり仲よしと

なりました。昨日のハンナの洗濯のお手伝いをして詩をつくりました。お笑草に。おとうさんに、わたしにかわって、愛情こめてキツスをしてあげて下さい。でたらめのジョウより、

しゃぼん水のうた

わたしのたらいの女王さま、わたしはたのしくうたいます。

白いあわが、ぶくぶく高くたつあいだに

せつせとあらって、しぼって、ほします。

きれいなお空の下で、吹きまわる風に

せんたくものは、ひらひらふかれます。

あたしたちの心とたましいについた

一週間のけがれをあらいたい。

水と空気のふしぎなちからで

きれいにきれいにきよめたい。

そうすれやこの世に、とてもすてきな

せんたく日がおこなわれるでしょう。

よき人の世の小道には

いつもパンジイが咲くでしょう

いそがしい心は かなしみも うれいも なやみも

考えるひまは、ありはしない

ほうきをせつせとつかうときには

なやむ思いもはいてしまう。

日ごと日ごとにつとめる仕事が

わたしにあたえられたのはうれしい。

仕事がつよいからだ　ちからとのぞみを　もってきてくれる
頭でいろいろよく考え　心でいろいろよく感じ、

けれど　手はいつもはたらかすよう。

なつかしい、おかあさん——わたしの愛情とおとうさんがお帰
りになったとき、お目にかけてようと大切にしていた三色すみれの
おし花とをお送りするだけでございます。わたしはまい朝あの本
を読んでいい子になろうとつとめ、ねるときはおとうさんの好き

な歌をうたいます。わたしは、「まことの国」がうたえませぬ。うたえば泣けて来るからです。みなさんが大切にして下さいますので、おかあさんがるすでも、幸福に暮しています。エミイがこの紙ののこりに書くそうですから、これでやめます。まい日、時計をまくことと、部屋にいい空気をいれることは忘れたことありません。なつかしいおとうさんによろしくお伝え下さい。小さなベスより

あたしのおかあさん——みんな元気です。わたしはまい日勉強しています。おねえさんのいうことをききます。メグねえさんは、たいへんやさしくして下さいます。夕飯のときゼリイを食べさせ

て下さいます。ジヨウねえさんは、あたしがゼリイを食べるからおとなしいのだといいます。もうじき十三になるのに、ローリイはあたしを子供あつかいにし、ひよこさんといったり、あたしがフランス語で、メルシイ（ありがとう）とか、ボンジュール（こんにちは）とかいうと、ぺらぺらとフランス語をしゃべってこまらせます。

空色のドレスのそでがきれたので、メグねえさんが新らしいのとつけかえて下さいましたが、色が青すぎて前のほうがだめになりました。いやでしたが、ぐずらないで、つらいのを、がまんしています。ハンナがエプロンにもっとのりをつけて、まい日おそばを食べさせてくれるといいと思います。メグねえさんは、あた

しの文章、てんのうちかたと、字の使いかたがだめだといひます。することがたくさんあるのですしかたありません。さよなら、おとうさんにくれぐれもよろしくおつしやつて下さい。エミイより

おしたわしきマーチおくさまへ——一筆申しあげます。みなさんおたつしやで、おりこうで、よくおはたらきになります。メグさまは、よいおくさまぶりで、なんでも早くこつをのみこみなされます。ジョウさま まつさきにたつておはたらきになります。考えてからなさないの、なにをしでかしなさるか知りません。月曜日せんたくをなさいましたが、しぼらずにのりをつけたり、もも色キヤラコを青くしたり、おかしくてころげるほど笑いました。バスさまは一ばんよくできたかたで、手まわしがよく、わた

しは大助かりです。なんでもおぼえようとなされ、市場の買出しにもいかれます。みんなでずいぶん険約しおくさまのおおせどおり、コーヒーも一週間に一回、食物は栄養のあるものにして、ゼいたくいたしません。エミイさまは、よい服を着たがったり、お菓子をほしがったりして、だだをこねなさるときもあります。ローリイさまは、あいかわらずのあばれんぼうですが、みなさんを元気づけて下さいますので、けっこうです。パンがふくらみかけたので、これでやめます。だんなさまによろしくお伝え下さいませ。肺炎が早くなおりますようお祈りいたしております。ハンナ・マレットより。

第二号付看護婦長殿

ラパハノツク川岸はきわめて静かにて全軍士気さかん。兵站部の処置よろし。テデイ大佐指揮の国防軍その警備にあたる。司令長官ローレンス將軍は、まい日軍隊の檢閲をなされ、給養係マレットは宿舎をととのえ、ライオン少佐（犬の名）は夜中歩哨の任につく。ワシントンよりの吉報に、二十四発の祝砲をはなち、司令部に大觀兵式をおこのう。司令長官の熱誠あふるる祝福をお伝えし、全快を祈るものなり　テデイ大佐

親愛なる夫人よ——御令嬢方みな無事。ベスと小生の孫は、まい日お便りいたしています。ハンナは模範的な召使、美しいベスさんを、まるで竜のように守っています。上天気つづきなにより、

どうぞブルツクを御遠慮なくお使い下されたく、なお、費用お見込をこえる場合、当方よりお引出し願いたく、御主人に御不自由なきよう、御快方におもむかれしことを神に感謝いたしております。あなたの忠実な友であり召使の ジェームス・ローレンス。

第十七 小さな真心

はじめの一週間というものは、マーチ家の美德は、となり近所へ配給してもあまりあるくらいでした。たしかにおどろくべきもので、たれもかれも申しぶんのない、よいきげんでしたし、わがままをおさえました。けれど、おとうさんについて、はじめのよ

うな心配がなくなると、しだいに気がゆるみ、標語の、せつせとはたらくということも怠りがちとなり、非常な努力のあとだもの、休んでもよかろうという気持で、たびたび休みました。

ジョウは、髪をきった頭をつつまなかつたので、かぜをひき、マーチおばさんは、なおるまで来るなどいいましたので、それをいいことにして休みました。エミイは、家の仕事をやめて粘土細工をやりだしました。メグはキング家から帰ってする針仕事に、あまり身をいれなくなり、ワシントンへ手紙を書いたり、ワシントンから来た手紙をくりかえして読んだりしました。ベスだけは、たいして怠けず、まい日こまごました小さな仕事を忠実にやりました。おかあさんのことがこいしく、おとうさんのことが心配に

なるようなときは、戸だなへはいつてすすり泣き、こつそり祈りました。

おかあさんが出発してから十日後、バスがいました。

「メグねえさん、ハンメル家へいつて見て来ていただきたいわ。

おかあさんはあの人たちのこと忘れないようにと、おつしやつたでしょう。」

すると、メグはあまり疲れたからいけないといいます。そこで、バスはジヨウねえさんに頼むと、かぜをひいているからといつてことわりました。

「あなた、どうしてじぶんでいかないの？」と、メグが尋ねました。

「あたし、まい日いつてるのよ。だけど、あかちゃん病氣していで、どうしていいかわからないの。おばさんは、はたらきにいつてしまうし、ロツチエンが看病してるけど、だんだんわるくなつていくようよ。おねえさんかハンナがいかなければだめだと思わわ。」

ベスが熱心にいうので、メグは明日いくと約束しました。

「ハンナに頼んで、なにかおいしいものつくつて、もらつて持つていっておやりなさいよ。ベス、外の空気はあなたの身体にいいわ。」と、ジョウはいつて、また、いいわけらしく言葉をそえました。「あたしもいつてあげたいけど、この小説書きあげてしまいたいのよ。」

けれど、ベスは、

「あたし頭痛がしてくたびれているの。たれかいつて下さるといいの。」と、いかにも疲れているようなようすでした。

「エミイが、もうじき帰ってくるわ。あの子に一走りいつてもらおうといい。」と、メグがいました。

「では、あたしすこし休んで、エミイの帰るの待っていますわ。」
そういつてベスは、ソファに横になりました。メグとジョウは、それぞれの仕事にかかり、一時間あまりたつてもエミイは帰りませんでした。ハンナは台所でいねむりをしていました。ベスは、しかたなしに、そつと頭巾をかぶり、かわいそうな子供たちにやるものをバスケットにいれ、悲しげな顔をしてつめたい風のなか

を出かけていきました。

バスが帰ったのは、だいぶおそく、帰るところそり二階へあがり、おかあさんの部屋にこもりました。ジョウが、用事でその部屋へいったとき、バスが目をあかくして、カンフルの瓶を片手に持ち、薬箱に腰かけているのを見ておどろきました。

「どうしたの？」と、ジョウが尋ねると、バスは近よつてはいけないという手つきをしました。

「ハンメルさんのあかちゃん、おばさんの帰つて来ないうちに、あたしに抱かれて死んでしまったの。」

「まあ、かわいそうに、どんなにこわかったでしょうね。あたしがいけばよかった。」

ジヨウは、後悔の色を顔にうかべ、おかあさんの大きなイスにかけてベスを抱きました。

「こわくはなかつたけど、悲しかったわ。ロツチエンが医者をおよびにいったというので、あたしがあかちゃんを抱いて、ロツチエンを休ませてあげてたの。そうしたら、あかちゃんが、きゆうに泣き声をたててぶるぶるふるえて動かなくなつたの。足をあたためたり、ミルクを飲ませたりしたんですがもうだめ、ちつとも動かないの。」

「泣かないでね、それから、どうしたの？」

「お医者さまが来るまで、あたし抱いていたの。お医者さまに死んでしまったとおっしゃって、ヘンリツヒとミンナののどを見て、

「しようこう熱」ですね、おくさん、もっと早くわたしをよびに来なければだめですと、むずかしい顔をしておっしゃったわ。すると、ハンメルのおばさんが、貧乏だからじぶんの手でなおそうとしたんです。どうかほかの子を助けて下さいといったの。そして、わたしにね。早く家へ帰ってベラドンナを飲みなさい。そうでないと、あなたもかかるよとおっしゃったの。」

「ああ、バス、あなたがかかったら、あたしはどうしたって、じぶんを許せないわ！」

「だいじょうぶ、ベラドンナを飲んだら、いくらかよくなったようだわ。」

「ああ、おかあさんが家にいて下さったら！ あなたは一週間以

上も、ハンメル家へいったんだものきつとうつたわ。ハンナをよんで来るわ。ハンナは病気のことなんでも知っているから。」

「エミイを来させないでね、エミイはまだかからないから、うつると大へんだわ。あなたとメグねえさんは、もううつらないでしようか？」

「だいじょうぶと思うわ。うつったってかまわないわ。あなたばかりいかせて、くだらないもの書いていて、じぶん勝手のむくいだわ。」

ジョウは、そうつぶやいて、ハンナのところへ相談にいきました。ハンナはよく知っていて、手あてさえよければ死ぬものではないといったので、ジョウはほっとし、今度は、二人でメグをよ

びにいきました。

ハンナは、ベスの容態を見たり、いろいろ尋ねてからいいました。

「では、バンクス先生に診察していただいて手当をするんです。エミイさんはうつるといけないからしばらくマーチおばさんのところであずかっていたいただきましょう。それから、どなたか一人のこつてベスさんのお相手になってあげて下さいませ。」

のこるのは、ジョウにきまりましたが、エミイは、どうしてもいかないといい、いくらいなら、しようこう熱にかかったほうがいいと、だだをこねはじめました。なだめても、すかしても聞きません。おりよく来たローリイに頼むと、ローリイはいろいろ

とエミイの心をひくようなことを、まくしたてました。

「ぼくがまい日顔を出して、ベスの容態を知らせたり、遊びにつれ出したりしてあげる。あのばあさんは、ぼくが好きなんだ。だから、できるだけうまくやるよ。芝居にもつれていってあげる。」
とうとうエミイは承知しました。

メグとジョウは、二階からおりて来て、エミイが承知したことを知って安心しました。バンクス先生をよびにいくのも、ローリイがしてくれました、親切なローリイは、生垣をどび越していきましました。

バンクス先生がいらして、バスにはしようこう熱のきざしがあると診断しました。そして、ハンメル家の話を聞いてむずかしい

顔をしましたが、たいていかるくすむだろうということでした。エミイは、すぐに家からはなれるように命ぜられ、予防の手あてをしてもらつてから、ローリイとジョウにまもられて、マーチおばさんの家へいきました。

マーチおばさんは、話を聞いて、

「だから、いわないことじゃない。よけいなおせっかいをして、貧乏人の家へいつたりするからだよ。エミイは、ここにいて、御用をしたらいいだろう。」と、いいました。

エミイは、おばさんから、目がね越しに、じろじろ見られるので、いやになつてしまいました。それでも、ローリイとジョウが帰つてしまうと、気をとりなおして、

「あたし、とてもがまんできそうにないけど、やってみましょう。」と、考えました。

そのとき、おばさんのとこの、おうむのポーリーが、「でていけ、ばけもの！」と、さけんだので、エミイはしくしく泣いてしまいました。

第十八 つづく暗い日

ベスは、まぎれもなく、しようこう熱でした。ハンナと医者しか、その重態であることを知りませんでした。ローレンス氏は、老体なので、病人を見舞うことは許されませんでしたから、すべ

てハンナが一人でやりました。

メグは、おかあさんへ手紙を書くとき、ベスのことに一言もふれないので、小さい罪をおかしているような気がしましたが、これはハンナがよけいな心配をかけてはいけないと、とめたためでした。ジヨウはベスにつききりでしたが、熱の高いベスは、ピアノをたたかつかつこうをしたり、はれあがったのだでうたおうとしたり、まわりの人の顔がわからなくなったりするので、すっかりジヨウはおびえてしまい、ハンナに、おかあさんへ知らせようといい、ハンナもそうしましょうかといっているところへ、ワシントンからの通信が来て、おとうさんの病気がぶりかえして、当分帰る見こみはないということでした。

来る日も来る日も、家のなかは悲しくわびしく、父母の帰りど、ベスの回復とをねがいながら、はたらいっている姉妹の心は、なんとおもくるしかつたでしょう！

けれど、みんなそれぞれ心に教訓を受けました。メグは、今までの生活が、金であがなうことのできる、いかなるぜいたくよりも、はるかにたつといものであることを知りました。ジョウは、ベスが病気になつて、はじめてベスの美德を知りました。ほかの者のために生き、手近の仕事をして家庭をたのしくしようとする、そのあたたかい心持は、才能や財産や美しさよりもたつといことを知りました。エミイは、早く帰つてベスのためにはたらきたいと思ひました。労苦をいとわぬベスが、じぶんのなござりにして

おいた仕事を、いかにたくさん片づけてくれたかを考えて後悔しました。

ローリイは、おちつきを失って、家のなかをうろつき、ローレンスは、バスがじぶんをなくさめてくれたピアノを思い出すのにたえられなくて、グラント・ピアノにかぎをかけてしまいました。牛乳屋もパン屋も肉屋も、みんながバスのことを尋ねました。

バスのすがたが見えないさびしいのでした。

バスは、ぼろ人形をそばにおきました。子ねこにもあいたがりでしたが、病気がうつるのを心配してがまんしました。すこし気分がいいと、手紙を書きたがりました。けれど、そのうちに、病状はわるくなり、意識が不明となり、うわ言をいうようになりま

した。バンクス先生は、一日に二回も来ました。メグは、机のひき出しに電報用紙を用意しました。

十二月一日は、冬らしい日で、風が吹き雪がふりました。その朝、バンクス先生は診察をすますといいました。

「おくさんが御主人のそばをはなれられるようなら、およびしたほうがよろしいです。」

ハンナは、うなずきました。メグは、イスにぐったりたおれました。まつさおになったジョウは、電報用紙をひつつかんで、吹雪のなかへとび出していきました。まもなく帰って来たとき、ローリーが来て、おとうさんがまた快方にむかったという手紙を持って来ました。けれど、ジョウの顔が悲痛にあふれているので、

「どうしたの？　ベスわるいの？」

「ええ、おかあさんに電報うつて来たの。もうあたしたちの顔がわからないのよ。おとうさんもおかあさんもいらつしやらないし、神さまも遠くへいっておしまいになった！」

ジョウの顔に、涙がたきのように流れました。よろけそうなので、ローリイはその手をつかみ、なにかなぐさめの言葉をかけようとしたが、言葉もないので、ジョウの顔をやさしくなでてやりました。ジョウは無言の同情を心に感じ、やっとおちついて、感謝にみちた顔をあげました。

「ありがとう。もうだいじょうぶ、万一のことがあつても、こらえられるわ。」

「ぼくはベス死ぬと思わない。あんなにいい子だし、ぼくたちこんなにかわいだっているんだもの、神さまがつれていらつしやるわけはない。」

「やさしい、かわいい子は、いつでも死んでしまうんだわ。」

「きみ、つかれてるんだ、心ぼそく思うの、きみらしくないよ。ちよつと待ってて。」

ローリーは、階段をかけ上がり、まもなくいっぱいのぶどう酒を持って来た。ジョウはにっこり笑って、ベスの健康のために飲むわといつて飲みました。

「あなたいい医者ね。そして、ほんとに気持のいいお友だちね、どうして、お返しできるかしら？」

「いずれ勘定書を出すよ。そして、今夜はぶどう酒より、もったきみの心をあたためるものをあげるよ。」

「なんなの？」

「昨日、電報うったのさ。そうしたらブルツク先生から、すぐ帰るといふ返電さ。だから、おかあさんは、今晚お帰りになる。そうすれや、万事好都合だろう。ぼくのやったこと気にいらない？」

ジヨウは、狂喜してさけびました。

「おおローリイ！ おかあさん！ うれしい！」

ジヨウは、ローリイにしがみつき、めんくらわせてしまいました。けれど、ローリイは、おちついて、ジヨウのせなかをさすり、気がおちつくのを見て、二三度はずかしそうにキツスをしました。

それで、ジヨウはきゆうにわれにかえり、やさしくかれをおしのけ、息をはずませながらいいました。

「だめよ、あたしそんなつもりじゃなかったのよ。いけなかったわ。でもハンナがあんなに反対したのに、電報うって下すつたと
思うと、うれしくて、とびつかずにいられなかったの。きつとぶ
どう酒のせいだわ。」

ローリイは、笑いながらネクタイをなおしました。

「かまわないさ。ぼくもおじいさんも、とても心配でね。もしも
バスに万一のことでもあれば、申しわけない、だけどハンナは、
ぼくが電報をうつつというのと、どなりつけたんだ。それでぼくかえ
って決心して、うってしまつたんだ。終列車は、午前二時につく

からぼく迎えに行く。」

「ローリー、あなた天使だわ。どんなにおれいいっていいかわからないわ。」

「じゃ、もう一度とびきたまえ。」と、ローリーがいたずらそうな顔をしていいました。

「いいえ、もうたくさん、おじいさんがいらしたら、とびついてあげるわ。さ、あなたは迎えにいつて下さるのだから、早く帰ってお休み下さい。」

ジヨウは、そのまま台所へかけこみ、そこにいたねこにまで、うれしいお知らせをいつて聞かせました。ハンナは、

「おせっかいな小僧さんだが、かんべんしてあげましょ。おくさ

まが早くお帰りになるから。」と、いいました。

新らしい空気がさつと流れこんで来たようなよろこびでした。あらゆるものが希望にみちて来ました。姉妹たちは、顔を合せるごとに、おかあさんが帰っていらつしやるのよと、はげまし合うようにささやきました。バスだけは、見るも痛ましく、おもくるしい昏睡状態におちていましたが、それでも姉妹たちは神さまとおかあさんを信頼していますので、今までほど心は苦しくありませんでした。

吹雪の一日が暮れて、とうとう夜が来ました。バンクス先生が来て、よくなるか、わるくなるか、いずれにしても、ま夜中ごろ変化が起るだろうから、そのころまた来るといつて帰っていきま

した。

ハンナはつかれきつて、ソファに横になつてねてしまいました。ローレンス氏は客間をあちこち歩きまわっていました。ローリイはストーブの前に横わつて、じつと火を見つめていました。姉妹たちは、すこしもねむくなくて、一生忘れることのなさそうな、ひきしまった気持ちでベスのそばにいました。

「もし神さまがベスをお助け下さつたら、あたしもう二度と不平をいわないわ。」

メグが熱心にささやくと、ジヨウも

「あたしは、一生、神さまにお仕えする。」と、答えました。

やがて、十二時が鳴りました。二人はベスのやつれた顔に、な

にか変化が起つたような気がしたので、われ知らず病人の顔を見まもりました。家のなかは死のように静まり、むせび泣くような風の音だけが聞えました。一時間がすぎましたが、ローリイが停車場へ迎えに出かけたほか、なにごともしませんでした。さらに一時間すぎました。吹雪のために汽車がおくれたのでしようか、それとも、おとうさんに大きな悲しみでも起つたのではないかしら。あわれな姉妹たちは、また心をなやましはじめました。

二時まで、ジョウは窓のそばへいつて、外を見ていましたが、ふとふりかえると、メグがひざまずいています。あ、ベスが死んだがメグはこわくてあたしにいけないのだと考えると、さつとつめたい恐怖が全身に通りました。ジョウは、すぐにベスのそ

ばにいきました。苦しそうなようすは消えていかにも安らかな顔です。ジヨウは泣く気にも、悲しむ気にもなれず、かわいいベスの上に身をかがめて、そのしめった額に唇をあてました。

「さようなら、ベス、さようなら！」

その気配でハンナが目をさまし、いそいでベッドのそばへ来て、手にさわったり、唇に耳をあてて息をしらべたりしていました。が、「ありがたい、熱がさがりました。すやすやねていなさる。肌もしめっているし、息もらくになられた。」と、いいました。

姉妹がこのうれしい変化を信じかねているうちに、バンクス先生が来て保証してくれました。危険は通りすぎた。よくねむらしてあげなさいという、言葉を聞いたとき、お医者さんの顔は神さまの

顔のように思われました。

お医者者が帰ってから、メグとジヨウとハンナは、大きな安心のなかで、抱いたり、手を握り合ったり、よろこびのなかで、ゆめのような時間をすごしました。

冬の夜は、ようやく明けはじめました。メグは、咲きかけた白ばらの花を持って来て、

「あの子が目をさましたら、このかわいいばらと、おかあさんの顔が、一ばんはじめに見えるようにしてあげよう。」と、いいました。

メグとジヨウは、長い、悲しい一夜を明かし、おもいまぶたに、あかつきの空をながめたとき、こんなに美しい朝を見たことがな

いと思いました。メグが、

「まるで、おとぎの国みたいねえ。」と、いつてほほえむと、ジヨウがとびあがって、

「あら、お聞きなさい！」と、いいました。

そうです。ベルが鳴り、ハンナとローリーのうれしそうな声、
「おかあさんのお帰りですよ！」

第十九 エミイの遺言状

家でこういうことが起っているあいだ、エミイは、マーチおばさんの家で、まことにつらい日を送っていました。エミイは、ま

るで島流しにあったようなわが身をふかく悲しみ、わが家でどんなにかわいがられていたかということ、生れてはじめて感じました。

マーチおばさんは、親切でしたが、けっして人をあまやかすようなことをしませんでした。エミイはしつけがいいので、たいそう気に入りました。それで、エミイをかわいがり、幸福にしてやりたいと思いましたが、ざんねんながら、その方法がまちがっていました。

マーチおばさんは、すべて命令ずくめで、きちょうめんで、くどい長いお説教で、エミイを教育しようとしたが、これがまたエミイをすっかり不幸にし、まるでじぶんはくものあみにかか

ったはえのようだと思いました。

エミイは、まい朝、茶わんをあらい、スプーンや湯わかしを、ぴかぴかに光るまでみがかなくてはなりませんでした。それから、おそうじ、おばさんはちり一つ見のがさないので、なんとまあおそうじはつらかったでしょう。それから、おおむのポーリーに餌をやり、ちんの毛をくしけずり、足のわるいおばさんの用事を、なん度も召使のところへいいにいたり、階段をのぼったりくだったり、それがやつとすむと、勉強をさせられます。その後の一時間！ そのとき運動か遊びを許されるので、どんなにたのしかつたでしょう！

ローリーは、まい日訪ねて来て、エミイの外出を許してもらう

ように口説きたて、やつと許されると、二人は散歩したり馬車にのったりして、たのしい時をすごしました。お昼の御飯を食べてから、おばさんに本を読んで聞かせます。おばさんがねむってしまつても、じつとしてすわっていなければなりませんでした。おばさんは、はじめの一ページでいねむりをやりだし、たいてい一時間はねむりました。それから、夕方まで、つぎはぎ仕事などをしなければなりませんでした。夕飯までしばらくのあいだ遊びますが、夕飯をすましてからは、マーチおばさんのわかいときの話やお説教を聞かされたいくつしてしまいます。そして、やつと話がおおると、エミイはねるのですが、つらい身の上を思いきり泣こうと思つても、一二滴の涙しかこぼさないうちに、いつもねむ

つてしまいます。

もしローリイと、エスターばあやがいなかったら、こんなおそろしいまい日を、がまんできないとエミイは思いました。おおむのポーリーだけでも、エミイを発狂させるほどでした。ポーリーはエミイの髪をひっぱったり、そうじしたばかりのかごに、ミルクをひっくりかえしてこまらしたりしました。また、ふとつたむく犬も、エミイの手にかかることばかりやりました。

エスターばあやだけは、エミイをほんとにかわいがってくれました。ばあやはフランス人で、マーチおばさんと長年暮らし、おばさんもこのエスターをいなければならぬ人と思っていました。ばあやは、エミイにフランスにいたころのめずらしいお話を聞か

せてたのしませました。また、広い家のなかを勝手に歩きまわらせて、大きな戸だなや、古風なたんすにしまいこんだものを、自由に見させてくれました。なかでも宝石箱には、真珠の首かざりやダイヤの指輪、そのほか、ピンやロケットなどいくつも、目もまばゆいばかりのものがありません。

「もしおばさんが遺言なさる場合、あなたはどれがほしいと思いますか？」と、そばについて、かぎをおろすエスターが尋ねました。

「あたし、ダイヤモンドが一ばん好き。だけど、ダイヤモンドの首かざりはないから、この首かざり」と、エミイは答えて、金と黒たんのじゅ玉できて、さきに十字架のついた首かざりに見と

れました。

「あたしも、これが一ばん好きですが、首かざりにはもったいない。あたしのような旧教の信者はおじゆずに使います。」

「あなた、お祈りするのたのしそうね。」

「ええ、あなたもお祈りなさるといいですよ。化粧室を礼拝堂につくってあげましょう。おばさんがいねむりをなさっているあいだに、じつとすわって、神さまにおねえさんをおまもり下さるよ
うに、お祈りあそばせ。」

エミイは、その思いつきが気にいり、礼拝堂をつくるように頼みました。

「マーチおばさんがおなくなりになったら、この宝石はどうなる

のかしら？」

「あなたと、おねえさんたちのところへいくのですよ。遺言状を見ました。あたしは。」

「まあ、うれしい。今、下さればいいのに。」

「今は早すぎます。はじめに結婚なさるかたに真珠、それから、あなたがお帰りになるときには、トルコ玉の指輪、おくさまはあなたが、お行儀がいいといって、ほめていらつしやいました。」

「ほんと？ あの美しい指輪がいただけるの。まあ、うれしい。やっぱりおばさん好き。」と、エミイは、うれしそうな顔をして、それをきつと手にいれようと心をきめました。

その日から、エミイは、おとなしく、なんでもいうことを聞い

たので、マーチおばさんはじぶんのしつけが成功したと思つて、たいそう満足しました。エスターは、礼拝堂をつくつてくれ、聖母の絵をかいてくれました。エミイは、心をこめてここに祈り、ベスの病気をなおし、じぶんを正しく導いて下さるように願いました。

エミイは、善良になるために、マーチおばさんのところに遺言状をつくらうと思ひました。遊び時間に、エスターから法律上の言葉を教えてもらつて、じぶんの所持品を公平にわけれることを書きました。

エスターは証人となつて署名してくれました。エミイは、ローリイに、第二の証人になつてもらつてもらうつもりでした。ところで、こ

の部屋には、流行おくれの服がいっぱいはいったダンスがあつて、エスターはエミイに、それで自由に遊ばせました。その服を着て、長い姿見の前をいったり来たりして、わざとらしくおじぎをした。衣ずれの音をさせたりするのが、おもしろくてたのしみでした。

この日は、そんなことを、あまり夢中でやっていたので、ローリーの鳴らしたベルにも気がつかなかつたし、そつと来てのぞいたのも知りませんでした。エミイは、青色のドレスと黄色の下着をつけもも色のふちなし帽子をかぶり、扇子を使ってすましてねり歩いたのでした。ローリーが、後でジョウに話したところによると、エミイがそうやって気どつて歩いていくあとから、おおむ

のポーリーがそのまねをして歩き、ときどき立ちどまって、

「きれでしょ、あつちいけ、おばけさん、おだまり、キツスして！ ハツ！ ハツ！」と、どなりましたが、それはとてもおかしな光景だったということでした。

ローリーは、おかしさのあまり、ふき出しそうになるのを、やつとこらえました。そして、ていねいに迎えられ、これを読んでよと、あの遺言状を見せられました。

遺言状

わたし、エミイ・カーチス・マーチは、正気にて所有物全部を左記の如く分配します。父上には一ばんいい絵、スケッチ、地図、

額ぶちづき美術品。

母上には、衣類全部、ただしポケットのある青いエプロンはべつ。それから、わたしの肖像画とメダルを真心こめて。

メグねえさんには、トルコ玉の指輪（もしいただいたら）鳩のついている緑の箱と、首かざりのためのレース、姉上をかいたスケッチ。これは姉上の愛する妹のかたみ。

ジョウねえさんには、一度なおした胸ピンと、青銅のインクつぼ（ふたはおねえさんがなくした）それから、原稿を焼いたおわびに一ばん大切な石膏のうさぎ。

ベス（もしわたしの後まで生きていけば）には、人形、小さなダンス、扇子、麻のカラー、それから病気がよくなり、やせてな

ければ、新らしいスリツパ、それから、わたしがいつも古ぼけたジヨアンナのことをからかったことを、ここで後悔しておきます。お友だちであり隣人であるローリイには、紙のかばんと、首がないようだとおっしゃったが、粘土細工の馬。つぎに心配のときに親切にして下さったお礼に、わたしの絵のなかで気に入ったものさしあげます。ノートルダムが一ばんよくできています。

大恩人ローレンス氏には、ふたに鏡のついた紫の箱、ペンいれによろし。わたしたち一家、ことにベスへの御厚意をありがたく思っていることを思い起させるでしょう。

なかよしのキティ・ブライアントには、青色のエプロンと、金色のじゅず玉の指輪を、キツスとともにあげる。

ハンナには、ほしがっている紙箱と、つぎはぎの細工を全部、わたしを思い出してもらうためです。

わたしの大切な所有品を全部処分せり、みなみな満足して死者を非難せざるよう望む。わたしはすべての人を許し、最後のラツパの鳴りひびくとき、みな再会することを信ず。アーメン、この遺言状は、千八百六十一年十一月二十日、わが手によつて認め封印す。

証人

エミイ・カーティス・マーチ

エステル・ベルノア

セオドル・ローレンス

最後の名は鉛筆で書いてありました。エミイはかれにそれをペンで書きなおして、正式に封印してほしいと申しました。

「どうしてこんなことを思いついたの？　ベスが形見わけでもするということなことを、たれから聞いたの？」

エミイは、そのわけを話してから、

「ベスはどうですって？」と、訪ねました。

「いいかけたからいうけど、ベスこのあいだ大へんわるくなって、ジヨウにいったの。ピアノはメグに、あなたに小鳥を、かわいそうな古い人形はジヨウに。ジヨウに人形をかたみとしてかわいがってほしいって。ベスは、あまり人にあげるものないといって悲しがって、ぼくたちには髪を、おじいさんには愛だけをのこすん

だって、でもベスは遺言状のことはなんにも考えていなかった。」

ローリイは、素晴らしいながらサインしていると、大きな涙のつぶがおちて来ました。はつとして顔をあげると、エミイの顔には苦痛の色があふれ

「遺言状には、二伸みたいなものをつけていいでしょうか？」

「いいでしょう。追伸というんでしょう。」

「じゃ、書きいれてちょうだい。あたしの髪みんな切ってお友だちに分けるって。へんなかつこうになるけど、そのほうがいいわ。」

ローリイは、エミイの最後の大きな犠牲にほほえみながら書き足し、一時間ほど遊びました。

「ベスは、ほんとに、そんなにわるいの？」

「そうらしいんだ。よくなるように祈ろうねえ、泣いちゃだめですよ。」

ローリイは、にいさんのように、エミイの肩に手をかけてなくさめました。ローリイが帰ってしまうと、エミイは小さな礼拝堂にはいり、夕ぐれのあかりのなかにさわって、涙を流しながらベスのために祈りました。もし、このやさしい小さい姉をうしなったら、たとえトルコ玉の指輪が百万もらっても、あきらめられな
いと思われました。

第二十 うち明け話

おかあさんと、娘たちの対面を語る言葉はないようです。こういう世にもうるわしい光景は、描写するにむずかしいものです。

そこで、それはいつさい読者のみなさんの想像にまかせておいて、ただここでは、家のなかに真に幸福がみちあふれ、メグのやさしい望みがかなえられて、ベスが永いねむりからさめたとき、その目にうつった最初のものは、小さな白ばらの花と、おかあさんの顔であつたということだけを述べておきます。

ベスは、おとろえていたので、まだ気力がなく、ただにっこりと笑つて、おかあさんに身をすりよせましたが、また、ひっそりとねむつてしまいました。そのあいだに、ハンナのよろこびでつ

くつた朝のすばらしい御飯を、メグとジヨウがお給仕しながら、おかあさんがあがりしました。あがりながらおかあさんは、おとうさんの容態、ブルツク氏が後にのこつて看病をしてくれること、帰りの汽車が吹雪でおくれたこと、ローリイが希望にみちた顔で迎えに出ていてくれたので、つかれと寒さでくたくたになつていたが、口にいえない安心をしたことなどを、ひそひそと話しました。

その日はなんとという、ふしぎな気持よい日でしたらう。外はまばゆいばかり、雪に日が照っていましたが、家のなかはおちついて、看病といねむりだけで、安息所みたいでした。ローリイは、エミイにおかあさんの帰ったことを知らせにいきましたが、エミ

イは一刻も早くあいたいののに、す早く涙をかわかしてその気持を
おさえたので、ローリイは一人前の婦人みたいになりっぱな態度だ
とほめ、マーチおばさんも心から同意しました。そして、エミイ
は、ローリイに散歩につれて行ってほしく思いましたが、たいへ
ん疲れているようなので、それもがまんして、ローリイをソファ
にかけて休ませじぶんはおかあさんに手紙を書きました。書
きおわってもどつてみると、ローリイはぐうぐうねむってしまった、
そばにマーチおばさんが、いつになく親切心をあらわして、じつ
とすわっていました。

ところが、エミイのよろこぶことが起りました。おかあさんが
来て下すつたのです。おかあさんのひざにすわって苦しかったこ

とをうち明け、それをなぐさめる微笑と愛撫を得たとき、エミイはこの市で一ばん幸福だったでしょう。二人は礼拝堂であいました。おかあさんは、エミイのこの思いつきをほめました。

「家へ帰ったら、戸だなすみに、聖母とあかちゃん絵をかいてかざるつもりです。イエスさま前にはこんな小さいあかちゃんだと思ふと、そんなに遠くはなれていらつしやるかたではなく、いつもお助け下さるような気がします。」

おかあさんは、ほほえんでうなずきました。

「ああそうだ。おばさんが、今日キツスしてこれをゆびにはめて下さいました。そして、お前はわたしのほこりになるほどいい子だから、そばへおきたいとおっしゃいました。これはめてても、

よろしいでしょうか？」

「美しいですね、でもまだ小さいんだから、すこし早すぎるように思えますね。」

「虚栄心を起さないようにします。ただ美しいからはめたいのではなく、あることを思い出すためです。」

「マーチおばさんのこと？」

「いいえ、利己主義になつてはいけないということ。」

おかあさんは、エミイのまじめは顔つきを見て笑うのをやめました。

「あたし、このごろ、じぶんのわるいお荷物のなかで、利己主義が一ばんいけないと思いました。ベスねえさんは利己主義でない

から、あんなにかわいがられ、なくなると思うと、みんなはあんなに心配するんですわ。あたしベスのようになりたいんです。それで、これをはめてみたらと思うんです。」

「よござんすよ、だけど、戸だなのですみのほうが、もつといいでしょう。よくなろうとまじめに考えたら、半分やりとげたようなものです。では、おかあさんはベスのところへ帰ります。元気でいなさいね。すぐに迎えに来ますからね。」

その晩、メグが安着の知らせる手紙をおとうさんへ書いているとき、ジヨウは二階のベスの部屋にそつといきました。おかあさんを見るとたちどまり、なにか心配そうなようすで、ゆびで髪をかきました。

「どうしたの？」と、おかあさんが手をさしのべてやりながら、尋ねました。

「お話したいことがありますのよ。」

「メグのことですか？」

「まあ、おかあさんの察しの早いこと！ そうなんです。あたし気になるもので。」

「ベスがねむってますから、小さい声でね。あの、まさかマフオットが来たのではないでしょうね？」

「あんな人来たたら門前ばらくわせてやりますわ。」と、ジヨウはおかあさんの足もとにすわりながらいいました。「この夏ね、メグねえさんがローレンス家へ手袋を忘れて来たんです。片方も

どって来ましたが、ローリイが片方をブルツクさんが持っているといつてくれるまで、あたしたちそんなことを忘れていたんです。あの方それをチョツキのかくしにいれていて、それを落したのをローリイが見つめてかかったんです。そうしたら、メグは好きだけど、まだ年はわかいし、じぶんは貧乏だからいい出せないって白状なされたそうです。こと重大ではないでしょうか？」

「メグはあのかたを好いていると思いますか？」

「まあ！ 恋とかなんとか、そんなくだらないこと、あたしわかりませんわ。小説だといろいろ人目にたつ変化があるわけですが、メグにはちつともそんなことはなく、食べたり飲んだり、ふつうの人のように夜もよくねむりますわ。あのかたのこと、あたしが

いっても、あたしの顔をまともに見ますし、ローリーが恋人なんかのじよう談をいっても、すこし顔をあかくするだけです。」

「それでは、メグがジョンさんに興味を持っていないとお思いなのね？」

「だれに？」と、ジョウはびつくりしました。

「ブルツクさんのこと。かあさんはあの人のこと、このごろジョンさんといってるんです。病院でそんなふうによぶようになったもので。」

「まあ、そう、おかあさんはあの人のこと、味方するでしょう。」

あの人はおとうさんに親切にしたんだし、もしメグさんが結婚したいといえ、おかあさんはあの人をしりぞけないでしょう。あ

あ、いやしい！ おとうさんのお世話をして、おかあさんにとり
いって、じぶんを好きにさせるなんて。」とジョウはまたいらだ
たしそうに髪をかきむしりました。

「まあ、そんなに怒らないでね、どういう事情か話してあげます。
ジョンさんは、ローレンスさんに頼まれて、かあさんといっしょ
にいって、つききりで看病して下すつたので、あたしたちは好き
にならずにはいられませんでした。あのかたはメグについては公
正明大で、メグを愛しているが、結婚を求める前にたのしく暮せ
る家を持てるように稼いでおきたいとおっしゃるんです。あのか
たは、メグを愛し、メグのためにはたらくことを許してほしい。
そして、もしメグにじぶんを愛させるようになったら、その権利

を許してほしいとおっしゃった。あのかたは、りっぱな青年です。かあさんたちはあのかたのいうことに耳をかたむけずにはいられませんでした。けれど、メグがあんなにわかくて婚約するのは不承知です。」

「もちろんですわ。そんなばかな話。なにかわるいこと起つてると思つてました。これじゃ予想していたよりもつとわるいわ。いっそのこと、あたしがメグと結婚して家庭のなかに安全にしておきたいわ。」

このおかしな考えに、おかあさんはほほえみました。けれど、またまじめな顔になって、

「あなたには、うち明けましたが、メグにはいわないで下さい。

ジョンが帰って来て、二人があうようになったら、メグの気持がもつとはつきりわかると思いますがからね。」

「おねえさんは、とても感じやすいから、あの人の美しい目を見たら、一たまりもありませんわ。すぐに恋におちてしまって、家の平和もたのしみもおしまいになります。ああ、いやだ。ブルックさんはお金をかきあつめて、おねえさんをつれていき、家に穴をあけてしまいます。あたしつまらない。なぜあたしたちは、みんな男の子に生れなかったんでしょう。」

ジョウは、いかにもおもしろくないというようなようすをして、言葉をつづけました。

「おかあさんも、あんな人おっぱらって、メグには一言もいわな

いで、今までのようにみんなでおもしろくしましうよ。」

「ジョウ、あなたがたは、おそかれ早かれ、家庭を持つことが、しぜんな正しいことです。でも、かあさんはできるだけ長く、娘たちを手もとにおきたいから、この話があんまり早く起つたのを悲しく思います。メグは十七になつたばかりだし、おとうさんもあたしも、二十までは約束も結婚もさせないことにしました。もしたがいに愛し合うなら、それまで待てるでしうし、待つているあいだに、その愛がほんものかどうかもわかります。」

「おかあさん、おねえさんをお金持と結婚させたほうがいいと思いませんか？」

「かあさんは、娘たちを財産家にしたとか、上流社会へ出した

いとか、名をあげさせたいとか考えません。身分やお金があるかたが、真実の愛と美德を持っていて、迎えて下さるならよろこんでお受けもしましょうが、今までの経験からいえば、質素な小さな家に住んで、日日のパンをかせぎ、いくらか不足がちの暮しのほうが、かずすくないよろこびをたのしいものにしてくれるものです。かあさんは、メグがじみな道をふみ出すのを満足に思いません。メグは、夫の愛情をしつかりとつかんでいける素質があつて、それは財産よりももつといいものです。」

「おかあさん、よくわかりました。あたしはメグをローリイと結婚させて、一生らくにさせてあげようと、計画していたんです。」

「ローリイは、メグより年下です。」

「そんなことかまうもんですか、あの人は、年よりふけているし、せも高いし、それで、金持で、親切で……」

「だけど、かあさんは、メグにふさわしいほどローリイが大人とは思いません。そんなこと計画するものではありません。」

「では、よします。人間は、頭にアイロンでものせておけば、大人にならないものならいいけど、つぼみは花になるし、子ねこはおやねこになるし、ああ、つまらない。」

そこへ、書きあげた手紙を持って、メグがそつとはいつてききました。

「アイロンとねこが、どうしたの？」

「つまらない、おしゃべりしてたの。あたし、もうねるわ。い

らっしやいな。」

おかあさんは、手紙に目をとおして、

「けっこうです。きれいに書きました。ジョンによろしくつて、
かあさんがいつてると、書きそえて下さい。」

「あのかたのこと、ジョンとおよびになりますの？」と、メグは
にこにこして尋ねました。

「そうです。あのかたは、家の息子みたいな気がします。あたし
たちは、あのかたが、とても気に入りましたよ。」

「そう聞いて、うれしいと思いますわ。あの人、さびしいかたで
す。おかあさん、おやすみなさいませ。おかあさんが家にいて下
さると、口でいえないほど安心ですわ。」

おかあさんが、メグにあたえたキツスは、やさしく、メグが出ていくと、つぶやきました。

「まだジョンを愛していないけど、まもなく愛するようになるでしょう。」

第二十一 ローリーのいたずら

あくる日、ジヨウはむずかしい顔をしていました。れいの秘密が心の重荷になったのです。メグはわざと尋ねないで、一人でおかあさんの世話をしました。そして、おかあさんは、ジヨウに、あなたは永いあいだ家にとじこもっていたから、外へ行って思い

きり運動でもしなさいといいました。そこで、ジヨウは、ローリイのところへ遊びにいきましたが、このいたずら好きの少年は、ジヨウがなにか秘密をもっているのをかぎつけて、本音をはかせようとし、なあにすっかり知っているといたりそんなことは聞きたくないといったり、しつこい努力を重ねたすえに、とうとうその秘密がメグとブルツク氏に関することだということをつかしました。そして、ローリイは、じぶんの家庭教師が、その教え子に秘密をうちあけてくれないのを怒り、無視されたその侮辱に、なにかしかえしをしようと思いたちました。

ところで、メグにかわったようすがありました。メグは、話しかけられるとびっくりしたり、人から見られると顔をあかめたり、

なやましそうな顔をして裁縫をしたり、おかあさんが尋ねると、どこもわるくないと答え、ジヨウが尋ねると、ほっておいてちようだいと答えました。

「メグねえさんは、あれを空気のなかで感じたんです。あれって恋のことですよ。そして、どんどん進行していくんです。ふきげんで、食慾がなく、夜はねむらないし、「小川の声は銀鈴のようにささやく。」とうたっていたし、ねえ、おかあさん、どうしたらいいんでしょう？」

「待っているほかはありません。親切にしてあげて、おとうさんが帰っているらっしやれば、なにもかかたがつかます。」

そのあくる日、ジヨウがれの郵便局にはいついたものを配

達して、

「メグねえさんのところへお手紙よ。ローリイ、なんだってこんなにいかめしく封をしたんでしよう？」

メグは、手紙を読むと、ただならぬ声をあげ、おびえたような顔をしました。おかあさんもジョウもおどろいてしまいました。

「まあ、ひどい、あなたが書いて、あの不良少年が手伝ったのでしょ。よくもあなたは、あたしたち二人に、こんならんぼうな、いやしいまねができたものねえ。」と、メグは、胸がつぶれでもしたように泣きました。

ジョウは、おかあさんといっしょに、その手紙を読みました。

最愛のマーガレットへ、

わたしはもう熱情をおさえることができなくなりました。帰宅する前にじぶんの運命を知りたく思います。まだ御両親には話さないでいますが、わたしたち二人が愛し合っていることがわかれば、御承認下さると思います。ローレンスさまは、必らずわたしを適当なところへお世話下さるでしょう。そのときは、愛する少女よ。わたしを幸福にして下さるでしょう。なお、御家族にはなにごともおもらしなきよう。ただ希望の一言をローリーさんの手をとってお送り下さい。あなたにささげたジョンより、

「まあ、まあこのいたずら小僧！ あたしがおかあさんとの約束をまもっているしかえしなんだ。いつて、うんと怒って、ひきずって来てあやまらせる。」と、ジョウは、かつとなり、すぐにも

とび出しそうにしましたが、おかあさんが、ひきとめきつい顔を
していいました。

「ジョウ、お待ち、まずあなたが、じぶんの証をたてなければな
りません。あんたは、これに関係ありませんか？」

「いいえ、おかあさん。けっして。あたし今までにこの手紙見た
こともなく、なんにも知りません。もし関係したのなら、もつと
うまく、もつとじょうずに書きます。あたしだって、ブルツクさ
んがこんな手紙書かないことわかってますわ。」と、ジョウはい
まいましそうに、その手紙を床にたたきつけました。

「あのかたの書いたのと似ています。」と、メグはそれをじぶん
の手にあるのと同じくらべながら口ごもりました。

「メグ、まさかあなたは返事は出さなかったでしょうね？」と、おかあさんはせきこんでいうと、メグは、はずかしそうに、

「出しましたわ。」

ジヨウは、

「あたし、あのいたずら小僧をひっぱって来て白状させ、うんとしかってやります。」と、ふたたび走り出そうとしました。

「およし、考えていたよりも、こまったことになりました。メグ、みんなお話しなさい。」

おかあさんは、メグのそばに腰をおろし、ジヨウをしつかりとつかまえました。

「はじめの手紙をローリイから受取って、おかあさんにうち明け

るつもりでしたが、ブルツクさんが好きだとおっしゃったこと思
い出して、四五日くらい秘密にしといてもいいと思ひましたの。
お許し下さい、ばかなまねをしたばつです。二度とあのかたに顔
を合すことができません。」

「それで、なんとお返事しましたの？」

「そんなことを考えるのはまだ年がわかしいし、それにおかあさん
に秘密を持ちたくないから、おとうさんにいつて下さい、御親切
はありがたいと思ひますが、ただのお友だちとしてつき合ひをし
ていきたいと申しあげましたの。」

おかあさんは、いかにも満足そうにほほえみ、ジヨウは手をた
たいて、

「おねえさんは、つつしみ深いわ、メグ、行ってちょうだい、あの人が、なんと行ってよこした？」

「恋文なんて出したおぼえはないし、いたずら好きの妹さんが、わたしたちの名を勝手に使うのは遺憾だと書いてありました。親切なお手紙でしたけれど、あたしはずかしくて。」

メグはしおれておかあさんによりそい、ジヨウはローリイをのしりながら部屋を歩きまわりましたが、ふとたちどまり、二通の手紙をとりあげて見くらべていました。

「二つともブルツクさん見ていないと思うわ。ローリイが二つとも書いて、あたしが秘密をいわなかったものだから、おねえさんのをとって書いて、あたしをやりこめようというんだわ。」

「ジョウ、秘密なんか持つてはだめよ。」と、メグがいました。

「いやだわ、おかあさんから聞いた秘密よ。」

「いいの、ジョウ、かあさんはメグをなぐさめますから、あなたはローリイをつれていらつしやい。すっかりしらべて、こんないたずらやめさせます。」

ジョウはかけ出していき、おかあさんはメグに、ブルツク氏のほんとの気持を、すっかり話して聞かせました。

「それで、あなたの気持はどう？あの人があなたのために家庭がつくれるのを待っていますか？それとも、なにもきめないでおきますか？」

「今度のことで心配させられたので、これからずっと、もしかし

たら、いつまでも、恋人なんかのことににかかわりたくありません。もしあのかたが、こんなばかげたことを御存知ないなら、いわないで下さい。ジヨウとローリーにも口どめして下さい。あたし、だまされたり、からかわれたりしたくありません。ほんとに、はじさらしですわ。」

やさしいメグが、いつになく怒っているのを見て、おかあさんは、けっしてしやべらせぬこと、これからもよく注意するといつて、なだめました。

ローリーの足音が聞えると、メグは書斎にかけこみました。ジヨウは、かれが来ないといけないと思って、なんの用事か告げませんでした。おかあさんの顔を見たとき、すぐに察して帽子を

ひねくりまわしました。ジヨウは、部屋から出ていくようにといわれ、犯人の逃亡をふせぐために、玄関へ来ていましたから、会見のようは、メグにもジヨウにもわかりませんでした。話がすんで二人が部屋によびこまれたとき、ローリイはいかにも後悔しているようでした。メグに、ローリイは謝罪し、ブルツク氏がこのいたずらについては、なにも知らぬと保証しました。メグはそれでほっとしました。なお、ローリイは、きつぱりといいました。「ぼくは死んでもブルツク先生に話しません。どうか許して下さい。だけど、一ヶ月くらいあなたから口をきいてもらえなくても、しようがないと思つています。」

「許してあげますわ、でも、あまり紳士らしくないやりかたです

わ、あなたが、こんな意地わるをなさろうとは思いませんでした。」

ジヨウは、そのあいだも、ひややかな態度で立っていました。非難の気持ちをゆるめないようにつとめました。ローリイは、すっかり感情をそこね、話がすむと、おかあさんとメグにあいさつして出ていってしまいました。

ジヨウは、ローリイにもつと寛大にすればよかったと思いました。おかあさんとメグが二階へいってしまおうと、ローリイにいたくなり、返す本をかかえておとなりへ出かけていきました。女中にむかって、

「ローリイさん、いらっしやいますか？」と、尋ねると、在宅だ

があわないでしようといひます。病氣かと重ねて尋ねると、

「いいえ、じつはおじいさまと口論なさいまして、お怒りになつて、お部屋へ閉じこもつてしまつて、食事の支度ができたので、扉をたたいたのですが御返事ありません、おじいさまもお怒りで、まったく、こまつております。」と、いう返事でした。

「あたしいつて、ようす見て来ましよう。二人ともこわくないから。」

ジョウはあがつていき、ローリーの部屋の扉をたたき、よせといつても、かまわずたたき、扉を開けたとき、さつととびこみました。そして、床にひざまずき、へりくだつて。

「意地わるしてごめんなさい。仲なおりに来たの、仲なおりする

まで帰らない。」と、いいました。

ローリイは、すぐに仲なおりして、ジヨウを立たせました。だが、まだぶんぶん怒っています。どうしたのか尋ねると、「きみのおかあさんから、だまっっているといわれたことを、しゃべらなかつたもので、おじいさんからこづきまわされたのだ。おじいさんは、ほんとのことをいえというが、メグのかけり合いさえなければ、ぼくのやっていたはずだけは、いうつもりだったが、それができないから、だまっつてがまんしたんだ。だけど、しまいには首をつかまえたんで、ぼくはかっとなつて、なにをやり出すかわからないので、部屋からとび出したんだ。」

「そうよ、きつとおじいさんも後悔していらつしやるわ。仲なお

りなさい、あたしもいつしよにいつてあげるから。」

「だめだ、わるくないのに、二度もあやまるのはいやだ。だいたい、おじいさんは、ぼくをあかんぼあつかいになさる。かれこれ世話をやいてほしくないということを、おじいさんに知らせてやるんだ。」

「では、あなたこれからどうするの？」

「おじいさんがあやまつて、ぼくが、どんなことがあつたのか話せないといつたら、信用してくれればいい。」

「それや、むりだわ。あたしでできるだけ説明してあげるわ。あなたも、ここにいつまでもいて、芝居がかつたまねをして、なんの役にたつものよ？」

「ぼくは、いつまでも、ここに居るつもりはないよ。そつと家出して、旅行にいつちやうんだ。おじいさんは、ぼくがいなくて、さびしくなつたらわかるだろう。」

「そうかもしれないけど、とび出しておじいさんに心配かけるのわるいわ。」

「お説教はよしてくれ。ぼくはワシントンへ行って、ブルツク先生にあうんだ。あすこはおもしろいよ。いやな目にあつたんだから、うんと遊ぶんだ。」

「いいわね、いつしよにいければ、いいんだけど。」と、ジョウが忠告者である立場を忘れてそういうと、ローリイは、

「来たまえ、すばらしいぞ、びっくりさせるんだ、お金はぼく持

ってるし。」

ジョウの趣味にかなった突飛な計画でしたから、いきたかったのですが、窓からじぶんの家を見ると、首をふって、

「だめ、あたし男の子だったら、いっしょにいくんだけど。」

ローリイは、なおもすすめました。もうジョウはじぶんの立場をまもって、

「おだまんなさい、このうえ、あたしに罪を重ねさせないでちやうだい。それよか、もしおじいさんに、あなたをいじめたお詫びをさせたら、家出をやめる？」

「ああ、だけどそんなこと、きみにできないよ。」

けれど、ジョウは、やれると思って、ローレンス老人の部屋へ

いきました。そして、本を返し、つぎの第二巻を借りるために、梯子にのって書庫のたなをさがしました。そして、なんといつて話を切り出そうかと思っていると、老人のほうから、ジョウがなにかたくらんでいると見てとつたらしく、

「あの子は、なにをしたのかね？　なにかいたずらをしたにちがいないが、一言も返事をせぬからおどしつけたら、じぶんの部屋にはいつてかぎをかけてしまった。」

「あのかた、わるいことをしたのです。けれどみんなで許してあげました。そのことは、母にとめられていますから、申せません。ローリイは白状して、ばつを受けました。わたしたちは、ローリイをかばいません。ある人をかばうために、だまっているのです。」

ですから、おじいさまも、どうかこのことには立ちいらないで下さい。かえって、いけません。」

「だが、あんたがたに親切にしてもらっていないながら、わるいことをしたのなら、わしはこの手でたたきのめしてやる。」

老人の心は、なかなかとけませんでしたが、ジョウは、そのわるいことが、たいしたことでないように、事実にはふれないで、かゝる話し、やつとうなずかせました。けれど、この際、すこし老人にもじぶんのしうちを考えるようにしてあげたいと思つて、

「おじいさまは、ローリイに親切すぎるくらいですけど、ローリイがおじいさまを怒らせたるときには、すこし気がみじかくはないでしょうか？」と、正直にいいました。

「いや、あなたのいうとおりじゃ、わしはあの子をかあいがつて
いるが、がまんのならぬほどわしをじらすようなこともする。こ
んなふうだと、どうなるかな。」

「申しあげましょうか？あの人、家出しますわ。」

老人の顔は、さつと青くなり、美しい男の肖像画を見あげまし
た。それは、わかいころ家出して、老人の意にそむいて結婚した
ローリーの父母でありました。ジヨウは、老人がくるしい過去を
思い出しているのを察し、あんなこといわなければよかったと後
悔しました。それで、ジヨウはあわてていいました。

「でも、あの人、よつぽどのがないと、そんなことしません
わ。ただ勉強にあきると、そんなことをいっておどかさだけなん

です。わたしだって、そんなことしたいと考えます。髪をきつてからよけいそうです。だから、二人がいなくなったら、二少年をさがす広告を出して、インドいきの船をおさがし下さい。」

ジヨウは、こういつて笑ったので、老人もほつとしたようでした。

「おてんば娘は、とんでもないことをいいなさる。子供はうるさいが、いなくちやこまる。もうなんでもないといつて、食事にあるの子をつれて来て下され。」

ジヨウは、わざと、すなおにいうことをきかないで、詫状を書いて形式的にあやまれば、ローリイは、じぶんのばかもわかり、きげんをなおして来ますといつわりました。

「あなたは、なかなかくえない子じや。でも、あなたやバスに、
いいようにされてもかまわん。さ、書こう。」

老人は、本式の詫状を書きました。ジョウは、それを持ってロ
ーリーの部屋にいき、扉の下からそれをなかへいれ、きげんをな
おして、おりて来るようにいたしました。ローリーは、すぐおりて
来ました。階段のところまで、

「きみは、えらいな。しかられなかった？」

「よく、わかって下すったわ。さ、新らしい出発よ。御飯を食べ
れば気もはれる。」

ジョウは、さっさと帰り、ローリーはおじいさんにあやまり、
おじいさんもすっかりきげんをなおし、この事件はすっかり片づ

きました。

けれど、メグは、この事件のために、ブルツク氏へ近づいたの
でした。あるとき、ジョウは、切手をさがすために、メグの机の
ひき出しをさがすと「ジョン・ブルツク夫人」という落書にして
ある紙片がありました。ジョウは、悲しそうなうめき声とともに、
その紙片を火になげこみ、ローリーのいたずらが、じぶんにとつ
ての、不幸な日を、早めたことをしみじみと感じました。

第二十二 たのしい野辺

その後の数週間は、あらしが吹き去った後、日光がさしたよう

でした。おとうさんは、新年になれば帰宅するといつて来ました。ベスは、書斎のソファまでいつて横になることができるようになり、子ねこと遊んだり、人形の服をぬったりしました。ジヨウは、まい日ベスを散歩につれ出し、メグはおいしい料理に腕をふるいました。エミイは、ねえさんたちに、できるだけのたからものをあげ、その帰宅を祝福されました。

クリスマスが近づくにつれ、いろんな計画がはじめられました。ジヨウは、このいつもとちがうおめでたいクリスマスを祝うために、とてつもない、ばかげたお祭りを提案して、みんなを大笑いさせました。ローリーも、とつぴな計画をたて、勝手にさせておけば、花火でも凱旋門でも、こしらえかねないいきおいでした。

ただ者でないジヨウとローリイは、妖精のように夜中に起きてはたらしき、ベスのために、とてつもないものを庭先につくりあげました。それは、雪姫でひいらぎの冠をいただき、片手には花や果物をいれたバスケットをさげ、片手には新らしい譜本を持ち、肩に赤い毛布をまきつけ、口からクリスマスの祝歌を書いた吹流しを出していました。ベスは窓ぎわまでかつがれていき、この雪姫を見てどんなに笑ったでしょう。

祝歌というのは、こうです。

ユングフラウからベスへ、

ベス女王さま おめでとう

ちつともくよくよなさらずに

たのしく平和にすこやかに
お祝いなされよクリスマス

はたらき蜂さん果物食べて
お花のにおいをかぎなさい
譜本はピアノをひくため
毛布はおみ足つつむため

ジョアンナの肖像は

ラファエル第二世がねっしんに
きれいで、よくにるように
かきあげたもの、いいでしょう。

あかいリボンもあげましょう

ねこの夫人の尾のかざり

アイスクリームはペグの作

桶にもりあがるモン・ブラン山

アルプス娘のこのわたし

つくったローリイとジヨウ

雪の胸にひそませた

あつい情をお受け下さい

雪姫の贈りものを、ローリイがはこび、ジヨウがそれを贈るため、こっけいな演説をしました。ベスは、雪姫の贈りもののお

いしいぶどうを食べて、

「あたし幸福でいっぱい、これでおとうさんがいらしたら、もうどうしようもないわ。」と、いいました。

「あたしも幸福」と、ジョウも、前からほしがって、やっと手に入れた二冊の本アンデインとシントラムのはいつているかくしをたたきながらいいました。

「あたしだって、そうよ。」と、エミイはおかあさんからいただいたマドンナとその子の版画をながめながらいいました。

「もちろん、あたしも。」と、メグは生れてはじめて手にした絹のドレスにさわりながらいいました。それはローレンス氏が、くれるといつてきかなかったのです。

「かあさんだつて、そうですねよ。」と、おかあさんも満足そうに
いって、今しがた娘たちが胸にとめてくれたブローチをなでまし
た。

ところが、それから三十分の後に、まるで小説にでもありそう
な思いがけないうれしいことが起りました。それは、ローリイが
興奮して客間をのぞき、

「さあ、マーチ家へまたクリスマス・プレゼントがとどきました
よ。」と、いって、すぐに、すがたをけしたことからはじまりま
した。みんなは、はじかれたように、なにごとかと、ローリイの
言葉にかくされたものを考えていると、首まきをしたせの高い人
がもう一人のせの高い人の腕によりかかりながらあらわれました。

あつと、みんなはさげんでおしよせ、たちまちとりかこみ、すがりつき、よろこびのうずが家のなかにまきかえりました。ああ、その人はおとうさんでした。そして、つづく笑い声、あんまりうれしいので、みんながいろんな、らちもないしくじりをしたのが、よけいおかしく思われました。やっと笑い声がしずまると、ブルツク氏はローリイをうながして帰り、おとうさんとベス、二人の病人はしずかにソファにかけました。

おとうさんは、上天気になったので、医者か帰宅を許してくれたこと、それで、わざとふいうちに帰って来たこと、ブルツク氏がよく世話をしてつれて来てくれたことなどを話しました。

ところで、その日のごちそうは、マーチ家では、はじめのす

ばらしいクリスマスのごちそうで、七面鳥のむし焼き、ほしづどういりのプディングゼリイなど、ハンナができるかぎり腕をふるいました。そして、お客はローレンス老人、ローリイ、それからブルック氏で、健康を祝して乾杯し、語りあい、歌を合唱しあつて、ごちそうを食べ、心ゆくばかりたのしいときをすごしました。

食事をおわつてから、家族は炉のまわりに集りました。娘たちは、今年の思い出話をしましたが、じつと耳をかたむけていたおとうさんは、満足そうにいました。

「小さい巡礼さんたちの旅としては、今年のあと半分はくるしい旅だったね。だけど、みんな勇ましく歩いて来たし、めいめいの重荷も、うまいぐあいにころげおちそうだね。」

「どうしておわかりですか？ おかあさんからお聞きになりました？」と、ジヨウが尋ねました。

「まだ、そんなに聞いてはいませんが、わらの動きかたで風向きがわかるね。それで、おとうさんは、今日いろいろなものを発見した。まず、これが一つ。」と、おとうさんは、そばにすわっているメグの手をとって、「あれた手だね。やけどもある、まめもある。だが、むかし美しかったときよりも、今のほうが美しいね。

この手は家庭を幸福にしていく、勤勉な手だ。」

おとうさんは、にっこり笑って、むかいがわにすわっているジヨウをながめて、

「髪をきつたが、一年前の息子のジヨウではなくなった。身じま

いもきちんとして、すっかり女の子になった。今は看病と心配のつかれで青い顔をしているが、ずっとおだやかな顔つきになった。むかしのおてんば娘がいなくなつて、すこしさびしいが、そのかわり頼もしい心のやさしい娘があらわれた。」

「こんどはベスね。」と、エミイはじぶんの番の来るのを待ちどおしく思いました。

「ベスは、病気でこんなに小さくなつたから、うっかりしやべつてゐるあいだに、どこかへ消えてしまひそうだね、まあ、前ほどはにかまなくなつたようだが。」と、おとうさんは、もうすこしでこの子を失うところだと思ひ、しつかりとだきしめ、「ベス、どうかいつまでもじょうぶでいてほしいね。」

みんなだまって、それぞれなにか考えていました。と、おとうさんは、足もとのエミイの髪をなでながら、

「エミイは、食事のとき、いつもとちがって、鳥の足の肉をとつたし、またお昼からはお使いをしたし、しんぼうづよく、みんなのお給仕もしたね、おしやれもしくなつたし、指にはめているきれいな指輪のことも口に出さなかつたね。これでおとうさんには、エミイがじぶんのことより、他人のことをよけい考えるようになったことがわかってうれしい。」

おとうさんの話がすむと、ジョウがバスにむかつて尋ねました。「バス、あなたなにを考えているの？」

「あたし、今日、天路暦程のなかで、クリスチャンとホープフル

が、いろいろくるしい旅をつづけたあげく、年中ゆりの花のさい
ていてたのしい緑の野辺について、ちようど今のあたしたちのよ
うに、目的地にむかって、また出発する前に、そこでたのしく一
休みするところを読みました。」と、ベスはいつて、おとうさん
のそばをはなれてピアノの前にいきました。

「お歌の時間でしよう。おとうさんのお好きな、巡礼の聞いた羊
飼いの少年の歌、あたし作曲しましたの。」

そういつて、ベスはピアノをひき、二度ともう聞けないかと思
った美しい声で、ベスにふさわしい古風な讚美歌をうたいました。
へりくだるものにおそれなく

ひくきにあるものにはこりなし

まずしきものは、とこしえに
神のみちびきえらるべし

われもつものにことたれり
たとえおおくもすくなくも

ああ、そのたるをしるこころ
主のこころにかなうべし

おもにはかたにおもくとも、
じゅんれいのたびをつづけつつ
このよのさちはうすくとも

主のしゆくふくをうけるならん。

第二十三 マーチおばさん

はたらき蜂が、女王蜂のまわりにむらがるように、おかあさんと娘たちは、そのあくる日、ベスのそばの大きなイスに身体をうずめたおとうさんのまわりにたかり、あらゆる親切なお世話をしました。ただ一人、ふしぎなかわりかたはメグで、そわそわしたり、気がぬけたようになってしましました。

午後、ローリーが、窓ぎわのメグを見て、雪のなかに片ひぎをつき、胸をうって髪をかきむしり、哀願するように、りよう手を

組み合わせで、拝むようになつこうをしました。メグが、ばかなまねはおよしなさいというと、ハンカチで空涙をふいていつてしまいました。

「おばかさん、なんのつもりかしら？」と、メグがいうと、ジョウが

「あなたのジョウが、こうなるという実演なのよ。あわれでしょう。」と、せせら笑っていました。

メグは、顔をしかめ、わたしをこまらせないで、今までどおりみんなで遊んでいればいいといいますと、ジョウは、

「そうはいかないわ、おかあさんにもあたしにも、よくわかるけど、おねえさんはちつともおねえさんらしくなくなつたわ。遠い

ところへいっておしまいになったみたい。あたしおねえさんみたいに、ぐずぐずしてるのきらい。だから、そうする気ならさつきときめるといいのよ。」

「あたしのほうからいい出せるものではないし、おとうさんはあのかたに、あたしのことわかすぎるとおっしゃったんですもの、あのかたもいい出せないわ。」

ジョウは、メグが気がよわいから

「あの人にいい出されたら、なんていっていいかわからなくなり、泣き出すか顔をあかくするか、ノウがいえないで、あの人と思うようになつてしまう。」と、いいますと、メグは

「あなたの思うほど、あたしばかでもよわ虫でもないわ。あたし

にだって、いうことはいえるわ。」とやりかえしました。

それから、恋愛についていろいろ話したあげく、メグは、もしいい出されたら、

「あたしすっかりおちついていうわ。ありがとうございます。ブルックさま、けれど、まだ年がわかすぎますので、今のところ婚約などできませんの。父もおなじ意見でありますの。どうかにもおっしゃらずに、今までどおりお友だちとしておつき合い下さいませ。」

「ほう、いえるかしら。あのかたの感情を害することを気にして、きつと敗けてしまうわ。」

「いいえ敗けるものですか、つんとすまして部屋を出ていくわ。」

そのとき、だれか扉をたたきました。開けると、それはジョンでした。

「こんにちは、こうもりがさをとりに来ました。あのう、おとうさんの御容態、今日はどうかと思ひまして。」

ジョンは、メグとジョウの、意味ありげな顔を見て、ややあわてながらいいました。

「たいそう元気でいますわ。かきたてにいますからつれて来ます。それから、あなたのお見えになったことも知らせて来ます。」と、ジョウは、かさと、おとうさんを、ごつちやにした答えをしながら、メグに例の口上をいわせ、つんとすまして部屋を出ていかせると、じぶんは部屋を出ました。メグは、ジョウのすがたが

見えなくなると、すぐに、

「おかあさんが、お目にかかりたたがっていますわ。どうぞおかけになって、すぐよんで来ますから。」

ジョンは、メグにむかって、

「お逃げにならなくてもいいでしょう。ぼくがこわいんですか？」と、ひどく、感情を害したような顔つきでしたので、メグはびつくりして、

「父にあんなに親切にして下さったのに、どうしてこわがりましょう。どうしてお礼を申しあげたらいいかと思っっていますのよ。」
「どうしてお礼をしていただくか、いつてあげましょうか？」と、
ジョンは、メグの手を握りしめ、愛情をこめて見るので、メグは

「いいえ、いいえ、どうぞおつしやらないで。」と、やはりこわそうに手をひっこめようとしました。

「ごめいわくはかけません。すこしでもぼくに好意を持って下さるかどうかわりたいたいです。ぼくは心からあなたを愛しています。」

さあ、今こそおちついて、例の文句をいうべきでしたが、すべて忘れ、うなだれて、わかりませんわと答えただけで、それもあまりにひくかったので、ジョンは聞きとるために身をかがめなければなりませんでした。そして、ジョンは、すこしぐらいめいわくをかけてもいいと思つたらしく、満足そうに、

「ぼく、いつか報いられるかどうか、うかがいたいです。そう

でない仕事もできません。」と、いいました。

「でも、わたしはまだわかすぎますから。」

「ぼくは待っています。そのうちに、ぼくを好きになるようになって下さい。ぼくは教えてあげたいのです。これはドイツ語よりやさしいのです。」

ジョンは、懇願するようでしたが、一面、なんとなく、たのしそうで、成功をうたがわぬというような満足そうなほほえみさえうかべていました。メグは、アンニイ・マフオットのことを思うかべ処女の優越感から気まぐれな気持にかられ、

「わたし、そんな気持になれませんわ。どうぞお帰り下さい。」と、いつてしまいました。それを聞いたジョンは、メグのそのふ

きげんにおどろき、

「本気でそうおっしやるのですか？」と、部屋から立ち去ろうとするメグを追って、心配そうに尋ねました。

「ええ、あたし、そんなことで気をもみたくありませんわ。父も気にかけないようにといたしました。早すぎますし、そんな気になれませんか。」

「あなたのお気持がかわって来てほしいものです。ぼくは待つています。ぼくをからかわないで下さい。」

「あたしのことなんか考えないで下さい。そのほうが、あたし、けっこうなのです。」

メグは、恋人の忍耐とじぶんの力を試そうとする気味のわるい

満足を味わいながらいいました。ジョンは、青い顔になり、いかにもなやましそうでした。この興味ふかい場面に、マーチおばさんが、びっこをひきながらはいつて来なかつたら、そのつぎにはどんなことが起つたでしょう？

マーチおばさんは、ローリイからマーチ氏が帰宅したことを聞くと、すぐさま甥にあいに馬車をのりつけました。びつくりさせるために案内も乞わずにはいつて来ましたが、たしかにメグとジョンはおどろき、メグはとびあがり、ジョンは書齋へ逃げこもうとしました。

「おや、まあ、これはいつたい、なにごとですかい？」と、老婦人は杖で床をたたき、二人がそこにいたのをあやしみました。

「あの、おとうさんのお友だちですの。」

「その男が、お前さんの顔をなぜあかくさせたかね？　なにかま
ずいことでもあったね。」

「ただお話しただけです。ブルツクさんは、こうもりがさをと
りにいらしたのです。」

「ほう、ブルツク、あの子の家庭教師がね？　ああ、わかりまし
た。ジョウがおとうさんのことづけをいいに来たとき、まちがえ
て口をすべらしたのを聞いた。お前さんは、承知しはしないだろ
うね？」

「しっ！　聞えますわ、おかあさんをよんでまいりましょうか？」
「まだいい。お前にいうことがあります。お前がその男と結婚す

る気なら、わたしはびた一文もあげないからね、よくおぼえておき、そして、りこうにおなりよ。」

老婦人は、どんなにやさしい人にも反抗心を起させる人で、今もメグは、強制的にそういわれると愛情と片意地で、ジョンを好きになろうと思ひ、いつになく強気で、

「あたしは、好きな人と結婚します、お金はあなたの好きな方にあげて下さいませ。」

「なんですって！ そんな口のききかたをして、今に貧乏人との恋にあきて後悔しますよ。」

「お金持と、愛のない結婚するよりましですわ。」と、メグはゆずっていません。

老婦人は、メグがこんなことをいい出したのでおどろき、今度はやわらかに説き伏せるつもりで、

「わたしは親切からいうんです。お前さんはりっぱな結婚をして家の者を助けなければならぬのです。」

「いいえ。両親ともそんなこと考えません。両親ともジョンが好きです。貧乏ですけれど。」

「お前さんの両親は、世間知らずのねんねだからね。そのブルツクとやらは、貧乏で、金持の親類もないそうだね。」

「でも、親切な友だちがたくさんいますわ。」

「友だちがなんの力になるものか、それに、その男には職業もないんでしよう?」

「まだ、ありません。ローレンスさまがお世話して下さいます。」
「あんな変物が頼みになるものかね。とにかくお前はもうすしりこうだと思っていたが。」

「ブルツクさんは、りっぱなかたです。かしこいし、才能もありますし、勇気もおありになります。わたしのこと思つて下さるのを、わたしは誇りにしています。」

「あの男は、お前に金持の親類があるから、それでお前を好きになつたんだよ。」

「まあ、どうしてそんなことおっしゃるんですか？ わたしは、どうしても、あのかたと結婚します。」

メグは、そこまでいって、もしかジョンに聞かれたらと思つて、

はつとして言葉をきりましたが、マーチおばさんはたいそう怒つて、

「よろしい、強情だね、あたしは、もうお前のおとうさんにあう気力もない。結婚したからって、あたしからなにかもらうなんて考えたってだめです。永久におさらばだよ。」と、おそろしい顔つきで帰っていきました。のこったメグが、ぼんやりつつ立つていると、ジョンが来て、

「メグ、ぼくのこと弁護して下さいありがとうございます。それから、おばさんにはあなたがわずかにしろぼくのこと愛して下さいることを証明して下さいましたお礼をいいますよ。」

「おばさんが、あなたのわる口をいい出すまでは、どんなにあな

たを思っていたか、わたしにもわかりませんでしたわ。」

「では、ぼく帰らないで、ここにいて幸福になれますね、え？」と、ジョンがいました。ここでもつんとすまして立ち去るわけでしたが、メグは、ええとやさしくささやいて、ジョンの胸に顔をうずめ、ジヨウの手前、永久に頭のあがらぬことになってしまいました。

十五分ほどして、ジヨウが二階からおりて来て、予期しなかった変化におどろき、まるで息の根がとまるほどでした。しかも、ジョンは、ぼくたちを祝って下さいというではありませんか。ジヨウは悲痛なさげびとともにとび出し二階へかけあがり、

「ああ、たれか早く階下へ行って下さい。ジョンがおかしなまね

をして、おねえさんがよろこんでいるわよ！」

おとうさんと、おかあさんは、いそいで階下へいきました。ジョウは、ベストとエミイにおそろしいニユースを聞かせながら、のしりわめきました。二人ともむしろそれをうれしいニユースと考えていたので、ジョウはじぶんの屋根部屋へいき、そのなやみをねずみたちのうち明けました。

その日の午後、客間でなにかあったか、だれも知りませんでした。けれど、いろいろの話がかわされ、おとなしいジョンが、じぶんの望みや計画を非常な熱心さで話したことは、たしかでありました。

夕飯のベルが鳴り、みんなが食卓についたとき、ジョンとメグ

は、この上もなくたのしそうに見えたので、もうジヨウも、さつぱりと、じぶんの感情を流し、二人を祝福する気持になりました。むろん、エミイもベスも、心からよろこび、エミイは二人をスケッチしようと思いたちました。この古ぼけた部屋にこの一家の、最初のロマンスが、まばゆいばかりかがやき出し、たいしたごちそうはありませんでしたが、それはそれはたのしい食事でありました。

おかあさんがいいました。

「今年は悲しみをおいかけられるように、よろこびがやって来る年らしいですが、その変化がはじまったようです。でも、すべてうまくいきそうで、けっこうです。」

「来年は、もつといい年になればいいと思います。」と、ジヨウにはメグをうばわれたことは、いい年とは思えませんでした。

「ぼくは、さ来年が、もつといい年になってほしいと思います。ぼくの計画が進んでいけば、きっとそうなります。」と、ジヨンがメグにほほえみかけながら、そういうと、結婚の日が早く来ればいいと待ち遠しく思っているエミイが尋ねました。

「待ち遠しくありません？」

「勉強することがありますから、みじかいくらいですわ。」と、メグが答えました。

「あなたは、ただ待っていて下さればいいんです。はたらくのはぼくがやります。」と、いつて、かれは仕事の手はじめとして、

メグのナプキンをひろってやりました。

それを見てジョウは、氣にくわなかつたのですが、そのとき、玄關の扉がばたんと開いたので、

「ローリーだわ、これでやっと氣のきいた話ができそうだわ。」
と考えましたが、ローリーが来たときすっかりあてがはずれたことがわかりました。というのは、この事件のすべてがじぶんの考えで成立したというような、あやまった考えを起して、ジョン・ブルック夫人のために、結婚式用の大きな花束をかかえて来たからです。

「ぼくは、ブルック先生が、じぶんの考えどおりになさることがわかっていました。いつだって、そうなんです。やりとげようと

決心なさると、空がおちて来ようと、やりとげておしまいになります。」とローリイは、花束とお祝いの言葉とをささげながらいきました。

「おほめにあずかって恐れいります。ぼくはそれを未来のよい前ぶれとしてお受けいたします。そして、ぼくたちの結婚式には、あなたを招待することをきめましょう。」

「地球の果てからでもまいります。そのときのジヨウの顔を見るだけでも、大旅行して来るねうちがあります。きみは、うれしそうな顔をしていませんね。どうしたの？」と、客間のすみのほうへいくジヨウの後についていきました。みんなは、ローレンス氏を迎えるために、そこへ集っていきました。

「あたし、この結婚に不賛成だけど、がまんすることにしたら、一言も反対はいわない。だけど、メグをやってしまったの、どんなにつらいか、あなたにはわからないわ。」と、いったジヨウの声はかすかにふるえていました。

「やってしまうんじゃない。半分だけのこることになる。」

「ううん、もとのとおりにはない、あたしは一ばん大切な友だちをなくしたのよ。」

「だけど、ぼくがいる。たいしてやくにたたないけど、一生きみの味方をする！」

「それや、わかってるわ。ありがたいと思うわ。ローリイ、あなた、いつだって、あたしをなくさめてくれたわね。」と、ジヨウ

は感謝をこめてローリーの手をにぎりました。

「さあ、いい子だから、うかぬ顔をするのおよし。メグさんは幸福になるし、ブルツク先生は就職なさるし、おじいさまはよくめんどろを見てあげる、メグがいつちまったら、ぼくも大学を卒業するしそしたら、いつしよに外国を漫遊するか、どこかへすてきな旅行をしよう。なぐさめになるよ。」

「そりや、いいなぐさめねえ、でも、三年のあいだに、どうなるかわからないわ。」

「そりやそうだが、きみは未来をのぞいて、ぼくたちがどうなるか見たかない？」

「あたし、見たくないわ、なにか悲しいことが見えるかもしれな

いもの。今はみんな幸福だけど、これ以上、幸福になれると思わないわ。」

ジョウは、そういつて部屋を見まわしましたが、かがやくばかりにたのしそうなありさまに、ジョウの目もかがやきました。

おとうさんとおかあさんは、二十年前にはじめられたじぶんたちのロマンスの第一章を、心しずかによりみがえらしてすわっていました。エミイは、二人の恋人がみんなからはなれて、じぶんたちだけの美しい世界にすわっているすがたを写生していました。ベスは、ソファに横になって、ローレンス老人とたのしそうに語っていました。老人は、ベスの手をにぎりしめ、その小さい手がじぶんを、彼女の歩いて来た平和な道にみちびいてくれるような

気がしていました。

ジョウは、彼女らしい、きりつとしたしずかな表情で、ひくいイスによりかかり、ローリイはそのイスのせにもたれ、あごを彼女のちぢれ毛の頭とならべ、二人をうつしている長い鏡のなかの彼女にほほえんでうなずいていました。

こうして、メグとジョウとベスとエミイが、たのしくしているところへ幕はおりました。この幕がふたたびあげられるかどうか、それは、この「愛の姉妹」とよばれる家庭劇の第一幕が、いかにお客さまがたに、迎えられるかによるのであります。

おわり。

青空文庫情報

底本：「若草物語」京屋出版社

1948（昭和23）年6月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「勝ち↓がち　かも知れ↓かもしれ　給↓たま　（て）見↓（て）み」

また、底本では一部連濁の「づ」が「ず」になっていますが、「づ」に統一しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年10月16日作成

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

若草物語

LITTLE WOMEN

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 ルイザ・メイ・オルコット L. M. Alcott
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>